2022年日本語ラップの旅

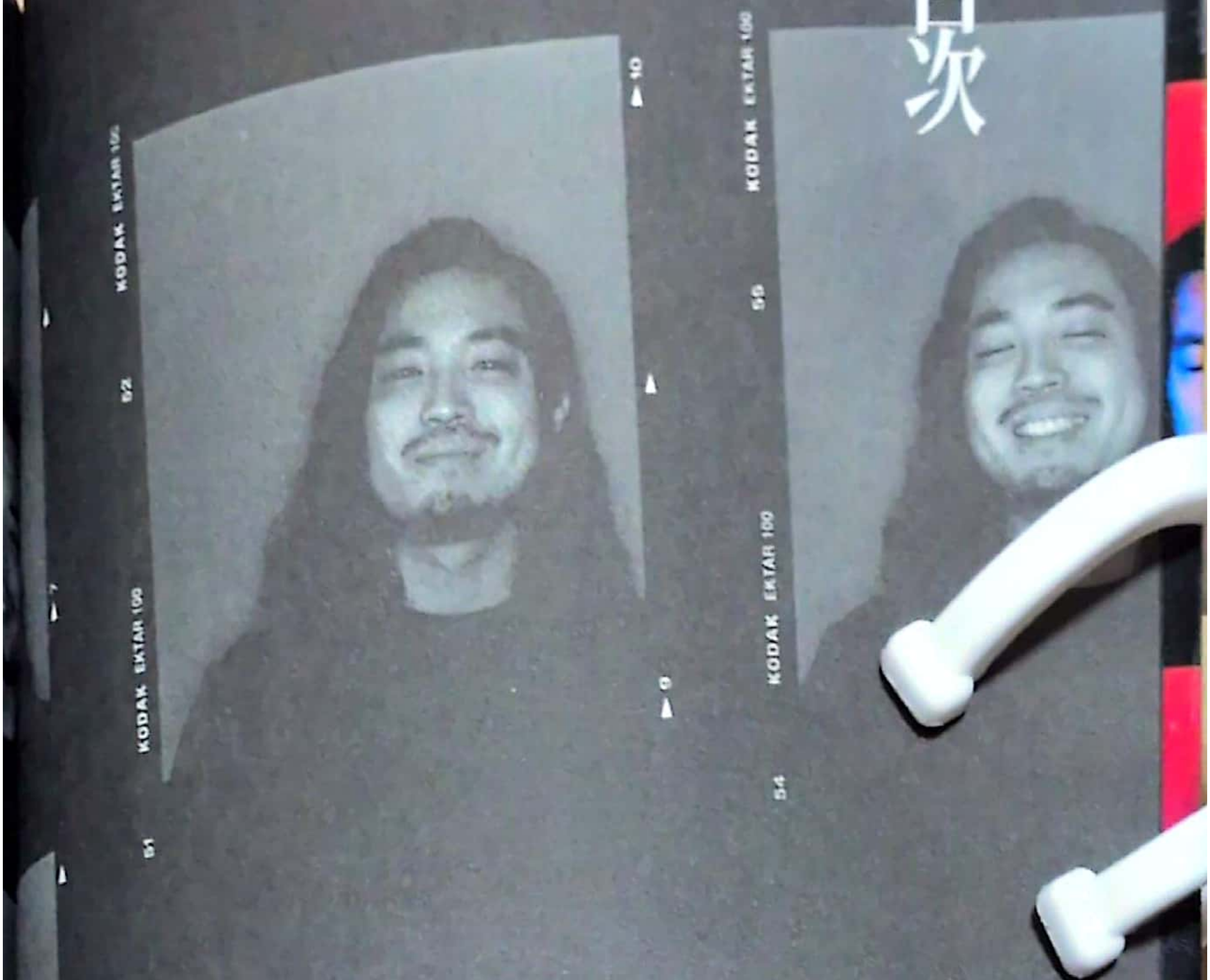
—Rの異常な愛情2—

R-指定

聞き手／構成　高木"JET"晋一郎

CamScannerでスキャン

目次



第1章	変革者としてのZeebra	5
第2章	梅田サイファーの異常な愛情	51
第3章	戻りたくなるケツメイシの「実家」感	91
第4章	韻踏合組合の「韻の破壊と再生」	137
第5章	DABOがライムで示す「粋」の構造	183
対談	CHICO CARLITO×R-指定	229

第1章 変革者としてのZeebra

…BSホールにて撮影

CamScannerでスキャン

PROFILE

Zeebra

71年生まれ。ヒップホップレーベル「GRAND MASTER」代表。93年にキングギドラを結成し、95年に『空からの力』でデビュー。97年には「真っ昼間」でソロメジャーデビューをし、翌年1stアルバム『THE RHYME ANIMAL』を発表。09年に初の日本武道館公演を行った。これまでに通算8枚のアルバムをリリース。ヒップホップ専門のネットラジオ局「WREP」の局長としての活動や、『フリースタイルダンジョン』、『フリースタイルティーチャー』などのテレビ番組、音楽フェス「SUMMER BOMB」のオーガナイズなど、幅広い領域でヒップホップの啓蒙活動を行っている。

CamScannerでスキャン

Zeebraとの出会い

――ついにZeebraさんを取り挙げる時が来ました。

R-指定（以下R） これまでこのイベントで取り挙げさせていただいた方は全員大ネタなんですけど、その中でもジブさんは、大ネタ中の大ネタですね。

――落語でいえば**「文七元結」か「芝浜」**かという（笑）。

R だからもうすでにいろんな人が、さまざまなジブさんの作品や姿を語り尽くしてると思うんですけど、今回はより俺の目線からジブさんの話をさせていただこうと。

――皆さん、Zeebraという存在はご存知ですよね？ Creepy Nutsがラジオで死ぬほどいじってる人として（笑）。

R 無茶苦茶な話ですよ。あんなにいじって良いわけがない（笑）。

――自覚あんのか（笑）。

R 俺からしたら、レジェンドすぎる存在なんですよね。実在の人間かどうかすらもわからんくらい。もうファンタジーの世界の人でしたから。

「文七元結」か「芝浜」か
どちらも古典落語の中でも「大ネタ」とされる人情噺。

――ちょっと遠すぎちゃって、お茶の間感覚でいじってしまうと。

R 僕らのラジオの中野サンプラザでのイベント（**『Creepy Nutsのオールナイトニッポン0「THE LIVE 2020」～改編突破行くぜHIPHOPPER～』**）にも出てくれはったんですけど、俺らみたいなもんと一緒に遊んでくれる、じゃれ合ってくれるとは思ってなかったですから。すごい光栄だし、ホンマに大好きなんで。……まあ、好きというのがあんまり免罪符にはならないとは思うんですけど（笑）。

――モノマネ芸人が「好きだから」を免罪符にして悪意のあるモノマネして、結局怒られるパターン（笑）。

R でもジブさんと接すると、ものすごい懐の深さと優しさを感じるんですよね。尖ってた時期の話も聞きますけど、俺はホンマに優しい、超紳士なジブさんしか見てないから、尖ったイメージがないんですよね。

――とにかくスマートだよね。

R そう。そして間違いなくヒップホップ界でジブさんほど華がある人っていうのはいない。ただ、その種類がアイドル的な華でも、木村拓哉的な華

『Creepy Nutsのオールナイトニッポン0～』
20年2月9日に中野サンプラザにて行われたラジオイベント。日本語ラップ紹介コーナーで"MR.DYNAMITE"の解説中にシークレットゲストでZeebraが登場し、同曲を披露した。

でもないんですよ。キムタクってわかりやすく赤レンジャーじゃないですか。あれは日本の中でトップの赤レンジャー。日本のどセンター（笑）。

――1億3千万人のセンター・木村拓哉（笑）。

R　でも、必ずしも赤レンジャーが真ん中ではないというのが、ヒップホップという文化の面白さなんですよね。ヒップホップの中にもキムタク的な要素の赤レンジャーはいっぱいいると思うんですよ。それこそKREVAさんとか。

――SKY-HIとかね。

R　そういう人は人間的な素質として赤レンジャー感がある。でもジブさんは黒レンジャーとか白レンジャーなんですよね。

――シマウマ色ってこと？（笑）

R　じゃなくて、黒レンジャーって斜に構えてたり、ちょっと悪さもあって、正統派貴公子の男前さではないじゃないですか。ジブさんもそういう感触があるんですよね。でも、その中に白というか、紳士的な面も持ってる。その白と黒のコントラストがジブさんの色になるんですよね。その「斜めやねん

KREVA
76年生まれ。「B-BOY PARK」のMCバトルで3年連続日本一に輝く。04年に『音色』でソロメジャーデビュー。同年1stアルバム『新人クレバ』リリース。ラッパー、トラックメイカーとしてだけでなく、数多のアーティストへの楽曲提供やプロデュースもこなしている。

SKY-HI
86年生まれ、本名・日高光啓。05年にAAAのメンバーとしてデビュー（20年末活動休止）。卓越したラップスキルにより、グループ活動と並行してMC・SKY-HIとしても活動。代表取締役CEOを務める「BMSG」にはNovel CoreやBE:FIRSTが所属。

CamScannerでスキャン

けど、紳士」っていうのが、結果的にヒップホップの中ではどセンターだと思うんですよ。下の世代でも**般若**さんとかそうじゃないですか。だから、各世代のど真ん中とされる人って、ヒップホップでは意外と赤レンジャー気質ではないっていうのはありますすね。そして、なによりジブさんは余裕感がすごい。

——ジブさんが慌てるときってあるのかね？

R ないんですよ！

——ハハハハ！ 言い切ったけど（笑）。

R 俺らの**「生業」ツアー**で、ジブさんをゲストに招いたんですけど、機材トラブルで40分くらいDJ Celoryさんのターンテーブルから音が出なくて。それで周りのみんな慌ててるのに、ジブさんだけずっと瞑想してて（笑）。

——そういうトラブルが今まで何度あったかって話だよね。タンテから音が出ないぐらいで慌ててる場合じゃないと。

R 踏んできた場数が全然違いますからね。

般若
78年生まれ。三軒茶屋を拠点に活動する妄走族（14年脱退）の"一番鬼"・般若として頭角を現し、04年にソロメジャー1stアルバム『おはよう日本』をリリース。『フリースタイルダンジョン』の初代ラスボスとしてその名を全国に轟かせ、19年1月11日には日本武道館でワンマンライブを開催。

「生業」ツアー
Creepy Nutsが「いまライブを一緒にやりたいアーティストとツーマンで回る全国ツアー」。これまで、ライムスターやZeebra、般若、湘南乃風、ZORN、BADHOP、Awichらをゲストに迎えて開催。

CamScannerでスキャン

――そもそもRくんがジブさんを一番最初に知ったのは？

R　記憶をさかのぼると、俺のおとん方のいとこの姉ちゃんが、俺が小学校ぐらいの時に――彼女はもう高校生ぐらいやったかな――「これ知ってる？」って〝MR.DYNAMITE〟のMVを見せてくれたんですよ。当時の俺は、ラップといえば、テレビで流れてくる**キック・ザ・カン・クルー**の〝マルシェ〟とか**『学校へ行こう！』**の「B-RAPハイスクール」ぐらいしか知らなくて。だから「あー、なんかめっちゃイカついな」と思うと同時に「でも格好良いな」って。それが中学生になってラップにハマって、まずツタヤで最初に手にしたジブさんのアルバムが、1stの『THE RHYME ANIMAL』と2nd『BASED ON A TRUE STORY』、そして3rd『TOKYO'S FINEST』だったんですよね。それで『BASED ON A TRUE STORY』の〝MR.DYNAMITE〟を聴いて、「ああー！　これ、いとこの姉ちゃんに聴かせてもらったやつや！」って思い出したんですよ。

――Zeebraという存在は知ってたの？

R　もう「ラッパーといえばZeebra」っていう意識はありましたね。そ

DJ Celory
a.k.a. Mr.BEATS。SOUL SCREAMの一員として日本語ラップ黎明期からシーンを牽引するプロデューサー／DJ。代表作は『BEAUTIFUL TOMORROW』（08年）。Zeebraの代表曲〝Street Dreams〟も手がけている。

キック・ザ・カン・クルー
97年にKREVA、LITTLE、MCUの3MCで結成。〝クリスマス・イブRap〟〝マルシェ〟〝アンバランス〟などのヒット曲を生み出し、02年に『紅白歌合戦』に出演し、04年活動休止。結成20年の17年に約14年ぶりのアルバム『KICK!』をリリースし、以後精力的に活動を続けている。

れぐらいテレビとかメディアでもよく見てたし。

――その当時だと**『笑っていいとも!』**や**『HEY!HEY!HEY! MUSIC CHAMP』**にも出てたしね。しかも**スチャダラパー**とか**ビースティー・ボーイズ**みたいな、ボロシャツに半パン的なキャッチーなファッションじゃなくて、もっとUSのハードコアなラッパーのイカツいファッションと渋谷の不良感が一緒になった、より「日本のラッパー然」としたマスアピールをしてたと思う。

R 今でもそれはありますよね。格好良く年を取っていく東京の不良の人というか。そして年は重ねてるんだけど、圧倒的に若い。

――年の取り方もクールだよね。

R いまだに言葉の使い方とかも若いし、やっぱり言葉を生み出してく人やなって。それを痛感したことがあったんですけど、19年のクリスマスにマネージャー森さんから「俺ら世代で飲み会するけど来る?」って誘われて、それがめちゃくちゃ楽しくて。それこそ俺がちっちゃいころに「東京の若者」やと思ってた人たちばっかりだったんですよね。**『池袋ウエストゲートパーク』**とか、ギャルとかチーマー文化の中心にいた人。そして、その人たちの使う「ウ

『学校へ行こう!』
97~05年放送のバラエティ番組。司会はみのもんたが務め、V6のメンバーがさまざまなコーナー企画を紹介。02年に始まった「B-RAPハイスクール」では、軟式gloveやチゲ&カルビ、アンコHeKANCREWら出演者がお茶の間人気を博した。

『笑っていいとも!』
82~14年放送の国民的バラエティ番組。「テレフォンショッキング」のコーナーでZeebraは00年(米倉涼子→Zeebra→ラッパ我リヤ→YOU THE ROCK☆)と、01年(DREAMS COME TRUE→Zeebra→ライムスター)に出演。

ケるー！」っていう言葉が、俺が世代が使ってる「ウケる」と腰の入り方が全然違うんですよね。

――ホームラン打てる腰の入り方してたと（笑）。

R 「ウケるー！」でホンマにウケてる（笑）。で、そういう感覚をさらに持ってるのが、そのカルチャーの爆心地にいたジブさんたち。だから、いまだに会うたび若いなあって思いますね。もう50超えてるのに。

完璧な1stアルバム

――お孫さんがいるとは思えないよね。では早速ジブさんのアルバムを紹介していきましょう。

R まずは驚異の完成度を誇る1st『THE RHYME ANIMAL』（98年）。ラッパーのアルバムとしてはほぼ完璧に近いと思うし、いまだに年イチで聴き返しますね。**キングギドラ**の『空からの力』は、押韻を通して日本語ラップのレベルをバツンと引き上げた、日本語ラップを変えた作品で、内容的にも非常に**コンシャス**。だけど『THE RHYME ANIMAL』は、それをもうちょっと

『HEY!HEY!HEY! MUSIC CHAMP』
94～12年放送の音楽バラエティ番組。ダウンタウンの2人が司会を務めた。Zeebraは2000年に「MR.DYNAMITE」、2003年に「SUPATECH (what's my name?)」、キングギドラとして02年に「UNSTOPPABLE」で出演。

スチャダラパー
88年にBose、ANI、SHINCOの3人で結成。90年に1stアルバム『スチャダラ大作戦』でデビュー。94年の小沢健二との楽曲「今夜はブギー・バック」が大ヒット。20年には30周年記念アルバム『シン・スチャダラ大作戦』をリリース。

CamScannerでスキャン

噛み砕いて、かつパーティーチューンとか、軟派ソング、日常ソングも入れて、より「一人の東京の若者」として、「一人のラッパー」として、自分自身を切り取ったと思うし、「アーティストの1stアルバム」として完璧なアルバムというのが、この『THE RHYME ANIMAL』だと思うんですよね。

――リアルタイムの世代からすると、ギドラや**LAMP EYE**“**証言**”の印象が強いから、1stはすごくキャッチーに思えたし、驚いた印象があるんだよね。

R ゆえに田舎の中学生でも『THE RHYME ANIMAL』は入り込みやすかったんですよ。その2曲目の“ORIGINAL RHYME ANIMAL”。これはギドラの流れをくんで、韻の踏み方のパターンもめちゃくちゃ上手い。〈今日もブチかます／口が立つ俺は今夜も韻踏み明かす／無知が成す様ざまな悪に／尖った鉛筆突き立てる作品〉……エグい言い回しですね。いまだにこのレベルでライムをし続けられる人は少ないと思いますね。韻だけじゃなく、文章の並びとしてもすごい格好良いし、暴力じゃなくラップで、というところもアティチュードとして立ってるなと。ギドラは、アメリカ生活の中でヒップホップを見てきた**Kダブシャイン**さんとジブさん、**DJ OASIS**さんの3

ビースティ・ボーイズ
マイクD、MCA、アドロックの3人組ヒップホップグループ。ハードコアパンクバンド期を経て、86年に1stアルバム『Licensed to Ill』でデビュー。3rd『Check Your Head』と4th『Ill Communication』でメインストリームでの成功を収める。12年にMCAが他界したことにより活動休止。

『池袋ウエストゲートパーク』
00年に放送された脚本・宮藤官九郎、原作・石田衣良のテレビドラマ。主演の長瀬智也を筆頭に、窪塚洋介や山下智久など豪華キャストが出演。今なお熱狂的なファンが多く、劇中曲担当の一人としてKREVAが名を連ねている。

CamScannerでスキャン

人が、「日本の音楽業界」という既存のシステムに対して、自分たちを宇宙から来た怪獣キングギドラに見立てて攻め込んできた、っていうのがテーマなんですよね。そしてこの『THE RHYME ANIMAL』は、よりジブさんのヒップホッパー、革命家としての側面が色濃く出てる。ヒップホップを広めていかなアカンみたいな義務感を所々に感じるし、教科書的にラップの上手さを形にしているのは、ラップを広めるっていう観点ゆえだと思うんですよね。

――そう提示するなら、そもそものラップが上手くないと説得力はないし、そのラップが教科書的に上手いからこそ、後進がそれに追随できるという構造にもなっていて。

R 〈超麻薬的 超科学的／度胸なけりゃ即出口探すべき〉。「超」と「胸」ではフロウを引っ張り上げといて、その前後の「麻薬的」「科学的」「探すべき」っていう長い韻を離して踏むみたいな部分はすごいテクニカル。その次の〈この先はイルな底無し沼／無限にDeepなSkillが無きゃ痛い目見る場〉は、3文字ぐらいの短い韻で畳み掛けていて、この緻密に入り組んだ韻の踏み方は今でもホンマに勉強になる。

キングギドラ
93年にKダブシャイン、Zeebra、DJ OASISの3人で結成。『空からの力』(95年)と『最終兵器』(02年)の2枚のオリジナルアルバムをリリース。

コンシャス
社会性を意識したリリックを含むラップを指して「コンシャスなラップ」と用いられる。海外ではKRS・ワンやコモン、ケンドリック・ラマーなどがコンシャスなラッパーと形容されることが多い。

CamScannerでスキャン

――しかも、この時はすごく日本語的な発声で、難しい言葉を多用しないで、長い韻を落としていくんだよね。

R　この曲はサビが無いんですよね。ヴァースだけで余裕で格好良い曲なんですけど、当時の中学生の俺としては、「あれ？　サビ無いやん」みたいな。それまで聴いてた歌謡曲とは明らかに構成が違ったし、中学生やから「暗いし、怖いし、サビ無いやん」って（笑）。だから最初はピンとこなくて、1年ぐらいしてやっと格好良さに気付いた曲でしたね。その当時の俺にドカンとハマったのは〝I'm Still No.1〟。この曲は**ボースティング**の例え方の具合も含めて、すごくキャッチーなんですよね。歌詞分かりやすい、BPM速い、ノリがいい、明るい、「ナンバーワン！」っていう俺でも知ってる英語が入ってる（笑）。

――シンプルだよね。

R　でもライミングの仕方はやっぱりジブさん印で。例えば〈固く拳握りしめ向かうリング／堂々とした態度まさにキングの風貌〉ってパートは、「キング」で止めてもいいはずなのに、「の風貌」まで続けて、言葉が小節から

LAMP EYE〝証言〟

95年にアナログ盤、翌年CDリリースされた日本語ラップの金字塔的な一曲。RｰNO、YOU THE ROCK☆、G.K.MARYAN、Zeebra、TWIGY、GAMA、DEV LARGEが参加。トラックはDJ YASが作曲。

Kダブシャイン

a.k.a.ビッグコッタ、渋谷のドン。68年生まれ。97年にソロ1stアルバム『現在時刻』をリリース。日本語ラップでの押韻を確立させた一人。

漏れることでグルーヴが生まれてるんですよね。その次の〈割れんばかりの歓声／この時点でもう既に判定勝ち〉も、次の小節の頭に文末の「勝ち」が入ることによって色が付くというか。その後の〈イケイケハードパンチャーZeebra the Ⅲ Skill トップランカー／パンチドランカー急増中〉も、ジブさんが言う、**「返し韻」とか「返り韻」**が来ることによってグルーヴが持続する。だから、この冒頭の何小節ですごいいろんなスキルを使ってるんですよね。

——**UBG**が韻をかぶせる部分でも、キャッチーさが生まれるよね。

R そうそう。あとジブさんはこの当時から言ってるんですけど、ラップを書くときに譜割りから作る、と。要はスキャットから歌うんですよね。フレーズや音から作って、後で言葉をハメていく。

——**桑田佳祐**もまずデタラメ英語で歌いながらメロディと譜割りを決めていくって言うよね。それのラップバージョンというか。

R だから、よりメロディやリズムとしてラップを捉えている。それは2ndアルバムで顕著に表れてくるんですけど、文字に起こしたら韻にはなってないけど、「響きで韻を踏む」っていう作業ができるのは、メロディやリズム

DJ OASIS
72年生まれ。『東京砂漠』『ウォーターワールド』の2枚のアルバムをリリース。"キ・キ・チ・ガ・イ"をはじめ、ライムスター・宇多丸との共作シリーズも話題に。

ボースティング
富や名声、肉体性などをリリック内やアティチュードで誇示すること。

「返し韻」とか「返り韻」
小節の最後だけではなく、次の小節の頭で前の小節で踏んだ韻をもう一度持ってくること。

UBG
URBARIAN GYMの略。Zeebraを中心に、UZI、KM-MARKIT、DJ KEN-BO、I-NOVADERらで結成されたクルー。10年に解散。

CamScannerでスキャン

として言葉を捉えてるから、そういう踏み方ができると思うんですよね。

――"I'm Still No.1"の2ndヴァースはバスケの話だから、バスケ部だったRくんは共感したんじゃないの?

R 練習中はこれをイメージしてましたね。試合でも相手チームの口だけ番長を3秒で蹴散らすイメージをしてたんですよ。ずっと相手チームのやつの顔を睨みながら、ベンチで(笑)。

――ベンチかい(笑)。監督のゴーサインを〈待ってたぜ〉じゃなくて、「待ってるぜ」だったわけだ。

R 〈見ててくれ俺のセニョリータ〉の部分も、当時はセニョリータもいないから、マネージャーとか他の学校の女の子に目星をつけて「今日はどれをセニョリータにしとこうか」と(笑)。

――ハハハハ! 集中しろよ(笑)。

R で、結局試合終了、フリーでスリーをかますチャンスに恵まれないまま選手生命は終了したブザービーターでしたよ。

――結局ベンチで妄想してたという話。悪いことを聞いたね(笑)。

桑田佳祐
56年生まれ。サザンオールスターズのヴォーカル・ギター。78年にシングル『勝手にシンドバッド』でメジャーデビュー。87年からは桑田佳祐名義でのソロ活動を開始した。

R　試合に集中しないでラップのこと考えてる奴が、試合に出れるわけもないんです（笑）。でも、こういう入り口があったから、俺も曲に入って行きやすかった曲ですね。5曲目の〝未来への鍵 feat. AKEEM DA MANAGOO〟は、このイベントの第一回目でも取り挙げてますね。次世代へのエールものなんですけど、ジブさんの立ち位置から歌われるからかなり響く曲というか。この当時のジブさんはまだ若手、多分この当時、いまの俺より年下なんですよね。

――当時のジブさんは26〜7歳だよね。

R　この当時でもう次世代を意識した曲を歌ってたわけですよね。ジブさんが第三の目を開いて、日本のヒップホップシーンの20年後、今の日本を考えていたと。そしてその21年後にあたる去年、19年にジブさんの子孫であると勝手に自負している我々Creepy Nutsが……。

観客　ハハハハ。

R　なんで笑うんですか？　そりゃ子孫はBAD HOPのほうがしっくりきますよ！

BAD HOP
神奈川県・川崎出身の幼馴染で結成された8人組。17年に初の全国流通アルバム『Mobb Life』を発表し、翌年のEP『BAD HOP HOUSE』収録の〝Kawasaki Drift〟がブレイク。18年に日本武道館、20年に横浜アリーナで無観客ライブを開催。

CamScannerでスキャン

――分かってるよ、と（笑）。

R 忌み子かもしれへんけど、俺たちも子孫なんですよ。座敷牢の子かも知れへん、村の人にも言うてない土蔵の隠し子かもしれへんけど。

――**『奇子』**か（笑）。

R それでも一応俺らも子孫。そのご先祖様が、**俺たちとのツーマン**でこの曲を歌ってくれたんですよ。だから、俺はリハでこのイントロがかかった時に「オヤジー！」ってなって。

――鉄仮面を付けられながら（笑）。

R 鉄仮面付けられて、座敷牢で「オヤジー！」って、開かずの間から叫びましたよ（笑）。でもホントに嬉しかったですよ。ジブさんからしたら、20年後に、実際にこの曲で歌ってるようなジブさんの子孫たちがシーンで活躍してるわけで。一緒のステージに立って、この曲をやってくれたっていうのは、ホンマにグッときましたね。

――その意味でも、「変革者としてのZeebra」という姿がこのアルバムの特徴だよね。

『奇子』
72～73年に『ビッグコミック』で連載された手塚治虫の漫画。

俺たちとのツーマン
19年4月9日に東京・LIQUIDROOMで行われたCreepy Nuts 2マンツアー「生業」ファイナル公演。

R　そういったジブさんのヒップホップ革命家、ヒップホップ思想犯としての側面が表現された曲が〝The Untouchable II〟。この曲の前段として、**DJプレミア**とタッグを組んだ**〝The Untouchable〟**っていう曲があって、そこでもヒップホップ革命家としての自分自身を書いてるんですね。そして〝The Untouchable II〟では、その革命家、思想犯であるZeebraを追い詰める、**バビロンシステム**、権力側の視点でリリックを描いてる。**「さんピンCAMP」**や**「鬼だまり」**を折り込みつつ、そういった「現場」から日本を変えようとするZeebra容疑者と、それを阻止しようとする国家側、というアプローチなんですね。しかも、その権力に対して、容疑者のジブさんは〈例の城に仕掛けたぜ爆弾〉と言って一歩も引かないし、この頃からジブさんは爆弾が好きやった（笑）。

――「Mr.Dynamite Zeebra the Bomber」という前から（笑）。

R　ジブさんは何かっていうと爆弾ですから（笑）。でも、その大袈裟さがおもしろいんですよね。余談ですけど、爆弾といえば**DJ YUTAKA**さんがインタビューで……。

DJプレミア
通称「プリモ」。グールー（10年死去）とともにギャング・スターとして活動。ナズやジェイZ、ノトーリアス・B.I.G.を筆頭に数多くのラッパーの楽曲をプロデュース。

〝The Untouchable〟

97年リリースの両A面アナログレコード『マイクの刺客／The Untouchable』（Rhymester／Zeebra）に収録。08年のベストアルバム『The Anthology』にも収録されている。

――「今のメディアは腐ってる。だから俺はフジテレビの球体展望台の両端に爆弾つけて落とそうと思ってる。一端は俺が持って、もう一端は**GDX**が持つ」ってやつだ。それ俺と**ダースレイダー**が作ってた**『月刊RAP』**のインタビューじゃなかったかな。

R　あれは最高でしたよ。「本物のヒップホップ思想犯いたんや！」っていう(笑)。その次の〝東京の中央〟では、革命家、思想犯としてジブさんが、その計画を実行している最中の内容が歌われるんですよね。だから、この2曲で視点が入れ替わってるという、そのアルバムの流れの作り方は教科書的に上手い。その次の〝真っ昼間〟は、多忙に戦っているジブさんの休日というか、日常、チルな時間を書いてて。ホンマに東京のイケてる若者としての日常なんですよね。

――MVにも90年代末をすごく感じるんだよね。

R　ジブさんの日常だから、アメリカっぽい生活様式かなと思ったら、歌詞に出てくるのがタンスなんですよね。〈開くタンス　出すTシャツに短パン〉。ここが「ウォークインクローゼット　出すTシャツに短パン」やったら……。

バビロンシステム
警察や政府などの権力＝バビロンに支配された社会構造のこと。

「さんピンCAMP」
96年7月7日に日比谷野外音楽堂で開催されたヒップホップイベント。提唱者であるECDをはじめ、BUDDHA BRANDやライムスター、SHAKKAZOMBIE、LAMP EYEなどが出演。

「鬼だまり」
雷が主催で行ったイベント。YOU THE ROCK☆による「BLACK MONDAY」から、「暗夜行路」「亜熱帯雨林」「鬼だまり」と発展した。

CamScannerでスキャン

――自分たちと遠く離れすぎちゃうよね。

R　でもタンスやから、「あ、近いんや」って思わされるんですよね。あと〈ゲットしたばっかのミックステープ／カーステで鳴らすぜクソ渋いベース〉。こんなに日常を切り取ってても、スキルの部分はまったく妥協なし。女の子の話も出てくるんですけど、チャラいんじゃなくて粋なんですよね。だから下品ではない感じがあって。アルバム的には、ここからはジブさんの夜の部が始まるんですが、〝Parteechecka〟はとにかく華やか。

――いまだにパーティーチューンといえばこれだよね。

R　〈バックレてんな早く出しな／てめえのも火付けて回しな〉。これ、何のことか最初わかんなかったけど、今はわかるようになって、そこに続く〈もう一度巻き戻せイントロ〉で、「うわっ！　巧っ！」みたいな。

――「巻く」が掛かってるという。

R　スキル面でも今でも勉強になるようなテクも多いし、パーティーの情景は、売れてるラッパーの振る舞いとしては勉強になりますね……いまだに実践はできてませんけど（笑）。

DJ YUTAKA
ヒップホップ黎明期から活動するDJ、プロデューサー、トラックメイカー。82年に渡米し、アフリカ・バンバータ率いる「ズールー・ネイション」に参加。00年に『UNITED NATIONS』をリリース。

GDX
ラッパー・音楽プロデューサー・俳優。DJ YUTAKAの紹介で「ズールー・ネイション」の一員になる。前述の『池袋ウエストゲートパーク』に登場するカラーギャングを監修し、出演もしている。

CamScannerでスキャン

——売れてるラッパーは、やっぱりパリパリにはしゃいでくれないと、みんな憧れられませんよ（笑）。

R 俺も今年はデルモ級を連れて、ボトルごと**クエルボ**を頼む側になりたいなとは思います（笑）。でも、ホンマに遊ばなアカンなと、改めてジブさんのこれを聴いたら反省しましたね。

——当時ジブさんと**UZI**さんが遊んでるのは、クラブでよく見かけたもんね。

R その2人が組んでるのが、〝再起不能 feat.UZI〟という。やっぱ相性がいいんですよ、ジブさんとUZIさんは。そしてジブさんといえばエロい曲だと思うんですが、〝Lovesquall〟はエロジブの始まりですよね。

——エロジブ……どういう表現だ（笑）。

R ギドラにはなかったテイストですよね。まず声のトーンが、ボソボソっとしてて、耳元で歌ってるようなウィスパーZeebraなんですよ。〈真夜中のシェリフ〉とかいいですね。あと〈後部座席で二人挑む突っ込む〉。

——もうちょっと言いようなかったのかなと思うぐらい直接的な表現で

ダースレイダー
77年生まれ。東京大学中退という異色のキャリアを持ち、真田人とDJオショウとともにMICADELICとして活動。04年にはレーベルDa.Me.Recordsを設立。余命宣告を受けた自らの病気について書かれた『ダースレイダー自伝NO拘束』をはじめ著書も多数。

『月刊RAP』
06年にDa.Me.Recordsから刊行された「うわさの画期的雑誌感覚、新感覚のマガジン方式CD」。

クエルボ
世界販売量No.1テキーラブランド「ホセ・クエルボ」のテキーラ。

CamScannerでスキャン

（笑）。

R　普段は紳士なジブさんでも、やっぱ来る時が来たらワイルドに行きますから（笑）。あと〈**ラップ系はダンサーとDJ以外全然解んない興味ない**〉。これ聴いて、ジブさんも失敗することあるんやって。

――〈My men KEN-BOがピンチヒッター／五分とせず二人消えて行った〉。さすがDJであり、ダンサーでもある**DJ KEN-BO**さん、手練です（笑）。

R　そして、エロジブのこの時期の最高潮かつクラシックは、**DJ HASEBE〝今すぐ欲しい feat.Sugar Soul&Zeebra〟**。これ渋谷のギャルたちの中で大ヒットしたんですか？

――100万枚とかっていう話では当然ないけど、でもアラフォー世代はみんな知ってるんじゃないかな。

R　すさまじい曲ですよ。**Sugar Soul**のa-iCoさんもすごいこと言ってるんですよ。まず〈私からしたいの〉……痴女ものじゃないですか！

――子供か（笑）。でも歌詞だけ読むと官能小説だね。ず～っとエロいことしか言ってない（笑）。

UZI
74年生まれ。UBGの中心メンバーであり、ZeebraとT.A.K THE RHYMEHEADともにT.O.P. Rankazというユニットを組んでいた。『フリースタイルダンジョン』の初代司会進行・ナレーションを務めた。

ラップ系はダンサーとDJ以外全然解んない興味ない
時代背景として、当時はラッパーよりもダンサーとDJの注目度が高かった（高木）。

DJ KEN-BO
72年生まれ。12歳でDJとしての活動を始め、90年からはサポートメンバーとしてダンスユニット・ZOOにDJで参加。94年にはキングギドラのライブDJを務める。「高校生RAP選手権」で第1回からDJを担当。

CamScannerでスキャン

R でもａｉｃｏさんのヴォーカルと、ジブさんの声のトーン、ＨＡＳＥＢＥさんのビートが奇跡のバランスで成り立ってるから、「うわ〜下品」ってならん。

――「セクシー」で止まるよね。えげつなくならない。

R 耳で聴く、体で聴く分は、ホンマにすごいおしゃれなバランス。ジブさんのラップも、なんかトローンとした声とフロウで、ライムする場所も微妙にズレてたり、固くしすぎない、その甘踏みが洒落てるんですよ。こういう場面でカチカチのロングライムなんか書いてしまうような奴はダメなんですよ。

――固けりゃいいってもんじゃない。

R 長けりゃいいってもんじゃない。

――別の意味を自分たちに言い聞かせてるみたいになってるけど（笑）。

R **ライムスター**もエロい歌ありますけど、ライムスターのエロいは……。

――ちょっと頭が悪いよね。「ウヒヒ〜エローい」みたいな（笑）。

R でも〝今すぐ欲しい〟の３人は真顔ですよ。

DJ HASEBE
a.k.a.OLD NICK。71年生まれ。90年よりDJとしてのキャリアをスタート。00年に1stアルバム『HEY WORLD』をリリース。

〝今すぐ欲しい feat.Sugar Soul & Zeebra〟

Sugar Soulのデビューシングル『Those Days』（97年）の4曲目に収録。

Sugar Soul
aico、DJ HASEBE、カワベによるR&Bユニットを経て、現在はaicoのソロユニットとして活動。99年にkenji（現・Kj）との楽曲〝Garden〟が大ヒット。

——ちゃんと相手をオトそうとしてるよね。ライムスターはそこに照れがある。

R ただ、俺のエロはどうしてもライムスターに近づいてしまう（笑）。でも、ライムスターのお三方は実際にはめちゃくちゃモテるわけですから、そういう意味ですごいなと。俺もそっちで行きます、頑張ります！

——任せますけど（笑）。

不良性とスキルの変化で起こした革命

R で、『BASED ON A TRUE STORY』（00年）の話に入る前に、キングギドラ『空からの力』の話からしたいんですが、**「20周年記念エディション」**の中でジブさんがすごく興味深いことを言ってるんですよ。かいつまんで話すと、ジブさんもたしかにヤンチャはしてたけど、ニューヨークに行ったら、俺らのヤンチャなんて可愛いもんや、と。じゃあ日本でラップするにあたっても、US流のハードコアより、ダンサブルだったり、レゲエの要素が入ってたり、よりトッポい方向がいいのかなと。そのお手本として塩梅がちょう

ライムスター
89年に結成された宇多丸・Mummy-D・DJ JINからなるヒップホップグループ。通称「キング オブ ステージ」。07年には日本武道館でのワンマン公演を成功させ、約2年の活動休止を経て09年にシングル『ONCE AGAIN』で再始動。22年4月からは新ライブシリーズ『ライムスターイズインザハウス』をスタート。

「20周年記念エディション」
15年にリリース。未発表デモ音源を収録したリマスタリング盤。98年にVHSリリースされた『影The Video』のDVD版も収録。

どよかったのが**ファーサイド**らしいんですよね。ギャングでもないけど、ストリートカルチャーとしてヒップホップを体現してる。だから日本でウケるバランスはあれやってことで、当時はあの感じの歌い方に影響を受けてたらしいんですね。

――ファーサイド自体、すごく人気があったし、当時は影響受けたラップは多いよね。**リップスライム**はもちろん、ライムスターも**『俺に言わせりゃ』**の時期はファーサイドと**リーダーズ・オブ・ニュースクール**の影響を強く感じるし。

R　日本でもそういう人たちがいっぱい増えて。「でも俺はもうちょっとハードなほうがホンマは好きや」ってことで、皆さんが知ってるヴァージョンの〝見まわそう〟の淡々とした歌い方になったらしいんです。そういう試行錯誤の上に『空からの力』、『THE RHYME ANIMAL』があったんですが、その次にアメリカほどハードではないにしろ、ヤンチャはやってきたジブさんやからこそ書ける部分が落とし込まれた『BASED ON A TRUE STORY』が生まれるんですね。ここでジブさんがヒップホップを一般層に広げるために

ファーサイド
89年に結成されたカリフォルニア州ロサンゼルスのヒップホップグループ。92年に1stアルバム『Bizarre Ride II the Pharcyde』をリリース。

リップスライム
94年にRYO-Z、ILMARI、PESを中心に結成。その後、DJ FUMIYA、SUが加入し、01年にシングル『STEPPERS DELIGHT』でメジャーデビュー。〝One〟〝FUNKASTIC〟〝楽園ベイベー〟〝熱帯夜〟などがヒット。現在は、RYO-Z、ILMARI、DJ FUMIYAの3人で活動中。

CamScannerでスキャン

とった作戦が「不良」なんですよね。USでのギャングスタも含めたストリートカルチャーを日本に置き換えると何や?って考えたら、ジブさんの出した答えは「不良」だった。日本のヒップホップは、**いとうせいこう**さんからの流れを考えると、文系、インテリの流れにあったと思うんですよね。

——**近田春夫**さんも「音楽家としてのヒップホップへの接近」だもんね。**MELON**もそうだし、音楽家が音楽として、「ヒップホップミュージック」を受容して広げたっていう部分が強かった。

R **佐野元春**さんが歌唱法としてラップを取り入れたっていうのもそうですね。だから、日本のヒップホップは**文系層や音楽、サブカルチャー層が広げてきた部分**が強かった。それはスチャダラもライムスもそうやと思うし、もっといえばキングギドラも間違いなくインテリ。だから『THE RHYME ANIMAL』では、ストリート性も垣間見られるけど、インテリジェンスも同時に見えるアルバムだったと思うんですよね。でも『BASED ON A TRUE STORY』は、例えは難しいけど「しゃがんだ」と思うんですよね。

——ヤンキー座りになったというか。「しゃがんだ」という表現は言い得て

『俺に言わせりゃ』

93年リリースのライムスターのインディーズデビューアルバム。

リーダーズ・オブ・ニュースクール

86年に結成されたニューヨーク州ロングアイランドのヒップホップグループ。バスタ・ライムスが在籍していた。

妙だね。

I　不良の感性を取り入れたんです。日本の不良やマイルドヤンキーを、USのストリートに置き換えたり、結合させた。でも、それは歴史的にも必然だったんですよね。ロックも不良が注目したことで、流行になっていったし。不良が流行を作るっていう部分は、もともと日本の文化の中ではすごく強いから。

――キャロルや矢沢永吉がそうだろうし、もっといえばグループサウンズだって不良がめちゃくちゃ多かったわけだから。ビートルズだって登場当時は当時のメインストリームからすれば不良だったわけで、不良が文化を担う部分は、洋の東西を問わない事象で。

I　その意味でも、ジブさんは不良がやる音楽を、ロックやパンクからヒップホップに変えたんですよ。不良たちのあり余ったパワー、大人への怒り、社会への不満、それらを取り巻く環境から抜け出す「成功」への渇望、または単にビッグになりたいという承認欲求……それらの捌け口として、ロックがフィットしてたのを、ヒップホップにスライドさせた。だから、このアル

いとうせいこう
61年生まれ。86年にいとうせいこう&TINNIE PUNX名義で『建設的』、89年にソロアルバム『MESS/AGE』をリリース。日本にヒップホップカルチャーを広く知らしめた一人。小説『ノーライフキング』『想像ラジオ』など著書も多く、タレントとしても活動している。

近田春夫
51年生まれ。近田春夫&ハルヲフォンや近田春夫&ビブラトーンズを経て、86年にヒップホップ専門レーベルBPMを設立（～88年）し、President BPM名義で『MASS COMMUNICATION BREAKDOWN』を発表。その膨大な音楽活動は『調子悪くてあたりまえ 近田春夫自伝』（リトルモア・刊）に詳しい。

バムがなかったら、登場してなかったラッパーはたくさんいると思う。

――間違いなくゲームチェンジを促した作品だと思う。それは良い悪いでは判断できないレベルで。

R **宇多丸**さんが不良のラッパーが増えたことについて、「本来自分の文章とか自分の言葉とかを持ってなかった人たちが自分の言葉を持つようになった」ってニュアンスの発言をされてたんですけど、まさにその先鞭をつけた作品だと思いますね。

――この前段階として"**Grateful Days**"の大ヒットがあり、〈俺は東京生まれHIPHOP育ち／悪そうな奴は大体友達〉っていうアピールの先に『BASED ON A TRUE STORY』が生まれたから、展開としても完璧なんだよね。

R 声質も変わるんですよね。2曲目の"HIPHOP解放戦線feat. UZI"から、ダミ声に変化してることがわかる。で、この当時**DMX**のラップに影響を受けてるってよく言われてたんですけど、もともとこういう声を出したかったし、DMXよりも早い段階でチャレンジしてたという話をジブさんはされて

MELON
81年に元・プラスチックスの中西俊夫、佐藤チカで結成。初期の音楽性はファンク色の強いニューウェイヴであったが、87年にヒップホップ色の強いアルバム『DEEP CUT』をリリース。

佐野元春
56年生まれ。81年発表の"SOMEDAY"が代表曲として広く知られている。84年のアルバム『VISITORS』からのシングルカット曲"COMPLICATION SHAKEDOWN"は日本でのヒップホップ／ラップ楽曲の先駆けとして語られることが多い。

文系層や音楽、サブカルチャー層が広げてきた部分
もちろんDJ KRUSHさんをはじめとする「ホコ天」やストリートが広げてきた側面もあります（高木）。

て。プラス、発音も変わるんですよね。この時期からちょっと滑舌をあえて不明瞭にしてる。それまでのジブさんは、割とはっきり発音してたタイプなんですが、このアルバムから発音を崩して、日本語の持ってるぶつ切り感をいかになくすかっていう方法を試すんですよね。

——日本語は、英語にあるような二重母音だったり長母音が基本的にはないから、そもそもの言語構造として「あいうえお」で止まる習性があるんだよね。

R　でも日本語の発音を不明瞭にすることによって、英語的に、母音の選択肢を増やす発音をすることで、「文字面上、踏めてなさそうな言葉でも聴覚上で踏める」ようになった。もっと言えば、英語と日本語でより自然にライムができるようになったんですよ。逆にギドラは英語発音を禁止にしてたんですよね。ジブさんもKダブさんもバイリンガルにも関わらず。だからギドラの〝フリースタイル・ダンジョン〟（『空からの力』収録）では〈俺がジブラリプレゼントキング・ギドラ〉なんですよね。「represent」を「レペゼン」と発音しない。「英語を使えばラップになる」「韻が踏める」って思われたくなかったからこそ日本語で、英語であっても日本語の発音で韻を踏んできたんです

キャロル
72年に結成され、75年に解散したロックバンド。革ジャンにリーゼントというスタイルで登場し、「日本語ロック」の定着に影響を与えた。代表曲は〝ファンキー・モンキー・ベイビー〟など。

矢沢永吉
49年生まれ。キャロルのヴォーカル、ベースを担当。75年にシングル『アイ・ラヴ・ユー、OK』でソロデビュー、78年の楽曲〝時間よ止まれ〟が大ヒット。22年にはデビュー50周年を迎えた。

けど、それができることはこれまでの作品で証明したから、ここからは自分の気持ちの良いようにやるぞ、と。だから『HIPHOP解放戦線』の〈そう簡単に潰されねぇぞ俺のコンバットタンク〉も、〈そう簡単に〉の〈に〉をほぼ言ってない。だからこそ「combat tank」っていう英語の発音で踏める。そして、〈武器フル装備 特殊セラミック 今日も微笑ます 勝利の女神〉のように「特殊セラミック」と「勝利の女神」は「セラミック」と「女神」が発音込みでより正確なライムになるうえに、その前の「特殊」と「勝利の」まで同じ譜割りに乗せることで全然違う母音の言葉さえセットで同じ韻律に納め長いライムに聞かせてしまう。発音を変えることによって、なめらかな大きい譜割りができるようになって、音にパチッとハマるラップが生まれたんですよね。だから音のハマりの気持ち良さは、これまで以上に上がってると思うんですよね。多分、この発明がなかったら、AKLOさんとかSALUさん、RAU DEFみたいな表現は生まれてこなかったかもしれないと思うんです。

——不良性のようなアティチュードに加えて、スキルという面でも大きな革命を起こしたと。

宇多丸
69年生まれ。早稲田大学在学中の89年にMummy-Dとともにライムスターを結成。本名の佐々木士郎名義でヒップホップライターとしても活動していた。TBSラジオ『アフター6ジャンクション』パーソナリティとして国内有数のカルチャーの伝道師としても活躍している。

『Grateful Days』
99年にリリースされたZeebra、Acoが参加したDragon Ashの5thシングル楽曲。バンド初のオリコンシングルチャート1位に輝き、ラップが広く世に知られるきっかけとなったが、あまりに有名なフレーズゆえにしばしば揶揄の対象ともなった。

R　逆に、日本語発音をバリバリそのままにUSの最新トレンドや、複雑な譜割りに強引にはめ込むことで、世界でも類を見ないオリジナリティを確立したのがKOHHやと思います。日本語のハマりの悪さを逆手に取ったというか……逆にミリ単位でハマり過ぎないからこそ際立って聞こえるというか……。世界的にラップのトレンドがオフビートからオン、むしろちょい前のめりぐらいの方がイケてる空気になり出した頃というのもデカく作用したのかな？　先人たちが日本語を崩し、縮め、伸ばし、いかにして音のハマりを良くするか試行錯誤してきた土台があった上で、「いやそのままハメれば良くね？」ぐらいの感覚で。本人はかなりロジカルかもしれないし、完全な俺の憶測ですが……。なんにせよこの発明でフロウにおける最新トレンドへのアクセスが断然早くなった。英語ができなくても、無理に日本語を崩さなくても、最新のフローを試す勇気をくれた。だからホンマにね、単独ゲームじゃないんですよね、ヒップホップって。いろんな先輩方が研究を重ねて、それを若手たちが咀嚼して、じゃあ俺はこう、私はこうってスキルを広げていく連綿としたチームプレーこそが、ヒップホップの進化の歴史なのかなって。

DMX
98年にデビューアルバム『It's Dark and Hell Is Hot』をリリースし商業的な成功を収める。99年の『…And Then There Was X』はキャリア最大500万枚の売上を突破。21年に死去。

AKLO
日本人の母親とメキシコ人の父親を持つ。フリーダウンロードのミックステープで知名度を上げ、12年にBACHLOGICの主宰レーベルから『THE PACKAGE』をリリース。2ndアルバム『THE ARRIVAL』収録の"RGTO feat.SALU, HI-TEFLON&Kダブシャイン"がMV含め話題に。

CamScannerでスキャン

更生施設みたいなアルバム

——ブラス、ストーリーテリングの妙という部分もジブさんの功績として大きいと思う。それこそせいこうさんやスチャも物語は描いてきたけど、「しゃがんだ」物語の成立に果たしたジブさんの功績は本当に大きいなと。

R　"CHILDREN'S STORY"が特にそうですよね。

——いわゆる寝物語、おとぎ話の形式なんだけど、内容はどんどん深刻になっていって。

R　このアルバム自体、ジブさんの体験や見聞きした話がベースになっているんだけど、この話はその中でもフィクション寄りだと思うんですよね。だからこそ、本当にショッキングな話も書けたのかなって。ストーリーテリングはKダブシャインさんも名手ですけど、テイストはだいぶ違いますね。Kダブさんのはドキュメントっていう感じだけど、この曲はちょっとブラックユーモアというか、映画っぽい感じでもあって。

——暗い話ではあるんだけど、陰惨ではないよね。

SALU

88年生まれ。12年にBACHLOGIC主宰レーベル「ONE YEAR WAR MUSIC」の第一弾アーティストとして、アルバム『IN MY SHOES』でデビュー。14年発表の『COMEDY』のトレーラー映像では、Mummy-D、KREVA、般若、坂本美雨らがコメントを寄せている。

RAU DEF

88年生まれ。SEEDA&DJ ISSO『CONCRETE GREEN 9』や、DSGの"M.O.S.I ～もっとMCが増えたなら REMIX～"などで頭角を現し、10年にデビューアルバム『ESCALATE』をリリース。

R　最後の〈17歳がとった選択肢 それは17階からの転落死〉。このワンフレーズで画も浮かぶし、これまでしてきた悪事の天罰みたいなオチが綺麗につくっていう。しかもライミングもいいんですよね。「韻は普通の文章を頭に刻み込むためのとっておきの魔法」とジブさんは言ってたんですけど、この曲も「17」で意味が掛かりつつ、「選択肢」と「転落死」っていうライミングと言葉の距離感でよりショッキングに聞こえたり、頭に残るフレーズにしてるんですよね。

——次の〝男の条件 feat.MACCHO, Q, BOY-KEN〟は男臭いマイクリレーで。

R　**MACHHO**さんはこの時いくつぐらいですかね？

——22歳だね。

R　それでこの貫禄とめっちゃキレキレのラップですからね。その次の〝BEATBOXING feat. KM-MARKIT〟とも通じるんですが、若手のフックアップを積極的に行うのもジブさんの特徴で。**KM-MARKIT**さんは、ジブさんやUZIさん、DJ KEN－BOさんとかが所属してたクルー・URBARIAN GYMに参加してる人です。

KOHH
90年生まれ。ミックステープ『YELLOW T△PE』シリーズで頭角を現し、14年に1stアルバム『MONOCHROME』をリリース。15年のキース・エイプ〝It G Ma feat. JayAllDay, Loota, Okasian & Kohh〟、16年のフランク・オーシャン〝Nikes〟（『Blonde』無料配布ZINEバージョン収録）など、海外でも活躍。20年にはKOHH名義での引退を発表。

MACHHO
78年生まれ。96年にDJ TOMOとともにOZROSAURUSとして活動開始。クラシック曲〝AREA AREA〟収録の1stアルバム『ROLLIN'045』を01年にリリース。生死を彷徨う交通事故を経て復活した06年の3rdアルバム『Rhyme&Blues』が批評的な成功を収める。

CamScannerでスキャン

――URBARIAN GYMには、他にもOJ&STやAKTION（眞木蔵人）など様々なMCも参加していて。

R “未来への鍵”で客演してたAKEEM DA MANAGOOさんとか。そういういろんなラッパーたちが集まって技を磨いたジムですね。

――何のビデオだったか、「都会の野蛮人」って掛け声をかけながらOJ&STがずっと腕立て伏せをさせられてる映像があって、ラップの練習じゃないんだ！みたいな（笑）。

R そして“MR.DYNAMITE”っていうZeebraさんのイメージを完全に決定付けた曲がくるんですけど、やっぱりこの曲は**「奴ら」踏み**ですよね。どんぐらい踏んでるんかな……13踏みくらい出てきてるんじゃないでしょうか。

――「奴ら」が13人は出てくるってことだね（笑）。

R これは「奴ら」っていう言葉を繋げるだけで、ラップって構成できるんや、って各地のラッパー志願者とか不良は思ったはずなんですよね。ただ脚韻は「奴ら」なんだけど、その前には「ラフ」「タフ」「ラヴ」とか、「ドープ」「真剣勝負」「大丈夫な奴ら」っていう言葉が来て、そこでも踏んでるんです

KM-MARKIT
76年生まれ。05年に1stアルバム『VIVID』をリリース。BTSやStray Kidsなど韓国のグループの日本語詞作詞&ディレクションなども務めている。

OJ&ST
OJ FLOW（OJ）と、SENTENCE（ST）による2人組MC。98年からZeebraのツアーにサイドMCとして帯同。03年にミニアルバム『ONE LIFE』リリース。

AKTION（眞木蔵人）
72年生まれ。俳優として北野武監督作品『あの夏、いちばん静かな海。』や『BROTHER』はじめ、数多くの映画、ドラマに出演。01年からはラッパー名義であるAKTIONとして活動し、08年にアルバム『WHITE BOOK』をリリース。

CamScannerでスキャン

よね。名ラインとして〈バスじゃモロ最後部な奴ら〉。これで一気にシンパシーを覚えた人も多いと思うんですよね。

――バスっていう身近なモノを書くことでリアリティが生まれるよね。

R リスナーがリアルにイメージできるというか。その後に「奴ら」で終わらず、〈俺がジブラ ド派手なハスラー／親父が言ってたぜ弱音は吐くな〉ってちゃんと固いライムで落としてくるところもすごいですね。で〝MR. DYNAMITE〟の次に〝プラチナム・デートfeat. DOUBLE〟がくるんですけど、これは〈バスじゃモロ最後部な奴ら〉のリアリティとは真逆のファンタジーなんですよね。プラチナム・デート……したことあります？

――音楽ライターの原稿料の安さ、ご存知ですか？（笑）

R プラチナム・デートはですね、まずバスローブを持ってるのが大前提なんですよ（笑）。話が進んでいく内に、スケールがどんどん大きくなって、飯食いに行くのに飛行機乗りますからね。

――**『おぼっちゃまくん』**の世界だね（笑）。

R それぐらい大人な金持ちの話なんですよね。そしてそのデート相手も〈そ

AKEEM DA MANAGOO
74年生まれ。99年に『1974221』をリリース。

「奴ら」踏み
実際には15人の「奴ら」が登場。05年リリースの〝Street Dreams〟の3ヴァース目でも同じ踏み方が健在。

『おぼっちゃまくん』
86～94年に『月刊コロコロコミック』で連載された小林よしのりによる漫画作品。規格外の御曹司・御坊茶魔が主役のギャグ漫画。「ともだちんこ」などの茶魔語がブームに。

のドレス似合ってて『マジヤバそ』っていきなりジブさんの語彙がなくなるぐらい（笑）。めちゃくちゃ綺麗な女の子なんですよね。でも、それがホンマかもしれんと思わせる伊達男ぶりがジブさんにはあるから、この曲は成り立つんですよね。俺がこれを書いたら完全な嘘。

——「……っていう夢を見た」っていう夢オチになりそう（笑）。

R　これぐらいの夢を見せるエンターテイナーぶりがジブさんですよね。**俺も頑張ろう**（笑）。

——「カンツォーネの響く夏の『夜』」って言われても、パッとイメージ湧かないもんね。島田夫妻っていう夫婦漫才のツッコミ台詞が「カンツォーネー」だったことしか浮かばない。

R　——ホンマに音楽ライターですか？　でも俺もやっとこの歳になってリングイーネとニョッキがパスタってことがわかったからな……（笑）。だからなかなかこの世界観を引き継げる人はいないんですよね。そしてこの曲のアウトロでは、キングギドラの〝大掃除〟をバックに、ジブさんが売れることとか、売れているヒップホップに対して文句をいう奴らのスキットが入る

俺も頑張ろう
頑張ったっぽい、2022（高木）。

大掃除

キングギドラ『空からの力』（95年）収録。TAKE THE RHYME HEADが参加。Kダブシャインのヴァースでの「数字」絡みが白眉。

んですよね。

——アンダーグラウンドの住人的な。でもこういう価値観はたしかにこの当時あったし、それが〝プラチナム・デート〟のアウトロに入る構成はめちゃくちゃ上手い。

R　そして、そうやって非難してくるような奴に対して、釘をさすのが〝城南ハスラー〟なんですよね。それまでジブさんがディスる対象って、ワックMCとかだったんですけど、この曲では成功を妬んでやいのやいの言ってくる人たちに対して、曲でアンサーしてる。だから、プレイヤーとしての視点で、自分の置かれてる状況を描いて回答したのがこの曲。ここまでで、ストーリーテリング、タフな部分、ヤンキー的なセンス、若手のフックアップ、成功者としての姿、やっかみに対するアンサー……って、全方位的に曲を展開してきてるんですけど、続く〝結婚の理想と現実〟は、よりジブさんのパーソナルな部分を見せるんですよね。ジブさんの自伝**『ZEEBRA自伝 HIP HOP LOVE』**やいろんなインタビューでも語られていますけど、ジブさんの生い立ちとか、家庭環境ってかなり複雑なんですよね。そう

『ZEEBRA自伝 HIP HOP LOVE』
08年にぴあから刊行された自伝。

いう部分と、自分がいざ父親になったらっていう部分がこの曲では赤裸々に書かれていて。ただ運良く成功してるんじゃなくて、俺にはこういう経験があって、こういう傷やトラウマも抱えてるってことを、曲として表現していて。

――やっぱり、ギドラや『THE RHYME ANIMAL』の時のような、アンダーグラウンドな存在だった時とは違って、〝Grateful Days〟のスマッシュヒット以降は、ジブさんの生い立ちみたいな部分、特に**横井英樹**氏が祖父だったということがセンセーショナルに週刊誌とかにも取り挙げられることが多かったし、それによって「お金持ちなのね、もともと」みたいな誹謗中傷もあって。そういう視点に対する「回収」という部分もこの曲は大きかったと思う。

R　だから、この曲がこのアルバムに入ってるのはだいぶデカいなと思うんですよね。海外のヒップホップを聴くと、やっぱり複雑な家庭環境の話がたくさん出てくるし、日本においてもそういう境遇の人はたくさんいると思うけど、それがラップに乗ることは、この曲以前はそこまで多くなかったと思うんですよ。でも確実に存在してるし、そういう部分をこの曲で表出させたと思います。

――ヤンキーや不良になることを「単にそういう性格だから」って捉える人

横井英樹
永田町にあったホテルニュージャパンの経営者などとして知られた実業家。海運業や観光レジャー産業で成功。老舗百貨店・白木屋の株買い占めで〝乗っ取り屋〟の異名を持ち、暴力団からの銃弾襲撃事件、自身が経営するホテルの火災事件での実刑判決など波乱の人生を送った。

も日本は少なくないけど、やっぱり非行や犯罪者の統計を見ると、それが貧困に起因してたり、教育や家庭環境によるものだと考えるほうが妥当だと思われることも多いよね。

R　その人を取り巻く環境が、結果としてその人を非行に走らせてしまったり、不良の世界に進むきっかけになってしまうことは絶対にあると思うんですよね。ジブさんは品行方正な道を進まなかったことを、〈親のせいじゃねえぜ 全て俺の意志〉って言ってるけど、そうじゃない人がいることは絶対わかってると思う。そういう人たちも共感するような部分が、この曲にはあると思うんですよね。だからこのアルバムって、不良だったり荒れてる人たちを、ヒップホップっていう表現方法で更正させたり、前を向いて成功を掴みに行かせたりする。人生を好転させるような機能を持った、マジで更生施設みたいなアルバムやと思います。

――たしかに、ラップでリーガルマネーを稼ぐってことを証明した作品でもあるわけで。

R　今でこそもっとエグい環境のことを歌ってたり、実際に悪いことをして

る人たちのラップがあるから、このアルバムの内容はちょっとフィクション色が強かったり、デフォルメしすぎやったり、間口を広げすぎやって感じるかもしれないですけど、当時、これだけキャリアも華もある人が、こういう作品を出すっていうことはすごく大きいことだったと思いますね。そういうアティチュードだけじゃなくて、純粋にラップのスキルも、リリックの構造性も高い、お手本としてもかなりハイレベルなものだと思うし、そういう人が「どうラップすれば自分の成功を見せることができるのか」「どう自分の過去を話せば、同じように苦しんでる奴や、パワーを持て余してる奴らがヒップホップに入ってきてくれるか」っていう筋道をしっかり立てて作品を作ってるんです。それはリスナーに届きますよ！　このアルバムがあったからマイクを持とうと思ったラッパー、むしろこれがなかったら存在しないハードコアラッパーっていうのはめちゃめちゃ多いと思う。「いや、このアルバムで言ってるようなことよりも、俺はもっと苦しい思いをしてきた。それをラップしたい」って思ったラッパーもたくさん出てきたやろうし。だからホンマにこれものすごい金字塔やなと思いますね。

今なお続くヒップホップ革命

――その意味でも、本当に全体を通しての構造性が高い作品だと思うけど、その中でもラッパーからの人気が高い曲といえば、お待たせしました、〝罠 feat.OJ&ST〟です。

R　みんな大好き〝罠〟（笑）。これもストーリーテリングなんですけど、ジブさんのストーリーテリングの中には「拉致シリーズ」というのがありまして、何かあったらジブさんは拉致られるか拉致るっていう（笑）。

――何にも褒められたことじゃない（笑）。

R　不良ならではのヒリッとするスリリングな拉致というか（笑）。この〝罠〟は、OJ&STというUBGの若手と、ジブさんがライブをした後に、とんでもない事件に巻き込まれるんですよね。

――詳細はストーリーテリングものなのでぜひ曲を聴いてほしいんだけど、かいつまんで話すと、ジブさんとOJ&STがライブをする→イベンターらしき人物の運転する車でホテルに戻る→しかしその車で拉致される→廃校でZeebra

CamScannerでスキャン

／OJ／STとそれぞれに分けられて監禁されて……っていうのが大まかな筋で。

R もう大変な目に遭うんですよ、ジブさんとOJ&STは。

――OJ&STはお互いに生存確認するぐらいの。

R 〈「ST！ 何処だ」「Yo 俺はここだ」〉ですね。あのフレーズはラッパー同士なら真似したことがある。俺も**梅田サイファー**で「KZ！ 何処だ」って呼びかけたら、KZさんが「Yo 俺はここだ！」って返すってやってましたよ（笑）。で、話の結論としては、偽Zeebraがいて、そいつがジブさんのふりしてメチャクチャやってて、被害者の関係者が「拉致って痛めつけよう」と。ただ、その中の一人はキングギドラの頃からのファンのB-BOYで、ジブさんはそんなことするわけがないとわかってる。だけど、周りの奴らはいきり立ってるから〈俺じゃ止めらんねぇ〉、でも俺はわかってるから逃げてくれと、見逃すんですよね。それでOJ&STと合流して〈脱出成功〉っていう曲なんですよね。

――さっくりした決着もリアルといえばリアルだよね。物語だったらもっと盛るだろうし。

R やっぱ緊張感がめちゃくちゃあるんですよね。「え、このあとどうなんの!?」

梅田サイファー
R-指定が所属する大阪・梅田発のラップ集団。（第2章を参照）

みたいな。力技で持ってく感じもあるんですけど、それを気にさせない話の推進力とラップ力が、やっぱりジブさんのスキルなんですよね。OJ&STも韻踏みながら会話劇を展開してて、ものすごい高等テクニックを感じる。あと、実際にこの当時のレジェンドに聞いたら、ホンマにライブを潰しに来たりする悪い人がいたらしいんですよね。**マイクジャック**しにきたラッパーを、会場を出た時に拉致るとか、因縁を付けてくるとかマジであったらしいんですよ。

——今より明らかに「不良」は多かったし、やっぱり怖かったもん。

R　だからなまじっか全部嘘でもないという。だからこの"罠"も全部嘘で作り話やったら、こんなヒリヒリしてないです。そして俺が好きなのは「ドンP」っていう台詞ですね。

——これは「ドンペリ」と「ドンペリのピンク」のどっちなのかな。高級なのはピンクだから、やっぱり「ドンペリのピンク」なのかな。

R　こんど聞いてみます（笑）。〈ドンP飲み干すぜグラス無しで〉っていう、このグラス無しでドンペリを飲む行為が、この曲では名前が付いてなかったんですけど、**"東京's Finest feat.BIG-O"**で、それが「サグ飲み」っていう

マイクジャック
他のラッパーのライブ中にステージに乱入し、マイクを握りフリースタイルなどを仕掛けること。

"東京's Finest feat.BIG-O"

03年リリースのZeebra 3rdアルバム『TOKYO'S FINEST』収録。

CamScannerでスキャン

名前が付くんですよ（笑）。

――俺が好きなのはOJ&STの〈その時急な頭痛と睡魔 足もグラついた異変に気付いた「薬だ」〉ってフレーズだよね。「薬だ」って急に語彙がシンプルになる。

R　ハハハハ！　でも、なんでOJ&STは薬が効いたのに、ジブさんは大丈夫やったんですかね。

――なんだろう……OJとSTのグラスにだけ薬が塗られてたみたいな……あ!!

R　そうや！　ジブさんはグラス投げつけてサグ飲みしてたから!!

――あー！　気付かなかった！

R　ホンマや！　ようできてるわ。当時はノリで聴いてたから、ストーリーが破綻してると思ってたけど、今ちゃんと一個一個考えていったら、ちゃんとストーリー繋がってる！

――ちゃんと理解できなかった俺らが幼稚だった（笑）。

R　めちゃめちゃしっかりした話ですね！　だから、もし薬を塗られそうな場合があったら、サグ飲みするしかないですね。グラスは危ないですよ。

——器に毒が塗られてるかもしれないから直飲みって、戦国時代みたいな話だね（笑）。

R　この後、〝ANGELS〟というナンパ系があり、〝THE UNTOUCHABLE III feat. MURO〟という、冒頭で話した〝THE UNTOUCHABLE〟シリーズの第三弾が制作されていて。この曲は**MURO**さんとタッグを組んで、ヒップホップ革命軍として、このゲリラ戦を国に対して仕掛けていくという内容で。だからここで革命軍はUBGだけじゃないってことを形にするんですよね。

——この曲でいえば、それはMUROさん率いる**K.O.D.P**になるだろうし、ある意味では、東京のトップ同士のタッグでもあって。しかもジブさんが、イナタさを含めた「全国のヤンキー」方向にも舵を切ったとしたら、MUROさんは洒脱な「渋谷のストリート」の象徴として君臨しているわけで、その対比と連携も興味深いよね。

R　別のボスたちと手を組んで〈一点突破〉じゃなくて「面」で攻めて行くぞ、と。ヒップホップ全体でこの日本社会を攻めて行くぞというところでこのアルバムは終わるんですよね。で、最後の〝OUTRO〟で〈ヒップホップ革命

MURO
70年生まれのMC、DJ、プロデューサー。DJ KRUSH、DJ GOとのKRUSH POSSEを経て、92年にMICROPHONE PAGERとして活動。世界屈指のレコード・ディガーとしても知られており、KING OF DIGGIN'の異名を持つ。

K.O.D.P
MUROが率いるクルー。「King Of Diggin' Production」の略。NITRO MICROPHONE UNDERGROUNDのメンバーの多くや、DJ、トラックメイカー、MUROのショップ「SAVAGE」の店員などが在籍。

CamScannerでスキャン

続く21世紀更なる変革のため 乞うご期待〉ってこのアルバム終わるわけです。

――というわけで、今回はジブさんの1st、2ndについて話してきましたけど、この2枚は確実にシーンを変えたと思うし、それ以外にももし〝Grateful Days〟がなかったら……もし〝**公開処刑**〟が生まれなかったら……という世界線があったら、いまの音楽シーンはどうなってるのかなってすごく考えるんだよね。それぐらい影響力とインパクトを与えたよね。

R 〝**Street Dreams**〟でも〈テレビにラジオ新聞も世界が動く 俺が韻踏むと〉って言ってますけど、まさにそうで、ジブさんがライムすれば世界を動かしてしまうぐらいのデカい力を持ってるんですよ。**『フリースタイルダンジョン』**を始めたのもジブさんご本人で、結果、そこにはいろんな毀誉褒貶がありますけど、でも『ダンジョン』があったことで、間違いなくラッパーは増えているし、ラッパーの食い扶持も作ってる。

――それこそ06年に放送されていた**『シュガーヒルストリート』**はサイバーエージェントが全面バックアップして始まったし、その流れは『ダンジョン』

〝公開処刑〟

キングギドラの2ndアルバム『最終兵器』(02年)収録。K-1やキック・ザ・カン・クルー、リップ・スライムをディス、揶揄したリリックが物議を醸した。

〝Street Dreams〟

05年にシングルリリース。06年リリースの4thアルバム『The New Beginning』にも収録されている。

『(フリースタイル)ティーチャー』にも繋がっていて。そういう部分から、どうしても立ち回りが上手い人だと見られがちな部分があるけど、そこに腹に一物があって何かやってるというよりも、理解ある出資者がいればヒップホップのテレビ番組できるでしょ、そしてその輪が広がれば最高でしょ、ぐらいのシンプルな発想だと思うんだよね。

R そうそう。だから、ジブさんの行動は、自分のためにやってるってよりも、結局シーンや誰かのために回っていくようになってると思うんですよね。ヒップホップのためにやったら余裕で矢面に立つし、批判も全部甘んじて受けるしっていう、もう腹を括ってはる人。それがジブさんだと思います。だからどこまでいってもマジでラップが好き、人が好きな方だと思うし、それゆえに協力者も多いんやと思う。だって俺でもチェックできてないような大阪の若手とかチェックしてたりしますから。マジで好きなんですよ、ヒップホップが。だから、こういう人が作ってきたラップを聴いて育ってきた世代——それはジブさんをディスってる人も含めて——は、みんな心のどこかで「ジブさんのことを舐めたら俺が殺す」って思ってるはずです(笑)。

『フリースタイルダンジョン』
15年〜20年にかけて放送。フリースタイルのラップバトルを全国に届け、般若や漢、サイプレス上野、R-指定、T-Pablow、CHICO CARLITO、呂布カルマなど多くのラッパーがお茶の間にも浸透するきっかけとなった。

『シュガーヒルストリート』
06年〜07年放送の音楽番組。Zeebraと有田哲平(くりぃむしちゅー)をホストに、様々なヒップホップ、R&Bアーティストがゲストに迎えられた。

『(フリースタイル)ティーチャー』
20年からテレビ朝日にて放送中の音楽バラエティ番組。Zeebraと青山テルマがMCを務め、指導役であるラッパーと、生徒役であるタレントがタッグを組みフリースタイルラップに挑戦している。

第2章

梅田サイファーの異常な愛情

2019年12月2日｜大阪ロフトプラスワンウエストにて開催

CamScannerでスキャン

UMEDA CYPHER

PROFILE

梅田サイファー

07年に大阪・梅田駅の歩道橋で、毎週土曜日の夜に行われていたサイファーから派生したラップ集団。16年に1stアルバム『See Ya At The Footbridge』をリリース。最新フルアルバムは『ビッグジャンボジェット』(21年)。梅田サイファーとしてイベント出演を行うほか、メンバー個人のソロ活動なども活発に行っている。ウェブテレビ番組『梅田サイファーの水曜The NIGHT』(ABEMA)や、ラジオ番組『AuDee CONNECT』(JFN系列)に出演中。

CamScannerでスキャン

歩道橋での出会い

――今回の『Rの異常な愛情』は大阪・ロフトプラスワンウエストでの開催ということで、Rくんが参加する「梅田サイファー」をテーマにトークを進めて行ければと。そしてゲストとしてふぁんくくん、KZくん、KBDくん、Pekoくん、KOPERUくん、KennyDoesくんを交えて、話を進めましょう。まず、Rくんが梅田サイファーに参加したきっかけは?

R このイベントでもこれまで話してきたように、僕は中学校の頃からヒップホップを聴き始めたんですが、中3ぐらいから自分でもラップを始めて、最初はヤマトとタクトとヒロムっていう仲の良い友達の前で披露したり、仲間内でサイファーをやってたんですね。それでもっと人前でやってみたいなと思い始めたんだけど、地元の堺のクラブに行くのはちょっと怖いなと。

――15~16歳じゃちょっとビビるよね。

R ヤンキーでも不良でもなかったんで、そういうツテもなくて。そんな時に、ヤマトがYouTubeで梅田サイファーの動画を見つけて。そこに映ってい

ふぁんく

07年に「もっとラップがしたい」という思いから毎週土曜日に大阪・梅田駅の歩道橋にてサイファーを始める。21年に梅田サイファー脱退。最新アルバムは『Balance』(21年)。

KZ

07年から梅田サイファーに参加。最新アルバムは『SADACA』(21年)。22年9月には、ローラとともに徒歩で日本1周を達成。KZ and doikenとしても活動。

たのはKZさんとふぁんくさんが中心やったんですけど、ゴリゴリのB-BOY風でも、ヤンキー風でもない、普通のお兄ちゃんたちが、輪になってラップしてて。当時、KZさんはロン毛をちょんまげでくくってて、ふぁんくさんは今よりだいぶ痩せてましたね（笑）。その当時からみんなすごいテクニカルなラップで、その部分にも興味を持ったんで「とにかく行ってみよう」と。それが高校1年の時ですね。めっちゃ雨の降ってる土曜だったのを鮮明に憶えてます。

——事前連絡やコンタクトも無しに、とりあえず行ってみようって感じだったの？

R　そう。mixiにコミュニティがあって、そこに「毎週土曜に梅田の歩道橋でサイファーしてる」と書いてあって。情報はそれだけでしたね。ラッパーが集まってラップし合ってて、ライブでもないからお客さんもおらん、お金もかからん、って環境だったのも、俺ら的にも行きやすくて。それで堺から結構な長旅を経て、梅田まで行ったんですよ。

——とは言っても隣の市だよね（笑）。

KBD

25歳の時にMCを志し、梅田サイファーに参加。大学時代に棒術や琉球空手といった古武道に明け暮れていたことから「古武道」とも名乗る。20年に1stアルバム『PLANET OF KBD』をリリース。

peko

12年から梅田サイファーに参加。DJ、トラックメイカーでもあり、高槻POSSE、黒衣としても活動。イベント「アマチュアナイト」を不定期で主催している。

KOPERU

15歳の頃より梅田サイファーに参加。17歳で「B BOY PARK 2009

R　やっぱねぇ、大和川を越えるっていうのが大変なんですよ。あの川が堺市と大阪市の区境なんで、堺の田舎もんからしたら、橋を渡る＝都会に足を踏み入れる感じなんで（笑）。まあそれで、歩道橋に行ったら雨やったんで誰もいなかったんですよ。それでヤマトと一緒に探したら、歩道橋を降りたところの踊り場みたいな場所で、サイファーが始まってて。その時にいたのはふぁんくさん、KZさん、KOPERU、**テークエム**、**ペッペBOMB**、**たまこぅ**とか。まずは遠巻きに見てたら、誰一人として詰まることなく即興でラップをやってて、それが衝撃でしたね。それで勇気を出しておそるおそる間に入らせてもらって、というのが、サイファーに参加した最初ですね。それで「ああ、全然怖くない、不良じゃないし、みんなラップ上手いし、すごい世界やな」と感動してたんですけど、KZさんが置いてた傘を酔っ払いのおっちゃんが蹴ってしまって。

――通路でやってるわけだしね。

R　それで、そのおっちゃんが何も言わずにそのまま通り過ぎたら、KZさんが追いかけていって「お前も蹴ったろか！」って。

-UNDER 20 MC BATTLE-」で優勝。R-指定とはコッペパンというグループを組んでいた。KOPERU & ISSEI「THE PORTIO」としても活動。

KennyDoes

KOPERUのバックDJとして活動を始め、コッペパンにも参加。KZと「KZ and doiken」としても活動。21年にKennyDoes & Cosaqu名義で『NEVER CHANGE』をリリース。

mixi

04年にサービス開始し、爆発的に広まった日本のSNSの先駆け。「コミュニティ」というグループで同じ趣味のユーザー同士がネット上でやり取りができた。

CamScannerでスキャン

――ハハハ。結局怖いじゃん（笑）。

R　まあそれはアクシデントですけど（笑）。ただ、いわゆる不良的な怖さはないけど、ラップに対しては厳しかった。ふぁんくさんも最初の空気はすごい怖かったですよ。ラップの内容も結構刺々しかったし、拙いラップをする奴は容赦なくラップで切り捨てていく。サイファーの輪に入るタイミングを見誤って、「チェック、ヨー、チェックチェック……」って言ってた人に、「さっきから何回も何をチェックしてるんか知らんけど」って（笑）。

――心折れるわ（笑）。

R　その緊張感はあったんで、ホンマにラップ頑張ろうと思いましたね。あと、梅田サイファーに来る若手が全員陥るんですけど、最初の3ヶ月から半年ぐらいは、全員ふぁんくさんのラップスタイルに感染する。それぐらいふぁんくさんのラップは、梅田のフリースタイルのお手本だったんですよね。即興で、ちゃんとおもしろい言い回しで、確実に長い韻を落としながらラップするのが、ふぁんくさんはホンマに見事やった。俺とたまこぅも自分のスタイルが見つかるまで、ほぼふぁんくさんのトレースでしたね。

テークエム

18歳の頃より梅田サイファーに参加。Japidiotとしても活動。21年に全曲BACHLOGICプロデュースの1stフルアルバム『THE TAKES』をリリースした。デザイナーとしても活動しており、『Rの異常な愛情』のグッズデザインも手掛けた。

ペッペBOMB

地元尼崎で高校の同級生テークエムとFUNHOUSEを結成し、後に梅田サイファーにてKOPERUとコッペパンを結成。日本におけるフリースタイルでいち早く三連符や倍速のフローを使いこなした天才。

――梅田スタイルの支柱になっていたと。

R　そうですね。話を戻すと、サイファーが終わって初めて自己紹介をしたら、テークエムとKOPERUとは、実はそれ以前に**モバゲー**で繋がってて。ふたりとも同い年ぐらいやのに、曲を作ってモバゲーにアップしたりしてたから知ってたんですよ。あと、**ネットライム**でもテークエムとは戦ってたり。それで初参加の時に「俺、テークエムやで」って言われて「あー！　テークエムさんですか」ってとこから仲良くなって。KOPERUは当時モバゲーのアイコンが、白Tシャツ、短パンの坊主っていう本当にシンプルなアイコンやったから、どんな人なんやろうなと思って会ったら、目深に帽子を被って、危なそうな空気があったんですよね。なんというか、「遊戯王」カードの「未熟な密偵」にそっくりやなと思って（笑）。

――当時の梅田サイファーはどんな状況だったの？

R　僕が行ったタイミングで、ペッペBOMBが16歳で**韻踏合組合**が主催する**「ENTER」**のMCバトルで準優勝したんですよ。その前にはふぁんくさんが18歳ぐらいで優勝して、KOPERUも16歳で優勝したりという時期

たまこぅ

コッペパンとしてR-指定らとともに活動。音信不通の期間を経て、長崎・五島列島で学童保育の仕事をする傍ら、島の子どもたちにラップを教えていることが判明。タマイコウスケ名義で22年にアルバム『G.O.T.O.』をリリース。

モバゲー

06年にサービス開始した携帯電話向けのポータルサイト兼SNS。日記やサークルの掲示板でユーザー同士の交流が可能だった。

やって「梅田はすごい集団なんやな」とそこで改めて感じて。だから俺からしたらホンマに新しい世界に飛び込んだという感じだったし、なんとか追いつけ追い越せって気持ちでひたすら毎週土曜日に梅田まで通うようになったんですよ。通い続ける中で実際にラップが上手くなっていくのが体感できたし、とにかく梅田サイファーに参加することがめっちゃ楽しくて、そこからどんどんラップにのめり込んでいきましたね。

――その中でKOPERUくん、ペッペBOMBくん、たまこぅくんと**コッペパン**を組むことになるよね。

R 最初に行った日に、もうKOPERUから「俺とペッペBOMBでコッペパンっていうグループを組んでるんやけど、そこで一緒にやらへん?」って、たまこぅと俺が誘われたんですよ。で、最初は4人組として動き出して。RECも結構早い段階でやったよな。KOPERUの家にレコーディングの機器とかが結構揃ってて。それでKOPERUが住んでた家にみんなで泊まって、曲を録るみたいな流れが一時期ありましたね。コッペパンの曲もKOPERUんちで録ったんですよ。で、ペッペくんと俺とKOPERUが

ネットライム
インターネットの掲示板などでリリックのみをぶつけ合って行われるフリースタイルラップ。

韻踏合組合
関西を代表するヒップホップグループ。（第4章を参照）

「ENTER」
韻踏合組合が06年より始めた、ライブとMCバトル、DJプレイが一度に味わえる「ラッパーのラッパーによるラッパーのための」イベント。

コッペパン
KOPERUとペッペBOMBによって結成され、R-指定とたまこぅが加入。のちにペッペBOMBとたまこぅが脱退し、KennyDoesが加入した。12年に活動休止。

ヴァースを録って、次にたまこぅがヴァースを録ることになったときに「集中できへん」って言い出して。それで「全部さらけ出してラップをする」っていきなり全部服を脱いで全裸でレコーディングしようとしたんですよ。それにすげぇKOPERUが怒って。

KOPERU 違う違う。全裸になったのに怒ったんじゃなくて、レコーディングの合間に俺が寝てて、ぱっと目が覚めたらたまこぅの肛門が目の前にあったから。

R そうや。寝てるKOPERUの顔面の前に自分でケツ広げながら、「KOPERUくん、起きてー」って起こして（笑）。まあ、そんなコッペパンは、3回目ぐらいのライブで、たまこぅが抜けるんですよね。

――早いな（笑）。

R 曲も出してないし、ライブも3回目なのに、「方向性の違い」という大層な理由で（笑）。しかも理由が「ICE BAHNのライブを見て、コッペパンのライブのレベルの低さと、ICE BAHNのプロフェッショナルさに圧倒的な差を感じた」と。

ICE BAHN
01年に結成された玉露、FORK、KITの3MCとトラックメイカーのBEAT奉行からなるグループ。03年に代表曲"越冬"収録の1stアルバム『STARTREC』をリリース。

CamScannerでスキャン

――ライブ3回目のグループと、すでに歴戦のグループだったICE BAHNを比べても、とは思うけど、どんな内容だったの？

R 「ENTER」のゲストライブにICE BAHNが出た日に、コッペパンもライブをさせてもらったんですよね。当然、ICE BAHNはめちゃくちゃヤバいライブをカマしたんですけど、コッペパンはKOPERU、俺、ペッペ君、たまこぅって背の順に縦に並んで、リズムに合わせて右、左、右、左って出るのをやったんですよね。おもしろいと思って。

――〝Choo Choo TRAIN〟の簡易版というか。

R そのときにタイミングを間違えたら、たまこぅが「ちょっと止めて！」って。

――それはリハで？

R 本番。客前で「もう一回最初からやらせてもらっていいですか？」って（笑）。そんなグループがライブをしたもんやから、これはもうレベルが違うと。

――レベルが違うとかって話じゃないよね（笑）。

R そんなエピソードを話し出したら止まらんぐらい、当時10代の俺たちに

とって、梅田サイファーは大きな存在でしたね。

アメ村シーンとの融和

——梅田サイファー自体は10代とか20代前半が中心だったの?

R そうですね。でもKBDさんみたいに、スーツで仕事帰りに来るみたいな大人の人もいて。年齢はバラバラだけど、上下関係もほぼなくて。それも居心地が良かったんですよね。

——先輩・後輩の上下関係、ヒップホップの上下関係からはちょっと逸脱してるというか。

R そういうのが苦手な人らが集まってきてる部分もあったと思いますね。で、みんないろんなイベントにノルマ払いまくって出たりしてた時に、「ラップイケてる奴からノルマなんか取らんよ、そのかわりブチかましてな!」って誘ってくれたのが、**「アマチュアナイト」**をやってたpekoさん。

——そこでpekoくんも繋がっていくわけだ。

R だから、上下関係とか先輩後輩、ノルマみたいな状況と距離を置いてた

「アマチュアナイト」
pekoが主催する不定期イベント。8時間ぶっ通しでpekoが日本語ラップのみをDJプレイする「アマチュア8耐」なども行われている。

んで、（伝統的な）ヒップホップ・シーンから距離はあったと思うんですよね。でもその状況でスキルをひたすら磨いて、「ＥＮＴＥＲ」とかのバトルとかに勝つようになって、梅田サイファーは市民権を得ていったというか。

――と、Ｒくんの見解を伺いましたが、ゲストからの見解もお願いします。

KZ 梅田の中で、ふぁんくが最初に「ＥＮＴＥＲ」で優勝するんですよね。07年の5月から梅田サイファーが始まって、08年の春にふぁんくが優勝する。その時期はヒダさん（HIDADDY／韻踏合組合）が「UMB」の大阪で3連勝したり、脂が乗り切ってた無敵の時期で、大阪のバトルといえばヒダさんか悠然a.k.a.赤いメガネさん（COE-LA-CANTH）か、みたいな、アメ村が中心の時期だったんですよね。そこで、いわゆるアメ村シーンとは関係のなかった、ふぁんくさんが優勝するんですよ。

R しかも、ヴァイブスで盛り上げたり、お客さんの方を向いて煽るようなスタイルじゃなくて、冷静に相手の方を見つめて、ホンマに淡々と上手いラップをし続けるっていう姿勢も珍しかった。

KBD それこそレジェンドって言われている存在を、そこまでシーンでは

「UMB」
05年より始まったLibra Records主催のMCバトル大会。初回優勝はカルデラビスタ。R-指定は12～14年に3連覇を達成。

COE-LA-CANTH
02年に結成された8人組グループ。06年に1stアルバム『SWIM STANCE』をリリース。

全然知られてないふぁんくが、バックボーンやシーンからのプロップじゃなくて、ラップ・スキルを武器に勝ったっていうのは、本当に新しい時代を感じましたね。

KZ　ふぁんくが優勝して、ペッペBOMBが準優勝して、KOPERUも優勝して……梅田サイファーが怒涛のように頭角を現しだす！みたいな。

R　でも、どこの馬の骨かわからん奴が出てきて勝っていくっていうのに対して、「おい！」みたいなのはめっちゃありましたね。最初はボロクソに言われてたんですよ。俺らみたいなタイプがバトルに勝つと、「あんなオタクなやつら殺せ！」みたいな感じの野次が上がったり。

――「伝統的なシーン」からしたら異物だし、おもしろくない存在に映ったというか。

ふぁんく　僕は「個人」としてはそういう空気は感じなかったですけど、「梅田サイファー」としてはめちゃめちゃ感じましたね。KZさんがUMBの大阪予選でバトルした時とかも、「やったれ！」みたいな野次が飛んでき

KZ　俺があるMCに勝ったら、負けたMCに対してその先輩が「お

なんであんな奴に負けんねん!」って楽屋でずっと詰めてて。俺も同じ楽屋におるから「あの〜……あんな奴って言われてる僕、ここにいますよ〜……」みたいな(笑)。

peko Rが10年にUMBの大阪予選で初めて優勝した時も、「あんなストリートにいいねぇクソガキがなんで大阪の代表なんや!」みたいなことを公に言うラッパーもいて。

KOPERU Rもその先輩に挨拶しなかったし。

R そういう言葉が頭にきて挨拶しなかったというよりは、「シバかれたらどうするん? 怖いやん!」って方で(笑)。

KOPERU 楽屋でその間にいる俺とかめっちゃドギマギしたもん(笑)。

peko アメリカ村の結束力みたいなものも当時は異常に強かったですよね。「キタ」(梅田、大阪駅方面)だったり、他の地域の奴らに対して、「ミナミ(心斎橋やアメ村方面)以外にヒップホップやってる奴なんておるん?」みたいな雰囲気もあった。それに、韻踏合組合やCOE-LA-CANTHのような、アメ村に近い人たちは、服屋やレコード屋、ショップ、クラブの店員だった

CamScannerでスキャン

りみたいな、そういう繋がりもあったんですよ。

――東京でいえば、渋谷や宇田川町がそれに近かったし、そこで一つのコミュニティが形成されていたと。

peko　でも僕らはそういうコミュニティや繋がりの中にほぼいなかったから、なんとなくの後ろめたさみたいな部分を感じてもいたんですよね。

――pekoくんのもう一つのクルー、**高槻POSSE**に対してもそういう感じだったの？

peko　高槻POSSEの面子はアメ村とめっちゃ仲良いんです。だから俺は（アメ村文化圏とは距離がある）梅田サイファーにもいるし、（距離が近い）高槻POSSEにもいるし、っていう絶妙な距離やったんですよね。だから梅田サイファーへのディスめいた言葉も聞こえるし、でも俺は梅田サイファーにも参加してるし……って（笑）。

ふぁんく　板挟みやった？

peko　もうめちゃめちゃ（笑）。

R　そういう状況をなんとかスキルと実力で徐々に振り向かせていたという

高槻POSSE
大阪府高槻市を拠点に活動するヒップホップ集団。11年のEP『ヨセアツメ』にR-指定をはじめとする梅田サイファーの面々が喰らう（R談）。18年に1stアルバム『P.O.P』をリリース。

か、認めさせていったみたいな流れがあったんですよね。そんな僕らを、最初からおもしろがってくれたのが、韻踏合組合や**SHINGO★西成**さん。偏見なしに「お前ら、ラップ上手いからええやん」ってお墨付きを早い段階からくださって。

peko　俺らに対して偏見を持ってた人たちも、RのUMB大阪5連覇、全国3連覇だったりも含めて、Rや俺たちのスキルを認めてくれてるし、実力で証明したっていう部分はあると思いますね。

R　そういう風に、空気が良くなって来た時に入ってきたのが、KennyDoes。結構美味しいとこ取りというか。

――辛い時代を知らずに（笑）。

R　最初はメガネを掛けてすごい野暮ったい感じやったんですけど。

――僕が最初に**「蝕」**でコッペパンのライブを見たときは、KennyDoesくんはDJだったんだけど、そのイメージだったね。

R　あるタイミングからその眼鏡が伊達やったっていうことが判明して（笑）。タバコも吸うようになり、車の免許取ったぐらいから一気に大人になっ

SHINGO★西成
72年生まれ。05年にシングル『ゲットーの歌です（こんなんどうです？）』をリリース。大阪・西成区のフッドスターとして活躍し、生まれ育った釜ヶ崎の三角公園にて自身主催の「米カンパライブ」を開催。最新アルバムは『独立記念日』（22年）。（単行本第一巻で紹介）

「蝕」
ダースレイダーが主催した日本語ラップオンリーのヒップホップクラブイベント。

て。それと比例してむちゃくちゃラップも上手くなったんですよね。Kennyが初めて来た時はどんな感じやった?

KennyDoes あるイベントで、ちょっと寒いライブをやってるグループがいて、それをRくんとKBDさんがだいぶ後ろのほうで「フハハハ!」って笑ってるんですよ。

R そんなわけないやろ! ちゃんと見てた!……と思う(笑)。

KennyDoes それで「あ〜、ちょっと怖いなぁ」と思ってましたね(笑)。そこにKOPERUくんもいて、KOPERUくんは「B BOY PARK 2009 -UNDER 20 MC BATTLE」で優勝してたのを知ってたし、Amebreakのインタビューも読んでたから、Rくんよりはちょっと性格が良さそうと思って話しかけたんですよね(笑)。

KOPERU 二択ミスってんな(笑)。

全員 ハハハハ!

KennyDoes で、KOPERUくんから梅田サイファーのことを教わって、m・i・xiでKZさんが毎週梅田サイファーの情報を載せてくれてたんで、そ

「B BOY PARK」
97〜17年まで毎年夏に代々木公園で行われていた日本最大規模のヒップホップイベント。99年からはMCバトルが行われ、同年よりKREVAが3連覇を達成した。

Amebreak
07年より運営を開始したヒップホップ情報サイト。20年にサービス終了。

れを見て「アマチュアナイト」で知り合ってたpekoさんと僕とで「行きます」って書き込んだら、「今回は時間あるんで18時半からやってます」ってレスポンスがあって。

KZ めっちゃ早かったもんな、集合時間。憶えてるわ。

KennyDoes それで18時半ぐらいから俺とpekoさんとKZさんの三人でラップを最初にしたのが梅田に合流したきっかけですね。

R 意外な面子も梅田サイファーに結構来たりしてますよね。

KZ してる。

KennyDoes **チプルソ**さんもそうやね。

R チプルソさんはホンマにキレキレのラップをしてカマして帰っていったし、TAKA（**WILLYWNKA**）もかなり若い頃に一回来てたり。梅田のメンツは、結構ロジカルなラップをすることが多いんですけど、そんな中にたまにストリートのパンチラインを持ってくる人がおると、全部かっさらっていくみたいこともあるんですよね。覚えてるのが、名古屋の**ALCI**さんってておるでしょ。

チプルソ
86年生まれ。11年からアルバム「一人宇宙」シリーズを発表し、21年には最新作『一人宇宙V -地球到達-』をリリース。かつてはMCバトルでも活躍していた。ZAZEN BOYSやクリープハイプなどともセッションや共演をしている。

KennyDoes 日系兄弟の。

R そうそう。ＡＬＣＩさんが参加した時、ストリートにハマりすぎて悪いことすんなよって意味で、最後にひと言「お前ら、新聞にだけは載るな」みたいなことを……。

KennyDoes 言われた！

R 最後にバシッと決めて。あれにはみんなぶちアガりましたね。

KZ 梅田的なライム主義がぶっ壊されるときは、やっぱり衝撃を受けるんですよね。今の梅田サイファーでいえば**ILL SWAG GAGA**。ちょっと頭の回路が人と違うところに線が繋がってるから、結構不思議なワードを出してくるんですよ。例えば、誰かにクソ食らえって言われて「俺はクソは食わねぇ。ウサギじゃねぇから」とか、「お前とはスキーに行かねぇ。なぜならソリが合わねぇから」みたいな。

KOPERU 上手い。

KBD それ、めっちゃ上手いやん。

KennyDoes それは同じサイファーの回で出てますよ。

WILLY WONKA
97年生まれ。「高校生RAP選手権」出場や『ラップスタア誕生』出演を経て、18年に1stアルバム『SACULA』リリース。17年からはVIGORMAN、GeGとともに変態紳士クラブとしても活動している。

ALCI
兄・BRUとともに日系ブラジル人デュオである日系兄弟を組み、15年に1stアルバム『ESTA EM CASA』をリリース。「UMB」などのMCバトルでも好成績を残している。

CamScannerでスキャン

——でもライムではないよね。

KZ それに最初は結構イラッときてたんですけど（笑）、いつしかその魅力にハマってしまうという。

梅田サイファーの武器

——梅田サイファーにはヴァイブスよりもロジックだったり、スキル至上主義的なものを感じる部分があります。Rくんがこのイベントでスキル分析を細かくしてきたことも、その流れに通じるのかなと思うけど、それはどうでしょう？

KZ まず、基本的には「サイファー」なんで、グループやユニットではないし、メンツやメンバーっていう概念も希薄で。梅田サイファーの輪に一回でも入った人をメンバーとして数えたら、何百人っていう規模になると思う。だから「梅田サイファーとして一括りにして何かを言う」ことは難しいし、今の中核の人間でさえ、それぞれのアティチュードは違うはず。それを前提にして、それでも大きく言うとしたら、梅田サイファーの連中は、例え

ILL SWAG GAGA

09年前後から梅田サイファーに参加。19年に1stフルアルバム『PEDIGREE』をリリース。『ビッグジャンボジェット』ではフックを担当。

ばドラッグの売人をしてたとか、家がすごく貧困だったりみたいな、「バックボーンや物語」がゼロではないけど、そういったモノを武器にラップするのは、決して格好良いことだとも思わない。それよりも、単純に「ラップとして格好良い方が正義」じゃないかという意識が、初期の梅田サイファーに集まったメンツの考え方の根底にあったと思うし、それが浸透してる気がしますね。それには、ふぁんくの存在が大きい……デカいですね。

ふぁんく 俺の姿を見て言い直した？（笑）

peko 出会った頃はもっと細かった（笑）。

ふぁんく 結婚して20キロ近く太った。幸せ太り（笑）。

R 顔つきもすごい柔和になりましたよね。昔はめっちゃ怖かったですよ。KZさんも怖かったし。

KZ 今いちばん怖いのはKBDさん。

KBD それはRが盛った話をラジオでしてるからやろ（笑）。

R 衝撃でしたよ。梅田でサイファーしてる時に、KennyDoesの女友達が通りかかって、Kennyが挨拶しに一瞬だけ抜けたんですよ。それで「ツレでし

CamScannerでスキャン

たわ〜」って戻ってきたKennyDoesにKBDさんがおもいっきしローキックを入れて（笑）。

KBD　僕のKBDっていう名前は、古武道っていう格闘技をやってたのが由来なんですけど、それもあって、バイオレンスに対するハードルが低いんですよ（笑）。

――絶対ダメだよ（笑）。

KBD　それが許される環境にいたんで（笑）。しかも、その日は結構な量のお酒を飲んでたんですよね。それでサイファーに行ったら、みんながストイックにラップしてる時に、新参者のKennyDoesが女の子をはべらかしてると。それで「おい！　どういうことやねん!?」と。

KZ　KBDは梅田サイファーと出会う前までは、拳でしかコミュニケーションを取れないような人やったんですよ。今はライムと暴力っていうその二通りを覚えて。

――ライム&暴力、R&Bだ（笑）。

KBD　それを経て、今言えることは……KennyDoesホンマにごめん（笑）。

——サイファーは時間的にどれぐらいやってたの？

KZ　毎回、だいたい俺が一番最初に行って、20時ぐらいにスタートして、ぽつぽつ集まってきながら終電まで。車に乗り始めてからは、2～3時ぐらいまでやってましたね。それで終わったら1時間ぐらい喋って、みんな帰っていくみたいな感じでしたね。

R　あと、KZさんが横浜に住んでる時に「東京でサイファー行こうや」って、俺とKZさんの二人でサイファーに行って、最初みんなで和気藹々やってたのに、最後はみんな俺らから離れていって、俺とKZさん二人だけでサイファーしてた（笑）。

ふぁんく　二人おるだけマシやって。アメ村でやった時、最後は俺一人になってん（笑）。

——それじゃひとりごとだよ（笑）。

KennyDoes　でも、その傾向はホンマどこに行ってもありますよね。だから梅田のサイファーは、スタイルとして他に比べると異端なんだと思う。

KZ　結構いろんな理由があるんですけど、ボキャブラリーの幅が普通のサ

CamScannerでスキャン

イファーとは全然違う幅を持ってて。

KennyDoes　あと、小節が短い。

KZ　場所によっては「何小節で回していきましょう」みたいな暗黙のルールがあるサイファーもあるけど、うちはもう調子が良くなると、もう2小節とかで入って行くんですよ。そうすると、その素早さについていけない人は、別の輪っかでやった方が楽じゃないですか。そうすると、どんどん梅田以外のメンバーが抜けていって、僕らだけ寂しい思いをする（笑）。

R　でも、そこで梅田の瞬発力は培われたと思うし、それが梅田の武器だと思いますね。

「人はなぜに韻を踏むのか？」

——なるほど。では後半は梅田サイファーの皆さんにひとり一曲ずつ、日本語ラップの作品を選んでもらい、それを会場の皆さんに紹介と解説をして、「異常な愛情」を語ってもらおうと。要はプレゼン大会ですね。では早速、KennyDoesくんからお願いします。

『Rock it』

リップスライムの4thアルバム『MASTERPIECE』（04年）収録の楽曲。メンバーのPESがプロデュースしており、彼の弾いたギター音がサンプリングされている。

『ミュージックステーション』

86年から放送されているタモリが司会を務める音楽番組。

エミネム

72年生まれ。ドクター・ドレに見出され、彼のレーベルより99年にメジャーデビューアルバム『The Slim Shady LP』、翌年に『The Marshall Mathers LP』をリリースし、どちらも大ヒット。02年には映画

KennyDoes　僕が選んだのはリップスライムの〝**Rock it!**〟です。これは僕の原点にして一番衝撃を受けた曲。リリースされたのが僕が小6か中1ぐらいの時だったんですけど、リップは『**ミュージックステーション**』でこの曲をスタジオ・ライブでやったんですよね。それまで僕は日本語ラップって全然聴いてこなかったんですけど、聴いた瞬間に洋楽イズムというか、洋楽っぽさをすごい感じて。

――それまではUSのラップを聴いてた？

KennyDoes　USラップっていうか、**エミネム**と**リンキン・パーク**と**リンプ・ビズキット**を聴いてました。あと、**メタリカ**と**ディープ・パープル**。

――なかなか複雑な音楽体系だけど（笑）、そこで感じた「洋楽っぽさ」はどういった部分？

KennyDoes　一番は裏拍なんかなって。例えば〈そんじゃあこじ開けろ Z on the mic 御存知／目笑ってねぇぜ本当ファンキー／オレらいたって本気〉っていうパートの裏拍へのアプローチと、**RYO-Z**さんと**PES**さんのシームレスなラップの展開がグルーヴに繋がる部分が、聴いててすごく気持

『8 Mile』に主演し、主題歌〝Lose Yourself〟は2002年度アカデミー歌曲賞を受賞した。

リンキン・パーク
96年に結成されたオルタナティブロックバンド。00年のデビューアルバム『Hybrid Theory』から世界的な成功を収める。04年にはジェイ・Zとコラボしたマッシュ・アップアルバム『Collision Course』をリリース。17年にボーカルであるチェスター・ベニントンが死去。

リンプ・ビズキット
94年に結成。ヘヴィメタルとヒップホップを融合したラップメタルバンドで、97年に『Three Dollar Bill, Y'all$』でデビューし人気が爆発。音楽性や言動を同業アーティストから揶揄、批判されることも多いが、ミクスチャーロックファンに与えた影響は大きい。

CamScannerでスキャン

ちよかったんですよね。歌詞の内容的にも、「何でもいいぜ、とりあえずアガろうぜ」みたいな部分が、洋楽かぶれというか、あんまりJ-POPに馴染めなかった自分にも響いたんですよね。

R　この曲はPESさんがメロディーでフロウを作っていくのに対して、RYO-Zさんが言葉の持ってるアクセントとか響きでフロウを作っていくのが対比になっててホンマに気持ち良い。「か行」を続ける〈心コントロール可能じゃあEasy〉とか、文章から書いてたら出てけえへんようなラップで。

KennyDoes　そこは今の自分の歌詞の書き方にも影響を与えてるし、ホンマにRYO-Zさんがいなかったら自分はいないくらいに思ってますね。

R　いちどRYO-Zさんと**LITTLE**さんがラップ論でめちゃ激論したらしくて。RYO-Zさんはラップをパーカッションみたいに作りたい、メッセージは一言だけバンとあればよくて、他は口気持ち良く、打楽器的にも聴感を気持ち良くするために書きたい、と。一方でLITTLEさんは頭からケツまで全部メッセージやリリックで埋めたい、って激論したらしくて。そのどっちの気持ちもわかるなと。

メタリカ
81年に結成されたヘヴィメタルバンド。86年リリースの3rdアルバム『Master of Puppets』で地位を確立し、同作の邦題でもある「メタル・マスター」として今なお活躍中。

ディープ・パープル
68年に結成されたイギリスのロックバンド。後進のヘヴィメタル、ハードロックバンドに与えた影響は大きく、"Highway Star"や"Smoke on the Water"など年代問わず知名度の高い楽曲が多い。

RYO-Z
74年生まれ。リップスライムとしての活動だけでなく、05年からはILMARIとともにTERIYAKI BOYZにも参加。19年にはSTUTS、BIMと"マジックアワー"で世代を超えた共演を果たした。

CamScannerでスキャン

KennyDoes　どっちもラップには欠かせない要素ですからね。ＳＵさんの〈ディストーション効かし歪んだナンバー／だけどまっすぐさ心も身も〉も、楽曲に対するメタ構造でもあり、言い回しの妙を感じますね。この曲の入ってる『MASTERPIECE』、リップの4枚目のアルバムはぜひ勧めたいアルバムです。

――ありがとうございました。ではKZくん。お願いします。

KennyDoes　解説するのは長い韻やろ？　長い韻なんやろ!?

KZ　終わったからって野次んな（笑）。僕はパワポ作ってきたんでその資料を見ながら話していければなと。今回は、消えた日本一のリリシストっていうテーマでお話ししたいと思います。スクリーンをご覧ください！（詳細な資料と解説がスクリーンに映し出され、会場からは拍手が起こる）

R　急に社会人（笑）。

KZ　そもそも、ラップのライミングには、脚韻や同音異義語、語感踏み、子音踏みとか、いろんな要素がある。そして、その韻を圧倒的なボキャブラリーで構築し、さらに行間からはエモーショナルを匂い立たせ……。

PES
76年生まれ。21年に、リップスライムを17年に脱退していたことを発表。12年にはシングル『女神のKISS』でソロデビューした。最新作は『PES EP』（22年）。

LITTLE
76年生まれ。キック・ザ・カンクルーのリーダー。01年に1stアルバム『Mr.COMPACT』をリリース。YouTubeチャンネル『愛韻TV』では細川貴英とともに、「韻」重視のゲストを招いた番組のMCを務めている。

SU
73年生まれ。17年にリップスライムのメンバーとしての活動を休止。グループ加入前にはMELLOW DOWNというダンスチームでEAST ENDのバックダンサーを務めていた。

CamScannerでスキャン

R 匂い立つエモーション！

KZ そして、どんな人にもハマる、共感性の高いトピック選び……これを形にできるのが、リリシストの条件だと思うんですね。そして僕の中のリリシストの定義は、一個目にはライム、二個目には情緒です。**Mummy-D**日く「人はなぜに韻を踏むのか？」、それは「リズムを産み出すためである」。換言すればメロディーよりもリズムの要素が強い表現形態であると。ゆえに韻を踏んでグルーヴを造り出していくことが、ラップではすごい楽しくて重要である。だからライムのない曲は記憶に全く残らないんですよ。逆に大した話じゃなくても、韻を踏んでると、不思議なことに響いてくる。

R たしかに。

KZ そして自分は味わってないはずなのに、さもその体験を味わったかのごとく同じ感情になったり、感情の提供ができる内容。これが情緒を感じるラップだと思うんですね。そのライミングと情緒を完璧に満たした奇跡のようなラッパーが、**次郎（仮名）**なんです。

——彼のことは『Rの異常な愛情』の第一回でも話に出たけど、引退状態な

Mummy-D
70年生まれ。ライムスターだけでなく、04年からは本名の坂間大介としてギタリストの竹内朋康とともにマボロシとしても活動し、3枚のアルバムをリリース。Mr.Drunk名義で数多のアーティストに楽曲提供、リミックスを行っている。近年では俳優としてドラマや映画にも出演。

次郎（仮名）
09年前後に、ネットラップで活躍。長らく沈黙状態であったが、22年10月25日に6曲入りの『再生』が突如配信リリースされた。

"きっずりたーん"
自らを20歳前後から振り返り、10代の友達との日々を思って書いたと思われる曲。

んだよね？

KZ　09年前後にネットラップで活躍して、10年頃を境に消息不明になって、今も分かんないです。現在聴ける曲は、フィーチャリング曲がネットに数曲残ってるだけで、ほとんどの曲が削除されてしまっているんですよ。

R　ホンマに残念。

KZ　彼の特徴としては、ホンマに日本トップのライミングスキル、トピックに対しての抜群のワードセンス、言葉のチョイス。**〝きっずりたーん〟**の〈同い年のあいつは福祉栄養士に就職／俺ときたら未だに言い訳を副詞・形容詞で修飾〉とか、抜群ですよね。

R　言うたら、さっきのスキャットから作るのとは真逆ですね。

KZ　歌詞を詰め込んで、その中に韻がちりばめられてるから、スキャット先行で作るのではできないリズム感があるんですよね。梅田サイファーでは俺とふぁんくとRが特に大好きで、「今、次郎さんがシーンにおったらどうなってたんかな？」みたいな話にはよくなるし、そう思わされるラッパーです。（22年10月に『再生』を配信リリースし、カムバック）

SEEDA
80年生まれ。幼少期をロンドンで過ごし、03年にSCARSに加入。アルバム『GREEN』（05年）、『花と雨』（06年）、『街風』（07年）と立て続けに話題作をリリース。06年からはSD JUNKSTAのDJ ISSOとMIX CDシリーズ『CONCRETE GREEN』をリリースし、ストリートで評判を呼んだ。17年からはYouTubeチャンネルにて『ニートtokyo』を主宰している。

CamScannerでスキャン

——ありがとうございました。では続いてはｐｅｋｏくん。

peko　僕は**SEEDA**さんの**『HEAVEN』**っていうアルバムに収録されている〝自由の詩 feat. A-Thug〟です。ＫＺさんが紹介した次郎（仮名）くんは、頭でライミングして、頭で文章を作ってるタイプのラッパーだと思うし、梅田にめちゃ近い感覚の人だと思うんですね。でも、このＳＥＥＤＡさん、それから**A-THUG**さんはそれとは真逆のベクトルがあると思うんです。

R　本能的に揺さぶられるというか、理屈じゃなくアガるっていう感じですね。

peko　そうそう。おもしろいのが、ＳＥＥＤＡさんは日本語と英語のバイリンガルのラッパーなんですが、このアルバム『HEAVEN』には、「サバイバル」っていう単語が2曲で登場してるんですよね。で、〝Nyce Dream〟という曲では「サバイバル」って日本語発音してるんだけど、〝Monkey see Monkey do〟という全部英語でラップをしてる曲だと、「Survival」って英語発音なんですね。だから、ラップを気持ち良く聴かせるために、英語と日本語をめっちゃ徹底的に使い分けてて。そこらへんの言語の感覚っていうのが、

『HEAVEN』

08年リリースのＳＥＥＤＡのアルバム。ＢＡＣＨＬＯＧＩＣとＩ－ＤｅＡがプロデュース。

Ａ－ＴＨＵＧ
ＳＣＡＲＳのリーダーとして06年に『THE ALBUM』でシーンに登場。日本でのハスリングラップの礎を築く。11年にはソロアルバム『BRIGHT SON!!』をリリース。21年からは活動拠点をニューヨークに移している。

グロック
オーストリアの銃器メーカーであるグロック社が開発した拳銃の名前。

CamScannerでスキャン

やっぱり並の発想じゃ出ない。ライミングにしても、AKLOさんもそうですけど、発音で雰囲気で持ってくみたいなのをよくやるんですよね。

R A-THUGさんも俺らのように理屈で考えるラップの範疇にいない人ですからね。

peko 余裕でいないですね。ただその質は梅田でいえばILL SWAG GAGAの感じとも全然違うんですよ。めっちゃストリートの人なんで、〈グロックを握る〉みたいな、それ何なん？みたいな単語がポンポン出てくる。SEEDAさんもアメリカで流行ってるスラングを使ったりして、そういうハードな部分と、やっぱドラッグディールやハッスルから抜け出したいっていう感情が一緒にあるのがこの『HEAVEN』。一番脂が乗ってる時期のSEEDAさんがモリモリ聴けるアルバムですね。SEEDAさんだと『花と雨』がやっぱり有名なんですが、個人的にはこっちのほうが好きで。特にこの"白山の詩"で一気にネクストレベルに行った感があった。

関西勢からの影響

『花と雨』

06年リリースのSEEDAの3rdアルバム。BACHLOGICが全曲プロデュース。姉の死について綴った表題曲をはじめ、「ADDICT」や「不定職者」などの名曲を収録。20年には同名の映画『花と雨』が公開され音楽プロデュースを務めた。

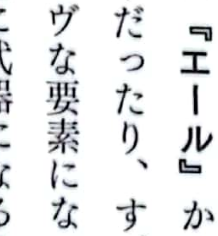
神門

86年生まれ。07年に1stアルバム『三日月』を自主制作盤からリリース。コンスタントに作品のリリースを続けており、22年11月には14thアルバム『筆』をリリースした。

——ではKBDくん。

KBD　僕は去年一番聴いた、**神門**さんの9枚目のアルバム**『エール』**から、表題曲の〝エール〟です。ラップにおいて、例えばハスラーだったり、すごく貧乏だったり、外国人だったりという、時としてネガティヴな要素になってしまうバック・グラウンドも、ヒップホップにおいては逆に武器になることが多いんですね。それから〈東京生まれHIPHOP育ち／悪そうな奴は大体友達〉ってフレーズがありますけど、これも共感できる人は少数だと思うんです。でも、そういう強いバック・グラウンドがない人たちはラップができないのか、というと、当然そうではない。そして、そういう強烈な背景がない人たちがアティチュードを獲得していくのには、作品を積み重ねていくことがすごい大事だなと、神門さんの動きから、そして〝エール〟から改めて思わされたんですよね。すごく赤裸々に自分の欲求とか鬱屈した部分からこの曲はスタートするんですけど、それはすごく表現者として真っ当だと思うし、曲自体がそこに真摯に着地するような内容になっていて。もし、駆け出しのバトルMCみたいな人がこういう曲を書いたら、もう速攻で**うんこ投げ**

『エール』



18年リリースの神門の9thアルバム。

うんこ投げたろかな
ゴリラはストレス溜めるとうんこ投げがち（高木）。

CamScannerでスキャン

たろかな　って思うんですけど。

R　ホンマにゴリラやん（笑）。（注：KBDのソロアルバム**『PLANET OF KBD』**のジャケのように、KBDはゴリラに似ているといじられている）

KBD　このアルバム『エール』を聴いたのが、僕ら梅田サイファーのアルバム**『NEVER GET OLD』**がちょうど出来上がったタイミングで、アルバムが世間の目にはまだ触れてない段階だったんですよね。それもあって『エール』に流れる神門さんの心境と、僕の感情がめちゃくちゃ重なる部分があって。だから、モノを作る人、何かをクリエイトする人はこれを聴くと泣けちゃうと思うんですよね。神門さんはすごく赤裸々に自分の内面をさらけ出す方なんですけど、だからこそこのアルバムが刺さるし、年齢を経れば経るほど、成功しないっていうのは単に力不足だけではないんだなと感じて。でもそこでひねくれずに締めとして良いものを作ろうというところに着地するというところで、ストーリーとしてすごく勇気をもらえましたね。

——ありがとうございました。ではふぁんくくんお願いします。

ふぁんく　僕が紹介するのは神門さんと同郷の、神戸の**小林勝行**っていう

『PLANET OF KBD』
20年リリースのKBDの1stアルバム。"イルゴリラシティー"では〈育て上げる未来の風雲児 レイシストに投げるミラノ風ウンチ〉という衝撃的なパンチラインが。

『NEVER GET OLD』

19年リリースの梅田サイファーのアルバム。MV再生数一千万回超えの"マジでハイ"を収録。

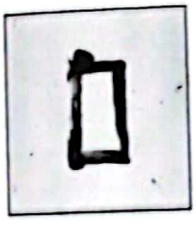
ラッパーです。梅田でいうと、KZさんやRくんあたりが結構イベントで被ったりとかしてるんですが、まあそこで聞く話が、非常に良く言うとストロングな部分があるなと（笑）。加えて、精神的にもちょっと不安定な人だったりもして。

——アルバム『かっつん』はメンタルの病院に入ってたことをテーマにしている曲が多かったり。

ふぁんく　そういう内容はもちろんなんですが、僕個人としてはアーティストやラッパーに一番必要なものって、ライムとかリズムとかメッセージよりも、一番は「声」やと思うんですね。そして小林さんはリリックとかフロウとかで情緒を伝えるというよりは、声色で情緒を伝える人なんですよね。そして、〝煩悩即菩提〟は聴いてもらったらわかるんですけど、とにかくぶっ飛んでて。この曲の何が好きって言うと、とにかく声がドスが効きまくってて、ホンマに任侠映画を観たときみたいな、男への憧れみたいなのをすごい感じるんですよね。

R　KZさんが前に言ってたけど、北野武映画というか。

小林勝行
81年生まれ。11年にリリースされた1stアルバム『神戸薔薇尻』リリース後、持病の悪化により隔離病棟での生活を余儀なくされる。退院後の彼がラッパーとして活動を再開するまでを追ったドキュメンタリー映画『寛解の連続』が19年に公開。21年には3rd『KATSUYUKISAN』をリリース。

『かっつん』

17年にリリースされた小林勝行の2ndアルバム。

ふぁんく　2ヴァース目の最後の〈今いる俺の周りが宇宙一じゃ〉ってパートは、文脈としてはマジでわけわからんこと言ってるんですけど、あのドスの効いた声で言われたらとにかく衝撃がすごいし、声で情緒や感情を表現するんですよね。

KZ　ブルースやんな。

ふぁんく　やっぱり声って、ある程度鍛えることはできても、元からあるものを変えれないんですよね。だから、アーティストの「その人性」を担保するのは、究極いえば声やと思うんですよ。その意味では技術を超えた格好良さっていうものを、ここ数年で一番感じさせてくれるラッパーやなって。

R　小林さんの〝108bars〟って曲を聴いて、CHICO CARLITOはラッパーになろうと思ったと。やっぱ作品一個残すごとに人を動かすというか、感動させる人ですね。

ふぁんく　僕はラッパーのスタンスとか活動としてこういう人になりたいと思うんです。ラッパーは動き続けないと「あの人は消えた」みたいに、死んでしまう、殺されてしまう生き物であると思うんですよ。だけど、小林さん

〝108bars〟

1stアルバム『神戸薔薇尻』の1曲目。自らの半生を怒りや後悔などの感情が吐露された8分58秒に及ぶ大作。ビル・ウィザースの〝Lean on Me〟がサンプリングされている。

CHICO CARLITO

93年沖縄生まれラッパー。本書の特別対談で登場。

WOLF PACK

99年に結成。大阪のアメリカ村のクラブイベントから活動を広げていく。04年に1stアルバム『Gergon File』をリリース。06年の2ndアルバム『ブアイロマニア』でメジャーデビュー。

みたいに聴いてくれる人がしっかりおって、寡作でも待ってくれる人がいる、そういうラッパーであり、人間になりたいなって。

――ありがとうございました。ではKOPERUくん。

KOPERU まず梅田サイファーが呼ばれてるのに、なぜ大阪のMCを選ばないのか！と。

peko 申し訳ない！（笑）

KOPERU なので僕が紹介させてもらうのは、大阪の先輩の2MC、1DJスタイルの**WOLF PACK**です。

R MCのVolfgung（井上）さんとU.S.Key（清水）さん、DJのNAO the LAIZAさんの3人組ですね。

――**DOBERMAN INC**（現：DOBERMAN INFINITY）、**NORISIAM-X**、**4WD**などが所属してた、ライターの**二木崇**さんが立ち上げられた「D-ST.ENT」ってレーベルの所属で。その流れもあって、トラックを**BACHLOGIC**が手掛けていたり。

KOPERU 彼らの中でも〝**いたずらパック～ピンポン&ダッシュ**〟って

DOBERMAN INC
00年に結成。01年にBACHLOGICのもとで1stアルバム『DOBERMANN』をリリース。08年にはLDH所属となり、東京に拠点を移す。14年にDOBERMAN INFINITYに改名。

NORISIAM-X
96年から京都を拠点に活動開始。様々なラッパーの楽曲にシンガーとして客演し、ラッパーとしても活動を広げる。04年に1stアルバム『Brave New World』リリース。

4WD
79年生まれ。99年にM.M.Tを結成。DOBERMAN INCやWORD SWINGAZ、MAGUMA MC'sらの作品への参加を果たす。10年にSEEDAやNORIKIYOらを客演に迎えた1stフルアルバム『CLOCK WORK』をリリース。

曲を聴いてもらいたいんですけど、とにかく選ぶトピックがシュールで、笑いを取りにいかなくてもおもしろくなる不思議さがあるんですよ。しかもめちゃくちゃラップが上手い。むちゃくちゃふざけてるんですけど、サビの作り方からヴァースまで、ラップの技術的には最高レベル。ライブで衝撃を受けすぎて、「ラップうめぇ!」しか言えへんみたいな。

R **筋肉少女帯**の〝踊るダメ人間〟をカヴァーしてたり、ほぼ裸に見えるタイツでライブしたりとか。

KOPERU ライブしながら餃子焼いたり、焼きそば作ったり(笑)。

R その一方で、NAO the LAIZAさんが結婚した時に書いた曲が〝**よろしく宣言**〟ってウェディングソングがすごい感動的なんですよね。それまでふざけてたフリが効いてた(笑)。

KBD 俺、披露宴の音楽のリストに入れてたで(笑)。

――〝**GOLD EXPERIENCE**〟とか、ラップもビートもイケてる曲が多いし、なんでこんなアンダーレイテッドなのかが不思議でしょうがない。東の**サ上と口吉**、西のウルフパックになると思ってたし、それができたら世の中変

二木崇
音楽ライター。『FRONT』や『BLAST』、海外アーティストの国内盤ライナーノーツなどを中心に執筆を行う。多くのラッパー、DJ、ヒップホップ関係者からの信頼が厚い。11年死去。

BACHLOGIC
音楽プロデューサー。レーベル「ONE YEAR WAR MUSIC」主宰。SEEDAやNORIKIYO、ライムスター、SALU、AKLO、ZORNをはじめとする数多のアーティストに楽曲を提供。歌唱やラップをする際には「鋼田テフロン」「H.Teflon」名義が用いられることが多い。

わってたなって。

KennyDoes 収録された『ファイロマニア』ってメジャーリリースなんですか？

――コロムビアだから今で言えばKOHHと同じレーベル。

KOPERU 宇多田ヒカルとフィーチャリングしてる世界線もあったかもしれない（笑）。あと、ウルフパックは2MCやからこそできる曲の作り方っていうのがあって。コッペパンも、例えばアンジャッシュさんのすれ違いコントとかのオマージュもやってたんですが、ウルフパックは小学生のコントをずっと曲にしてるみたいな(笑)。にも関わらずラップのビートの入り方は、ちゃんとラップの上手さを理解してる人じゃないとできない内容なんで、興味持ったらぜひ聴いてください。

――ということでお時間がかなり超過してしまいました。

R 最後、エンディング的に1曲だけ流して終わりますか？ 今日集まってくれた皆さん含めてですけど、改めてこんなに素晴らしいグループやったんかっく最近再確認した、**ゲツメイシ**の"トモダチ"を。

『いたずらパックン～ピンポンダッシュ』

WOLF PACKの2ndアルバム『ファイロマニア』(08年)収録の楽曲。

筋肉少女帯

82年に結成された大槻ケンヂがヴォーカルのロックバンド。『踊るダメ人間』は91年に発売された4thシングル。

『よろしく宣言』

WOLF PACKの3rdアルバム『君たちがいて僕がいる』(10年)収録の楽曲。

KZ 歌ってくれるん？

R そんな大学生みたいなノリ？（笑）

“GOLD EXPERIENCE”

WOLF PACKのミニアルバム『GOLD EXPERIENCE』（08年）収録の楽曲。

サ上とロ吉

サイプレス上野とロベルト吉野。00年に「横浜ドリームランド」出身の先輩と後輩で結成。07年に1stアルバム『ドリーム』をリリース。“HIP HOPミーツ ≒ グッドなにか”を座右の銘に掲げ、ジャンルレスな活動を続けている。最新アルバムは7thアルバム『Shuttle Loop』。

ケツメイシ

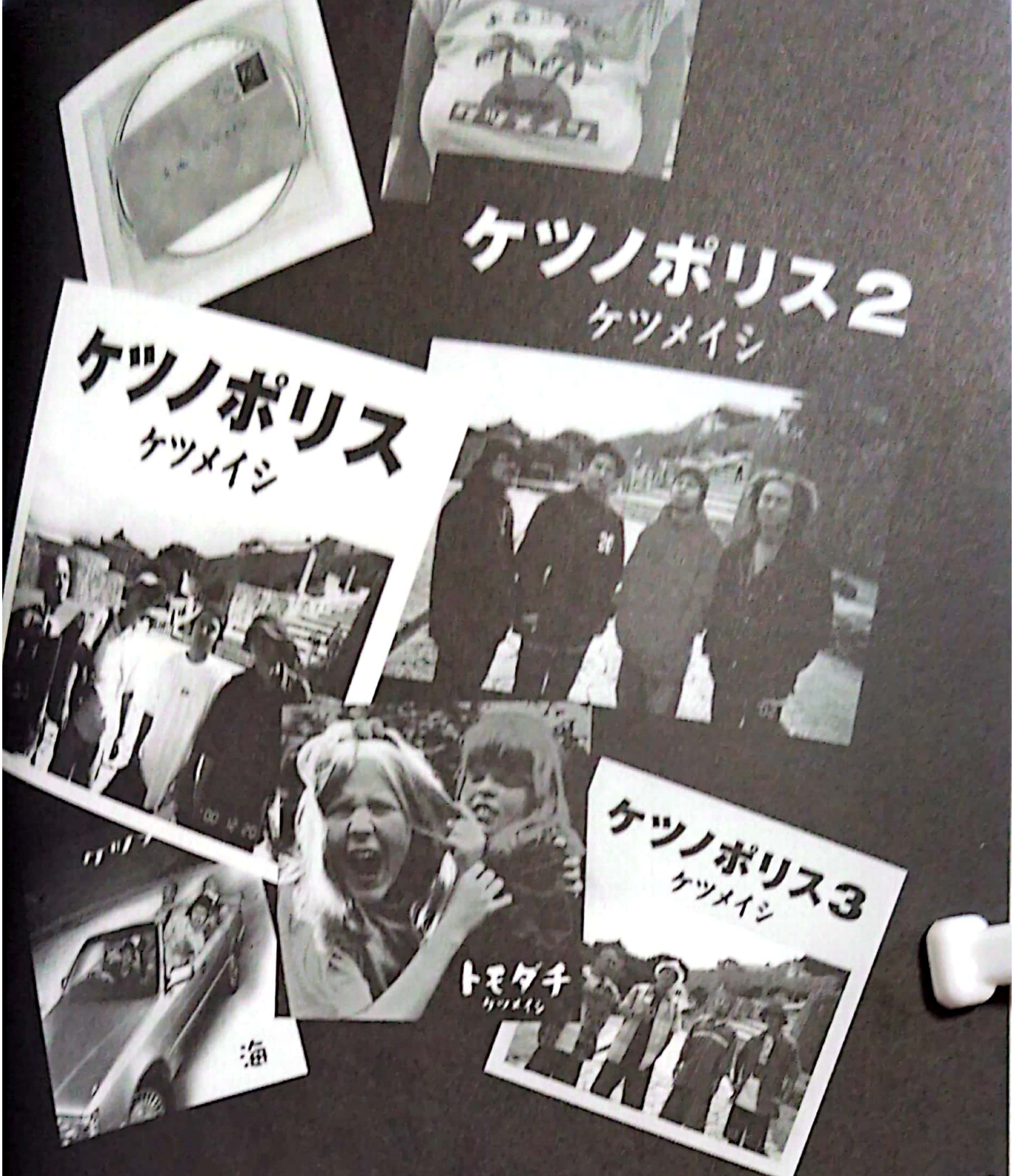
93年に結成された4人組グループ。（第3章を参照）

CamScannerでスキャン

第3章

戻りたくなるケツメイシの「実家感」

CamScannerでスキャン



PROFILE

ケツメイシ

93年にグループの原型が生まれ、96年頃から現在のメンバーであるRYO、RYOJI、大蔵、DJ KOHNOの4人で活動開始。99年に1stインディーズシングル『こっちおいで』を、翌年に1stアルバム『ケツノポリス』をリリース。01年の『ファミリア』でメジャーデビューを果たし、05年の『さくら』で初のオリコンシングルチャート1位を獲得。ヒップホップやレゲエを下敷きに、あらゆるジャンルを内包したスタイルで人気を博す。21年の『NHK紅白歌合戦』ではゲストという形で初登場。22年には、メジャーデビュー20周年記念 全国アリーナツアー（10都市20公演）を完走した。最新アルバムは、21年リリースの『ケツノポリス12』。

CamScannerでスキャン

開けてしまったパンドラの箱

——今回の「Rの異常な愛情」はコロナ禍のため配信サービス「SHOWROOM」からの放送です。

R ビルの外に出たらすぐに渋谷のラブホ街で。俺はよくリリック書きにラブホテルに行ってるんですよ。

——いきなりなんの話？（笑）

R ライムスターの宇多丸さんが**〝肉体関係 part2 逆featuring クレイジーケンバンド〟**を書く時に、「ホテルに缶詰になって書いた」って言ってて、俺も「それや！」と。

——旅館やホテルに缶詰になって書くなんて昭和の文豪みたいな話だけど、〝肉体関係〟の宇多丸さんの歌詞って「交尾！交尾！交尾！」でしょ（笑）。

R たしかに。でもラブホってアガるじゃないですか。

——非日常感あるよね。広いし、露天風呂とかサウナ付いてたりするし。

R そうなんすよ。なんやったら俺、地方営業とか全部ラブホ泊まりたいなっ

〝肉体関係 part2 逆featuring クレイジーケンバンド〟

02年にリリースされたライムスターのシングル楽曲。クレイジーケンバンドが01年にリリースした『肉体関係』にライムスターの3人が新たに詞を加えてカヴァー。アルバムとしての初出は『ウワサの伴奏-And The Band Played On-』（02年）。

CamScannerでスキャン

て思うくらい（笑）。**『たりないふたり』**出した前後も、終電なくなったりとかしたらラブホ行って、そこで曲作ったりしてましたね。あと、大きい声出しても怒られない。

――ああ、そうか！

R　俺は歌いながら作るんで、大声で歌って隣人から壁ドンされないためにもラブホは最適。ラブホなんて大っきい声出す場所だし、隣のあえぎ声なんてこっちはライムでかき消しゃいいんですから（笑）。

――マシンガンライムで（笑）。カラオケも付いてて、マイク使えるしね。

R　完璧や。

――完璧の概念とは（笑）。余談はこの辺にして、今回はケツメイシ特集です。単行本1巻の初回でも「〝ビールボーイ〟のリリックがすごい」という話をRくんはしていて。

R　そうでしたね。ケツメイシに関しては、俺の仲間の梅田サイファーにもふぁんくさんやKZさんのようにケツメイシに一家言持ってる奴らがたくさんいるんで。俺が一人で語るのはちょっと恐ろしいんですけど。その中でも、

『たりないふたり』

16年にリリースされたCreepy Nutsのミニアルバム『合法的トビ方ノススメ』収録。アルバムタイトルは山里亮太と若林正恭によるユニット「たりないふたり」へのオマージュ。

〝夏の思い出〟

03年にリリースされたケツメイシのメジャー7作目のシングル楽曲。言わずと知れた00年代の夏の代表曲。

今回は00年リリースのインディアルバム『ケツノポリス』、02年のメジャーアルバム『ケツノポリス2』についてお話できればと。

――では、まずR-指定とケツメイシの出会いから聞いていきましょう。

R　最初は普通にCMですね。山田優さんのボーダフォンのCMで**〝夏の思い出〟**がかかってたんですよ。それで「良い曲やな」って思ったのが最初。あと**〝トモダチ〟**もラジオか有線で聴いたことはあって。その2曲は認識してましたね。ただそれがケツメイシの曲だという意識はなかったと思う。

――アーティスト入りではなくて、「メディアで流れていた良い曲」というのが入り口と。

R　中学ぐらいで音楽に、ヒップホップにハマり始めると同時に、**〝はじまりの合図〟**をMVで観て「これがケツメイシか！　いいなー」みたいな。でも興味を持ったから飛びつきたいんですけど、「どうやらこれは金脈っぽいぞ……」と思ってしまうと、ちょっと構えるんですよ。絶対好きやし、絶対にディグって行ったら楽しいのわかってるけど、恐らくこの山は高そうやな……と。

〝トモダチ〟

メジャー4thシングルとして02年リリース。ケツメイシ初のオリコンシングルチャートトップ10入りを果たした。

〝はじまりの合図〟

03年にリリースされたケツメイシのメジャー6thシングル楽曲。

――それは入り込むと怖いって感じ?

R　そう。もう戻れないかもしれないっていう（笑）。しかもその時はライムスターやキングギドラ、般若さん、**SOUL'd OUT**とかで手一杯やし、ケツメイシ……キャバオーバーや！　絶対いいのわかってんのに行かれへんーって（笑）。そんな時に『ケツノポリス2』に入ってる〝ケツメの作りかた〟っていう、グループの結成秘話を歌っている曲を、学校でずっと口ずさんでるやつがいたんですよね。内容的には**RYO**さん、**大蔵**さん、RYO-Jさんが、結成までの過程をそれぞれヴァースで綴っていくっていう、ストーリーテリングものなんですが、その曲が下ネタ多いんですよね。でもその塩梅も中学生にはちょうどよかった。要は直接的に言うからおもしろいっていう（笑）。それを友達のカネコが歌ってて、「それなんなん？　ラップやん？」って聞いたら、「ケツメイシの曲やで」って。それで「これはもう逃げられない……」（笑）。

――もう行くしかないと（笑）。

R　それで『ケツノポリス』、『ケツノポリス2』、**『ケツノポリス3』**（以下、

SOUL'd OUT
99年に結成されたDiggy-MO'、Bro.Hi、Shinnosukeの3人組ヒップホップグループ。03年に『ウェカピポ』でメジャーデビュー。14年に解散。中毒性の強い斬新なフロウで今なおファンが多い。

RYO
72年生まれ。個性的な高音ボイスが特徴的。アルファのTSUBO-Iと、NAMとで組んだタサツで『ぼくらの五日間戦争』（03年）をリリース。山下達郎『Kissからはじまるミステリー』（05年）にフィーチャリングで参加している。

大蔵
76年生まれ。ケツメイシのリーダー。骨太な声が特徴的。Dragon Ashや山嵐の楽曲に客演参加。DJとしても全国各地のイベントに出演している。

CamScannerでスキャン

『1』、『2』、『3』）と3つまとめてレンタルしてきて、時系列で聴いていったんですよね。

——たしかに〝ケツメの作り方〟はケツメイシがどういうキャラクターなのかもわかりやすいから、入り口としても最適だったのかもね。

R　そうですね。まず、みんながケツメイシといえば思い浮かべる鼻にかかった声でハイトーンラップのRYOさん。このRYOさんが大学でケツメイシの母体となるグループを作って。

——大学は八王子にある東京薬科大学。ケツメイシも薬草である決明子からきてるんだよね。

R　そこに後輩だった、野太い声の大蔵さんが「入れてくれ！」と。そこからRYOさんと大蔵さんの二人組になって、聖蹟桜ヶ丘の**CLUB MOUTH**でライブをするようになるんですよね。その対バンにメロディアスなフックを歌うことの多いRYOJIさんと**DJ KOHNO**さんが組んでたグループが登場するんですけど、そのグループは、曲にもあるように〈Hey represent 八王子〉みたいに、ハーコーなスタイルで。ただ、それがその場

RYOJI
74年生まれ。ラップだけでなく、サビでメロディアスな歌声を聴かせている。楽曲プロデューサーとしてCHEMISTRYやSMAP、V6、NEWSなどに楽曲を提供。

『ケツノポリス3』

03年にリリースされたケツメイシの3rdアルバム。〝はじまりの合図〟〝夏の思い出〟〝花鳥風月〟などが収録されている。

ではちょっとスべって、あれ？って思った時に、次のケツメイシは海パン一丁で登場して、〝ALL I NEED〟って曲を歌うんだけど、〈ALL I NEED〉→〈オーライニー〉→〈オナニー〉っていう（笑）。

――空耳で下ネタだったという（笑）。

R 一回ラジオで流れたんですけど、〈マスターベーション／あ～いい気持ち／マスターベーション／や～められません〉っていう、バカレゲエでしたね。でも、それで客がめっちゃ盛り上がってる様を見て、ＲＹＯＪＩさんとＫＯＨＮＯさんは「一生ついていきます！」となって、ケツメイシができたという（笑）。

――軍門の下り方がどうかと思けど（笑）。

R だいぶコミカルに補正してると思いますけどね（笑）。その流れを〝ケツメの作り方〟では歌ってて、最後のヴァースではデビュー曲である〈こっちおいで…〉を歌い出すという、ようできた曲なんですよ。

――それが入り口だったんだね。

R そこからアルバムを時系列で聴いていこうと、『1』を再生したら、イ

CLUB MOUTH
現在はクローズ。ケツメイシは「クロロホルムナイト」という自主イベントを開催していた。後に「熱帯夜」と名前を変え、『ケツノポリス』収録の〝CLUBへ～熱帯夜mix～〟には、イベントに出演していた鎮座DOPENESSが客演で参加している。

DJ KOHNO
77年生まれ。ライブの選曲リーダー。09年にミックスCD『I LOVE R&B ～The New Decade introducing ONE DAY mixed by DJ KOHNO』をリリース。楽曲提供に関ジャニ8〝輝ける舞台へ〟（11年）など。

CamScannerでスキャン

ントロに続く2曲目が**“こっちおいで”**で、「あっ〜“ネッスの作りか”」の最後で流れてる曲やって」って。そして“こっちおいで”。で、中学生の俺にはなきな要素が多すぎたんですよね。当時は、さんざん世代のヒップホップを聴くし、SOUL'd OUTや**nobodyknows+**とかポップサイドも聴くし、“湘南乃風”や“ケツメ”。以前の**湘南乃風**とかもずっと聴いていう。

——**“Real Riders”**からの影響は。

R　そう〜　俺の湘南乃風は“Real Riders”ー（笑）。だからネッスーからごちゃ混ぜ感、ヒップホップもあれば、**ラヴァーズロック**のリディムもあって、みたいなサウンドはドンズバだったんですよね。しかも、ネッスーはラガ要素の強い大蔵さん、ラップが単純に上手すぎるRYO-Zさん、HOOPーズみたいな人懐っこい声とメロディーセンスを持つRYO-Jiさんって、同じグループの中に際立った才能を持った三人がいたんですよね。

——レゲエとヒップホップ、シンガーがコラボするのは珍しくなかったけど、「同じグループ」というのは大きいよね。

R　やっぱ「メロディーは強い」と思うんですよ。**ウェッサイ**のグルーヴ

こっちおいで

[illegible]

nobodyknows+

[illegible]

「フックがメロディ」というのが人気の要因として大きかったと思うし。
――**Soul'ja**の**"ここにいるよ feat.青山テルマ"**以降のシンガー×日本語ラップの隆盛もそうだよね。

R それが着うたのブームとも連動したのかなって。高木さんの世代からすると、当時のケツメの印象ってどうやったんすか？

――『ケツノポリス』の時、俺は21～22歳だったんだけど、同じ00年は**BUDDHA BRAND**『金字塔』、**TWIGY**『SEVEN DIMENSIONS』、MURO『PAN RHYTHM:Flight No.11154』、スチャダラパー『ドコンパクトディスク』、ニトロ『NITRO MICROPHONE UNDERGROUND』……これでも一部だけど、とにかく日本語ラップが活況だったから、ケツメイシは正直、まったく追えてなかったし、ラップとは意識してなかった。しっかり聴いたのは後追い。例えば**木村昴**くんとか、Rくんの世代にインタビューすると、ケツメイシの影響を語ることが多くて、それで聴いてみようと。もちろん**"さくら"**とか**"君にBUMP"**とかは知ってたけど、それもテレビで観てっていう感じだったね。

湘南乃風
01年に結成された4人組クルー。03年にメジャーデビューアルバム『湘南乃風～REAL RIDERS～』をリリース。"純恋歌"（06年）や"睡蓮花"（07年）がヒット。

"Real Riders"

湘南乃風のデビューアルバム『湘南乃風～REAL RIDERS～』（03年）収録の楽曲。

ラヴァーズロック
70年代中盤のイギリスで誕生したレゲエのサブジャンル。洒脱なアレンジと甘いメロディを伴った、恋愛やロマンスをテーマにする楽曲が多い。

R　コメントでも「たしかにあんまりラップだと思わないで聴いてた」っていうのが来てますね。

――そう。だからディスる対象でもなかったというか。

嫌味なしのキャッチーさ

R　そういう空気感を知れるのはおもしろいですね。では作品解説に入りましょうか。俺がケツメイシの武器やと思うのは「身近なトピックとタイトル」なんですよね。例えばさっき名前の出たTWIGYさんの〝夜行列車 T2K MIX〟とか何のことやらわからないじゃないですか。

――ニトロの〝さきっちょだけですけれども〟とか。

R　「え、エロい話?」みたいな(笑)。要するに、タイトルが田舎の中学生には理解するのが難しかったんですよね。

――タイトルがそもそもハイコンテクストだもんね。

R　だけど、ケツメイシは「**〝海〟**……うん、海の曲!」「**〝ファミリア〟**……家族の曲!」ってなるじゃないですか。

ラガ
ラガマフィン。レゲエの一つのジャンルで、中でもダンスホール・レゲエの一種。

ウェッサイ
「ウエストサイド」=アメリカの西海岸で発展したヒップホップカルチャー。G-Funkとも。楽曲内に高音のシンセメロディや、P-Funkから影響された歪んだベースラインがあるのが特徴。

Soulja
83生まれ。日本人の父親とベルギー人の母親を持つ。07年にシングル『DOGG POUND』でメジャーデビュー。

——明快だね。

R　だからといって薄いわけじゃなくて、そのトピックに関して曲の中でがっつり深く言及するんだけど、入り口自体はすごく明快。しかも『1』の曲は、例えば"海"は後の**"よる☆かぜ"**や"夏の思い出"に繋がってたり、「この作品がこう進化したんやな」みたいに、後々にも繋がる曲が多いんですよね。

——最初に種は蒔かれていたと。

R　そうなんですよ。そして、もうこの時期から作品がリスナーに懐を開いてて「わかる奴だけにわかりゃいい」っていう感じはない。だってタイトルからして"こっちおいで"ですからね。

——当時のヒップホップは「いかに他のジャンルと違うか」「いかに自分たちは特別か」っていうハリネズミのようなブランディングが多かったけど、それとは正反対のアプローチだね。

R　それもラッパーの良さなんですけどね。俺もやっぱり19、20歳の時なんかは「こっち来んじゃねえ」みたいなアングラ病に罹って、「誰にラップしてんの？」「俺、何がしたいん？」みたいな状況にも陥りましたね。でも、

"ここにいるよ feat.青山テルマ"

07年にリリースされたSoulJaの3rdシングル。着うたブームの火付け役となった。翌年、青山テルマによるアンサーソング"そばにいるね feat.SoulJa"がリリース。

BUDDHA BRAND

80年代末にニューヨークで出会ったDEV LARGE、CQ、NIPPS、DJ MASTERKEYによって結成。96年にシングル『人間発電所』でメジャーデビュー。00年にフルアルバム『病める無限のブッダの世界-Best Of Best（金字塔）-』をリリース。15年にDEV LARGEが死去。

胸襟を開きすぎると、ズカズカ踏み込まれることもあるわけで。

——日本語ラップシーンにセルフプロテクトが必要だったのは、その部分もあるよね。「ラップなんてお経でしょ」「チェケラッチョでしょ」みたいな、土足の連中や、そのイメージを利用しようとする連中と戦う必要があったわけだし。

R その気持ちはありますよ。やっぱり「わかったように俺らのことを見んといてくれ」みたいな。それこそ俺らがメディアに出た時に、「陰キャのカリスマ」みたいに言われるのすごい嫌やし。

——レッテル貼って乱暴に処理しようとする人はいまだに多いよね。

R 「あの……人間は変わっていきますから!」っていう。

——メディアの人間としてはそれを自省しないといけないですが。

R 自分らも自己を確立するために、相手を偏見で見たり、貼られたレッテルを逆利用した部分はありますけどね。ただラッパーの、ヒップホップの良いところは、レッテルを自分で剥がしにいけるんですよ。作品を出すごとに前作とは違うメッセージを歌うことで、意識の変化だったり、アップデート

TWIGY
71年生まれ。87年より名古屋にて活動開始。92年に東京に移り、MUROらとMICROPHONE PAGERを結成。98年に1stアルバム『AL-KHADIR』をリリース。最新アルバムはsei-hondaが全曲のビートを手がけた『PAPATTACK』(22年)。

木村昴
90年生まれ。05年にアニメ『ドラえもん』のジャイアン役で声優デビュー。山田一郎役で声優を務める『ヒプノシスマイク』では、獄良臨太郎名義で作詞を担当している。

CamScannerでスキャン

を表現できる。それはライムスターだったり、海外だったらエミネムもそうですよね。前作とはまったく違ったことをするっていう。だから今回の『**かつて天才だった俺たちへ**』も「一側面だけで見んなよ」みたいなことは言っていってるつもりではあるんですけどね……話をケツメイシに戻しましょうか（笑）。

——ハハハ。でも大事な意見ですよ。

R 話戻すと、〝こっちおいで〟に現れている「わかりやすさ」ですが、曲の入り口から〈Rapして Danceしてこっちきて MC〉〈Ryoちゃん Ryoji DJ Kohnoと〉ってメンバーの紹介して、招き入れるんですよね。

——自己紹介する、と。

R ただRYOさんの〈女の子と話す そしてRapやる 胸を揉むため 韻をふむ〉っていうリリックが（笑）。

——「モテるため」にラップするっていう話はよく聞くけど「胸を揉むため」（笑）。

R この卑近さというか、身近さが重要だと思うんですよね。だからキング

〝さくら〟

05年にリリースされたケツメイシのメジャー11thシングル楽曲。言わずと知れた00年代の春の代表曲。

〝君にBUMP〟

04年にリリースされたケツメイシのメジャー10thシングル楽曲。

ギドラみたいなハードさも、ケツメイシみたいなウェルカムなものも、両方を同時期に摂取できたのは、自分にとってめっちゃ幸運だったと思いますね。そして、このキャッチーさを、好きでやってると思うんですよね。

――外部からのディレクションや管理がなされない、インディーズの段階でこのスタイルだもんね。

R 楽しいからこれをやってるって感じがあるから、セルアウトの嫌味みたいな感じがまったくなかったんですよね。俺らもキャッチーな曲は無理に作ってるんじゃなくて、キャッチーが好きやから作ってるし、好きなら作るでしょう、っていう。それに僕らは計算してキャッチーな曲を作れるほど器用だったり、音楽的な素養はないですからね（笑）。そして、元々キャッチーな曲が好きだからこそ作れるものじゃないと、バレると思う。そういう部分は、ケツメイシに学んだところですね。続く〝CLUBへ〟での、〝こっちおいで〟で引き込んだリスナーをもっと自分たちのフィールドに引き込んでいく展開に、ケツメの構成の上手さを感じますね。この曲は〝よる☆かぜ〟や〝君にBUMP〟に引き継がれていくような、都会の夜って感じの感触が

〝海〟
インディーズ時代ラストの3rdシングルとして00年リリース。

〝ファミリア〟
メジャー1stシングルとして01年リリース。

CamScannerでスキャン

あると思うんですね。

――王道感があるよね。

R だけどRYOさんの〈仕事も早々に 即夜で放尿するようにこの世の様なこと流せ〉っていう（笑）。

――なぜ「流す」ことの例えに「放尿」を（笑）。

R 急すぎる（笑）。ラップ的にはこの曲はおそらくパンチインで作ってるんですよね。一息でやってるんじゃなくて、1小節ごとに分けて録ってる。〈この真夜中の太陽がある限り／また朝から働き 汗たぎり〉は、一息で言うんじゃなくて、〈この真夜中の太陽がある限り〉と〈また朝から働き 汗たぎり〉を別々に録ってくっつけてる。それによってブレスの位置を気にしなくていいから、矢継ぎ早にフレーズが入ってくる気持ち良さが生まれるんですよね。

――レコーディング技術の高さや、完成形が見えてるからこその構成だよね。

R ライムも上手い。〈この月夜に浮世忘れたいならそう／不器用に生きよう明日へさいならう〉っていうロングライムはザ・ナサメイシ。「月夜」「浮世」「不器用」「生きよう」と短い韻で踏んで、「忘れたいなら」と「明日へさいなら」

『[illegible]』
メジャー1stシングルとして17年リリース。

『かつて天才だった俺たちへ』
20年にリリースされたCreepy Nutsの2ndミニアルバム。

という長い韻を挟んで踏むという。こういうテクニックを、ポップな曲の中で見せつけるっていうのは、やっぱりラップ好きやからこそなんじゃないかと。聴いてても、口に出して言いたくなる気持ち良さがあるんですよね。実際、歌うと舌が気持ち良い。3ヴァース目の大蔵さんがまたひどいこと言ってますね、〈週末の夜の街はネオン輝く／窓を開け車 低音響かすSEXY娘ちゃん／チェックしたいな あわよくばSEXしたいな〉っていう（笑）。

——ライムスターが**〝あわよくばパワー〟**と誤魔化したフレーズを（笑）。

R 核心に一気にかぶりついてますよ（笑）。この欲望への忠実さみたいなとこも好きなんですよ。ホンマに地元のツレみたいなんですよ。モテたい、酒飲みたい、遊びたいっていう欲求をそのままラップしてるというか。そういうとこも入りやすかったんかなぁ。そして、この曲は珍しく英語を多用してるんですよ。ケツメは『2』あたりからほぼ日本語とカタカナ英語のみで歌い出したんです。キングギドラが『空からの力』で全部日本語発音でラップしたというのが、「英語使うだけでラップっぽいと思われるのが嫌で日本語で韻を踏める事を証明したかった」というのに対し、ケツメはさらにJ-

---

〝あわよくばパワー〟
93年にリリースされたライムスターのインディーズ1stアルバム『俺に言わせりゃ』に収録の楽曲。

CamScannerでスキャン

POPのフィールドで勝負するために、英語発音を排したのかな？ なんて想像してみたり……。ただ一方で**パトワ**は使うっていう。

――その差異がなぜ生まれるのかは興味あるね。

R その意味では4曲目の〝もっと〟は、がっつりレゲエ。節回しの付け方から発声、リディムに至るまで、よりレゲエのグルーヴを出してると思います。そしてここで登場するのが「大蔵ブレス」。

――それは？

R 大蔵さんはフロウの中に「大蔵さんだけの息の漏れ方」を込めるんですね。〈なんとか借りたアパート（ォウ）夢のような暮らしがスタート（ォウ）〉という風に。いちばん有名なのだと〝トモダチ〟の〈胸に夕日の色焼きついてますか（hah）〉っていうパート。

――声と息が抜ける部分があると。

R そうそう。その抜けが超気持ち良いですよね。

――ボイスコントロールに対して意識的だってことだね。

R やと思うし、すげえテクニカル。でもテクニックを見せびらかすために

パトワ
レゲエ発祥の地・ジャマイカで使われている言葉。公用語である英語と、アフリカの言語がミックスされて生まれたと言われている。「ヤーマン」や「コマゲン」、「ボンボクラ」などがヒップホップ楽曲でよく使われている。

やってるんじゃなくて、気持ち良い音楽のためにやってるのがケツメっぽい。〝言抜〟はシンプルなヒップホップ・ビートに全員がフックなしでヴァースだけを蹴っていくんですけど……RYOさんの下ネタは酷すぎる！　これ褒め言葉ですけど（笑）。〈マイクテストいちに愛撫です乳に〉って。「いや、全踏みやけど！（笑）」。ラップと性交を重ね合わせるっていうアプローチは少なくないし、俺もよくやるんですけど、それはRYOさんと宇多丸さんの影響を超受けてますね。

――〝ヘルレイザー〟とかモロにそうだよね。

R　ライブを性行為として歌ってるみたいな。でもそんくらいエクスタシーなことなんですよね、ラップするっていう行為が。まあ、この曲のヒドさは聴いて確認して下さい（笑）。〝雨〟は**『ケツノポリス4』**の〝**涙**〟に繋がってるんじゃないかなと。個人的に、ラップの面白み、レゲエのテクニカルさの集大成は『ケツノポリス3』、ケツメイシのキャッチーさとか、J-POPと対抗しよるくらいのポップネスの集大成は『ケツノポリス4』やと思ってて。そこに繋がる要素が、この段階から散見されるんですね。

『ケツノポリス4』

05年にリリースされたケツメイシの4thアルバム。〝さくら〟〝君にBUMP〟〝東京〟などが収録されている。

〝涙〟

メジャー9thシングルとして04年リリース。

――リリース当時は〝雨〟みたいな歌フロウに、いわゆるヒップホップリスナーは拒否感を覚える部分があったんだけど、それが今やスタンダードになっていて。

R　時代でやっぱり変わるんですね。そして『ケツノポリス』でいちばん紹介したいのが、12曲目の〝夕日〟。聴いていた当時、バスケ部に入ってたんですけど、全然試合に出れんかった俺を熱くしてくれた曲なんですよね。結構、挫折をがっつり味わいだした思春期には、〈さり気なく沈む夕日を見て悔しくて泣いた／あの涙を腕で拭い去り誓った あの日あの時の夢を今も見ろ〉みたいな、まっすぐど真ん中に熱いこと言ってくれる内容には、かなり支えられましたね。ケツメイシって、リスナーに対してめちゃフレンドリーに「腹を見せる」っていう特性があると思うんですけど、この曲も格好付けてないんですよね。でも同時に、戦う意思みたいな部分もちゃんとあるのが格好良い。この曲で特に好きなのは〈俺はもち内股でもやっぱ打ち勝った〉〈地道ながら力みながら いち物をいじりな／ちびりながら いい日だなとこの時を感じな〉っていうRYOさんのライン。〈内股〉と〈打ち勝った〉という

情け無さと強さの対比になる韻から、〈地道ながら〉〈力ながら〉〈いじりな〉〈ちびりながら〉〈いい日だな〉と「iiiaa」の長い韻を畳み掛けつつ、それ以外も〈いちもつ〉など「ii」の音をアクセントに引っ張ってく。

——いいこと言ってるような、そうでもないような……（笑）。Rくんの解釈は？

R 「全然余裕なんかないし、ダサさすらある自分の状況も受け止めて、笑いながら戦っていく」というか。そしてそれがケツメイシの強さやと思うんですよね。だから、この曲はケツメイシにとっての〝B-BOYイズム〟なんじゃないかなって。ラップも、大蔵さんが鬼の肺活量でラップを詰め込んで、RYOさんはライムの置き所で攻め、RYOJIさんはヴォーカルのメロディアスさで……それぞれの存在感がすごいんですよね。

ラップのさらなる進化

——そして話は『ケツノポリス2』に入りましょう。

R 一番聴いた作品だと思いますね。ケツメイシの世界観って、「みんなが

〝B-BOYイズム〟

98年にリリースされたライムスターのシングル曲。日本語ラップのアンセム的な一曲。

CamScannerでスキャン

経験できること」がほとんどなんですよね。ヒップホップの不良性だったり、タフな部分は、自分とは地続きじゃないと感じる人も少なくないし、俺にとっても直接地続きではない。だけどケツメイシは、ヒップホップかどうかっていう部分を抜きに、根源的に誰でもコミットしやすい音楽を作るんですよね。世の中のほとんどの人が感じる感情とか、経験を自分たちの作品に落とし込む。特にこの『ケツノポリス2』は、ケツメイシの優しさだったり、熱さが一気に出てくる作品だし、リスナーに寄り添った作品だと思うんですね。だから疲れてるときとか、喰らってるときに聴くと、沁みてくるし、ホッとする。だから、自分にとっては実家みたいなアルバムなんですよね。

――原点じゃなくて実家なんだ。

R　やっぱりこの作品から感じる「安心感」は、実家とか地元に帰ったときみたいな気分にしてくれるんですよね。このアルバムは〝手紙 過去～〟〝手紙～現在～〟〝手紙～未来〟という連作**「手紙三部作」**が肝になってて、どれも本当に素晴らしい作品。アルバム2曲目の〝手紙 過去～〟はシンガー兼ラッパーの**369**さんと、**タサツ**のメンバーだった**NAM**さんがフィー

「手紙三部作」

メジャー3rdシングル『手紙』として01年リリース。

チャリングされて。歌い出しはRYOJIさんから始まるんですが、RYOJIさんはあんまり韻のために文章を不自然なところで切らないんですよね。例えば〈何も見えないまま流れていく月日の影自分のために〉では「に」がつくんですよね。

——普通だと「影」と踏めるように「ため」で止めるよね。

R　でも、そうしないことで文として自然になるし、言うたら韻より文章を大事にしてる。だけど韻の部分を節回しとかフロウで強調することによって、ラップとしての聴き応えをしっかり構築するんですよね。

——なるほど。

R　RYOJIさんのヴァースの良さは、あんま体言止めをしないことによって、ケツで韻がガチンってハマる感じにならないことなんですよね。RYOさんが小さい韻のジャブ、デカい韻のストレートを打ちつつ、大蔵さんは韻への細かいアクセントとラガなテイストを組み合わせていく中で、RYOJIさんは文章として自然な流れで踏んでいく。そして〈価値観を足し算と引き算で〉みたいに、この韻が連なっていく感じがRYOJIさんの特徴

369
80年生まれ。94年から活動開始。07年には1stアルバム『369.1』でソロデビュー。アルファのTSUBOIとジサツというユニットでの活動も。

タサツ
ケツメイシのRYOこと田中(タ)、NAMこと佐々木(サ)、アルファのTSUBOI(ツ)によるユニット。03年に1stアルバム『ぼくらの五日間戦争』をリリース。

NAM
99年に369とともにNAM&369を結成。タサツとしても活動していた。

かなって。それは〝夏の思い出〟にも繋がっていくんですよ。

――『ケツノポリス3』の収録曲だね。

R 〝夏の思い出〟だと〈なぜなら車で ビーチボール膨らまし 頭クラクラ 窓を開け 切るクーラー 辛すぎるほどの暑さ〉みたいな、割とてらいもなく、わかりやすい子音や似た言葉をガンガン文章のすぐ後に繋げていくんですよ。ラッパーとしてちょっとテクニックを見せたいと思ったら、韻をあえて離してたり、同じリズムのところにハメたりする。でもＲＹＯＪＩさんはそういう色気みたいな部分よりも、割と素直に「窓を開け 切るクーラー」「頭クラクラ」みたいな展開をするんですよね。そのわかりやすさが、やっぱりケツメイシの聴きやすさにもなってるかもと思います。それにＲＹＯさんと大蔵さんがそもそもラップがテクいんで、そこでさらにＲＹＯＪＩさんもテクを見せつけると、ちょっと油っこくなってしまうというのもあると思うんです。

――清涼剤的な役割を果たしてると。

R それの成果が出て、俺がいちばんＲＹＯＪＩさんがかましたなと思うヴァースが、〝涙〟のＲＹＯＪＩさんヴァース。〈この機会にまた一つずつ

強くなりつつ古い靴 脱ぎ捨て歩いてゆく〉みたいに、言葉と韻の連なりで、めっちゃRYOJIさんの良さが出てて。だからトリのオチヴァースになってるんですけど、そういうところもちょっと『4』の時に話させてください。

――いずれケツメイシはまた取り挙げましょう。

R 〝手紙 過去〜〟に戻ると、続く大蔵さんの〈時にたまに頭に来る事を温めて後でまさに甘さに気付き〉は、「(あっ) 頭に来る事を(あっ)温めて後でまさに(あっ)甘さに気付き」って、「あ」の音を印象的にはめ込んでいくことで、気持ち良さを生んでる。だから、よりラップ的な進化と、洗練を手に入れたアルバムだというのを、アルバム2曲目にして楽曲として形にしている。369さんのラップもめちゃ良いんですけど、ふぁんくさんが大ファンのNAMさんのラップもキレキレ。ただ、テンション的には低いラップだったんで、最初はその上手さに気づかなかったんですよね。

――いぶし銀の巧さだから、中学生には地味に聴こえてしまうかもね。

R そう。ラップのテンションは低い人なんですよね、NAMさんは。でもスキルはとてつもない。例えば〈甘く切ない 記憶追い 薄暗いボロアパート

飛び出し 見上げるblue sky〉。〈甘く切ない 記憶追い 薄暗い〉では、「a・i」「oi」「o・i」っていう音で緩急を付けてる。そして〈見上げるblue sky〉で、「薄暗い」と「blue sky」で長く踏むんで、続く〈過ぎ去った日々を後悔する位〉でも、「するぐらい」がその韻にかかってくる。一方で、「後悔」も〈後悔する位 後退や荒廃の繰り返し〉って、「後悔」は「後退や荒廃の繰り返し」に続いてるんですよね。

——2重3重に韻が隠れてるんだ。

R そうなんですよ。無数の韻がちりばめられている。〈続く悪天候 霧が立ち込め 展望も漠然としてんのに歳月はup tempoで〉って部分は、おそらくふぁんくさんも影響を受けてると思うんですけど、韻的にドヤってはないんですよ。だから「そんな踏んでるの？」みたいに思うんですけど、「悪天候」「漠然と」「up tempo」っていう3つのわかりやすい韻の間に、「立ち込め 展望」「漠然としてんのに」っていう「eno」の音でも踏んでるですよね。だからメインの「au eno」っていう韻の合間に「eno」の音でも踏んでるから、めちゃくちゃテクニカルなんですね。だからラップがわかってくると「これはめちゃく

ちゃテクニカルやな!」と気付いたし、タサツを聴いて「ヤバっ、NAMさん!」ってなりましたね。その話はKZさんやふぁんくさんも迎えて改めてやりたいっす。その次の〝ビルの谷間〟という曲は、社会という戦場に飛び出して、熱く戦って頑張っていこうぜっていう曲なんですけど、そこで感じるのは「ラッパーとしてのファイティングポーズ」じゃなくて、「一般の人のファイティングポーズ」なんですよね。〝ビルの谷間〟っていうタイトルや、RYOさんの〈このコンクリートジャングルを遠くより案ずる　吸いこまれていく人が組みこまれてく〉っていうリリックからもわかるとおり、この曲は会社に行く、仕事に向かうサラリーマンやOLの気分みたいな部分を主眼にして書かれてて。

――RYOさんはサラリーマン経験があるんだよね。

R　そういう部分も反映されてるのかな。この曲で感じるRYOさんの特徴は、ラップを畳み掛けるところで、明確に「あ」とは言ってないですけど、歌い出しの前にちょっと「ぁ」って感じが入る。演歌の歌い出しとかに似てるのかな?　例えば〈疲れて吸われてかかし魂ぬかれて〉って部分の、「ぁ

疲れて」「ぁ吸われて」と勢い付けのような一呼吸があるんですよね。でも大蔵さんみたいに伸びるんじゃなくて、跳ねたり、抑える感じの呼吸が入る。

——言葉に入る前にちょっとつんのめるというか。

R　そう。ちょっとつんのめるんですよね。その部分もケツメイシの特徴になっている。そして〈企業戦士行こう前進 今日も戦うんだ〉ってサラリーマンやOLのことを歌いつつ、その後には〈安定にバイバイして勝つかわかんないが 毎日がサンデーの生き方を選んでる〉って、今のRYOさん自身の話になっていくんですよね。そして〈俺は俺でやってるんだ 勝負はってるんだ だから「お前いいよな」とか言ってんじゃねえ しかし目指す所同じだ 止まったらば終わりだ 人生のゲーム共に勝つまでッ〉。サラリーマン時代のRYOさんの目線、そこから脱サラしてチャンバーをやってる目線ってい

“And You Don't Stop”

感じるね。それこそ〈「おまえはいいよな」とか言うな I know,you are the man〉ってあの曲でも言ってる、このフレーズへのオマージュでもあると思う。

R そういう鼓舞する曲に続いて、4曲目の〝高値の花〟はエロ曲です（笑）。『1』収録の〝S/S〟は、エロいワンナイトラブをストーリーテリングで3人で分けて歌うっていう、ある意味4Pみたいな曲なんですよ。

――どういう解釈だ（笑）。

R そこでの、特にRYOさんが歌ってたキャラクターを引き継いだのが〝高値の花〟なんですよね。最初のRYOJIさんは街ですれ違った女性に「あ、いいな！」と思うところから始まる妄想で、大蔵さんも〈人の流れ 流れ任せ雑踏の中進む街の中で君に一目会った 歩みは止まった〉みたいな叙情的なリリック……かと思いきや、結局〈伸びた足先の奥にハメたい〉。

――止まらなかったね（笑）。

R 言ってしまった。3ヴァース目のRYOさんは、〈グラビアアイドル見て 萎びたカリそる嗚呼〉。もはやすれ違ってもないし、雑誌読んで興奮してるだけ（笑）。そして〈気付けば10コ下 俺中腰だ〉っていう固い韻（笑）。こ

の曲がおもしろいのは、フロウがめちゃめちゃ正統派なんですよね。それこそ**SHAKKAZOMBIE**の**ヒデボウイ**さんみたいな、「さんピンCAMP」の頃の古き良き日本語ラップをこういうエロいネタでやってるっていうのがいいんですよね。で、これまたパンチラインの〈パイ山脈〉という屈指の造語を生み出してからの、〈登り出せば溢れ出したわんぱくなタンパク〉（笑）。

——医学の学校に通ってたから（笑）。

R 人体に対する語彙力がある（笑）。そして〈僕的に目的地は亜熱帯だ 絶対生い茂るしげみ もちオイニーはツイキー〉。

——下品……。

R からの〈暗いから手つなぎ手さぐりでまさぐり ここに探検隊「やんちゃマン検隊」〉。

——**餓鬼レンジャー**と双璧のヒドい下ネタだね（笑）。

R さらに〈こんな俺だけど気持ちどれだけよ?〉っていう（笑）。

——何の確認だっていう。もはやプレイ（笑）。

R でも、こんなにエロいのに〈休日にお散歩 手をつなぐぞちゃんと ここ

SHAKKAZOMBIE
OSUMI、HIDE-BOWIE、TSUTCHIEで結成されたユニット。96年に『手のひらを太陽に』でメジャーデビュー。BUDDHA BRANDとのスペシャルユニット・大神として『大怪我』（96年）をリリースし、「さんピンCAMP」でも披露された。

ヒデボウイ
a.k.a. IGNITION MAN。BIG-O（OSUMI）、TSUTCHIEとともに93年にSHAKKAZOMBIEを結成し活動。BIG-Oとはアパレルブランド「SWAGGER」を設立し運営していた。現在は自身のブランド「KAKOI」を手掛けている。

CamScannerでスキャン

に居合わせ 嗚呼ただそれで幸せ〉って、最後はすごい優しいラブソングに変わっていくんですよね。最後も〈高値の花に恋をした 俺はまさにヤバめの馬鹿〉っていう固い韻で終わるという。前作からの人間的成長も垣間見えるような、素晴らしい曲ですね。

――人間の成長とは一体（笑）。

三位一体の極上テク

R 『ケツノポリス2』には、〝人は〟、〝侍ジャポン〟、〝手紙～現在～〟とレゲエテイストを3連続で放り込んでくるパートがあるんですが、内容的にも優しくリスナーに寄り添ってくれるような、ケツメイシらしいリリックが通底してます。〝人は〟の場合は〈人は悩んで本当の意味を知る〉っていうRYOさんのヴァースに凝縮されてると思うんですけど、頑張ってる人にも、普通の人にも、ダメ人間にも、どんな人にも寄り添うような歌詞世界があって、それにすごいグッと来るんですよね。だから大人になってから聴いても、「優しい～」って心がほどけるし、どんな状況の自分も肯定できるんじゃな

餓鬼レンジャー
95年にポチョムキンとYOSHIの2MCを中心に熊本で結成され、GP、タコ神様、DJオショウが加入。98年にミニアルバム『リップ・サービス』でインディーズデビュー。『Rの異常な愛情』第3回目のイベントで取り挙げられている。

CamScannerでスキャン

いかって思わされるんです。その次の〝侍ジャポン〟は、日本の良さみたいな部分をレゲエテイストで歌っていて。

――〝花鳥風月〟とか、和や日本をテーマにしたアプローチもケツメイシにはあるよね。しかもそれがあまりナショナリスティックにならないバランス感覚もあって。

R ライミングもすごいんですよ。例えば〈まずは感謝するぜあんた 両親この国を選んだねばんだ日本 きっと俺らはこれからが出番だ〉。「感謝」「あんた」で短い韻2発、「選んだ」「ねばんだ」で長い韻が2発、そして「日本」「きっと」で短いジャブをパンパン！と打つみたいに、すごいライムの手数なんですけど、それが文章としても必然で繋がってるから、理屈と本能の両方に訴えかけるすごさがある。でも、そこまで意識して韻の配置なんか考えずにやってるような気もするんですよね。どちらかというと気持ち良さが優先されてると思うし、それがRYOさん、ひいてはケツメイシのラップ巧者としての恐ろしさを感じる部分でもあって。本能で気持ち良くやってるからこそ、聴いてる方も楽しく思ってしまうという。そして〝中出し〟というブレイクを

〝花鳥風月〟

メジャー5thシングルとして02年リリース。RYOJI、DJ KOHNO、YANAGIMANの同曲リミックスも収録されている。

挟みまして（笑）。

――ひどいタイトルだな～。

R　これと同じ現象が**ラッパ我リヤ**のアルバムにもあるんですよ。

――**〝中トロ〟**ね。どちらも言いたいだけという（笑）。

R　続く〝手紙～現在～〟は、手紙3部作の中でもレゲエアプローチという面白さもありますね。そして、この「優しい流れ」の中で特に好きなのが、9曲目の〝雲の上から〟。これはいろんな解釈ができる曲で。

――Rくんの解釈は？

R　最初は「いろんな悩みがあるけど、雲の上から見たら小さいことやから、そこまで悩まずに生きろよ」っていう神様的な目線だと思ったんですよね。でも、もしかしたら亡くなった人が、自分たちが現世にいたときと同じような悩みや苦悩に悪戦苦闘してる人に向けての優しい視点なのかな、とか。

それか〈いつもここ広がる雲の上　皆の住む町から遥か遠くで　ただ見守るこの世の行く末　幸せ祈る常に胸の奥で　いつからか自ら雲の上　今日も今日という名の日が暮れ　明日は明日でまた夢見させてくれ　いつまでもいつ

ラッパ我リヤ

93年に三善／善三を中心に結成され、後にQ、山田マン、DJ TOSHIの3人で活動開始。95年リリースのコンピレーションアルバム『悪名』に、長らく続くシリーズ楽曲〝ヤバスギルスキル〟で参加。00年にはDragon Ashのシングル『Deep Impact』に客演参加。

〝中トロ〟

98年にリリースされたラッパ我リヤの1stフルアルバム『SUPER HARD』収録の楽曲。〝イントロ〟に始まり、〝中トロ〟を挟み〝アウトロ〟で締めくくられている。

CamScannerでスキャン

でも雲の上〉からは、自分が天に召された後のような解釈も出来るなと。

——それぐらい多元的な解釈ができるという。

R　でも根本的には「そんな考えすぎんでもええよ」っていうメッセージだと思うし、そこに勇気づけられるんですよね。〈かるくマイペースで歩いていく人がやがて大成するだろう　来るだろう君の時代が〉ってリリックも、自分へのメッセージなのかなって。だからマイペースでいいやと思っていろんな人に迷惑をかけてるわけですけどね（笑）。

——反省がない！　無敵か！（笑）

R　〈君の将来の勝敗は勝ち100%〉だからええかって（笑）。10曲目の〝ア・セッションプリーズ〟は、**アルファ**とケツメによるキレキレのラップ曲。中学校の時にはnobodyknows+と〝君にBUMP〟をずっと歌ってたタカセ君、そして〝ケツメの作り方〟を歌ってた同級生のカネコがいましたが、高校のバスケ部にはヨシノ先輩、通称「ジャガー」がいまして。

——最高のあだ名じゃん（笑）。

R　映画『ゴジラ対メガロ』に出てくる電子ロボットのジェットジャガーみ

アルファ
TSUBOI、WADA、DJ SUZUKIの3人で96年に結成。02年にDJ TASAKAとのコラボシングル『エクスタシー温泉』でメジャー進出。同年に1stアルバム『エンドルフィン』をリリース。

CamScannerでスキャン

たいやったからジャガーって呼ばれてた先輩がいて。

――センスありすぎるあだ名だけど、人間性はどうだろう（笑）。

R　で、そのジャガー先輩は〝ア・セッションプリーズ〟を丸暗記で歌える人やったんですよ。それで超テンション上がりましたね。以上。

――え、思い出報告だったの？（笑）

R　ジャガー先輩は話の本筋とは関係ありません（笑）。ただ〝ア・セッションプリーズ〟はやっぱりこのアルバムでも「口気持ち良さ」の最高到達点で、ずっと口ずさみたくなるような気持ち良いラップが展開されていくんですよね。だからジャガーさんもそら歌うわ、と（笑）。まずアルファのWADAさんが〈騒がしい道徳の時間です〉って言ってますけど、〝雲の上から〟と比べたら、たしかに騒がしい道徳。だってRYOさんのリリックが〈まずは便器のちぢれ毛から感染〉ですから（笑）。

――**MAKI&TAIKIの〝末期症状 feat.Mummy-D/Zeebra〟**で、Dさんが〈夜中のクラブの暗がりから発生／人からまた人へ感染〉って言ってるけど、大きな思想の違いが（笑）。

WADA
77年生まれ。同じく東京都江戸川区出身のKREVAの楽曲〝江戸川ロックオン feat.CUEZERO, WADA〟に客演参加しており、06年の全国ツアー「KREVA TOUR2006 愛・自分博～国民的行事～」にも帯同していた。

MAKI&TAIKI
キエるマキュウなどで活動するMAKI THE MAGICと、GEEK名義でも活動するDJ Taikiによるユニット。

R　大蔵さんもいいねんなぁ。〈私なりマイクラリー　頭ハゲあがりブサイクだし顔じゃない要は目立てばいい〉ってリリックはもはやブルースですよ（笑）。そしてアルファの**TSUBOI**さん。〈これはすごいです俺がTSUBOIです〉。こんな記憶に残るリリックあります？

――なにがすごいのか、説明がないのが最強だよね（笑）。

R　〈TSUBOIです〉って自分の名字を宣言するだけで（笑）。

――Rくんが「俺が野上です」って言ってるようなもんだもんね。

R　ホントそうですよ。「俺」の流れで言うと、RYOさんとTSUBOIさんは「お」の発音が似てるんですよね。例えば「おれ」だったら、「ゔぉれ」とか「うぉれ」って発音するという。

――それもラップのオリジナリティや聴き応え、フロウの構築性に通じるよね。

R　そこから続くTSUBOIさんのリリックも〈おてんとさんは2つあります／はいどーも内容も無い様で有るから怒やよからぽー〉って、気持ち良い早口言葉っぽさと、造語的な面白さもあって。そういう、キレキレの

"末期症状 feat.Mummy-D/Zeebra"

96年にリリースされたMAKI&TAIKIのE.P.『On The 1+2』収録の楽曲。R-指定は晋平太とともに"末期症状2015"としてリメイク。また、同じく収録されている"パスドラ発～スネア行き feat. MURO"のタイトルがCreepy Nuts"生業"にてサンプリングされている。

TSUBOI
77年生まれ。タサツとしても活動。フリースタイルバトル巧者でもあり、R-指定とは12年の「ENTER」のMCバトルでも対戦している。

ラップ曲の後に、ユニットの原点として〝ケツメの作り方〟がくる構成も憎い。これは先ほども紹介したケツメイシの結成秘話ですね。〈夜中には都内CLUB遊び 明日の一限は授業なのに〉って、ホンマに普通の学生の日常。まさに梅田サイファーでも、KennyDoesが明日一限授業やのに、サイファー終わってからも俺やテークエムがカラオケに付き合わせたりとかしてたんで（笑）。

――当時、大学の話を曲でするラッパーってあまりいなかったと思うんだよね。

R そうなんですか？

――少なかったと思う。90年代だと**四街道ネイチャー**の〝あした あさって〟や〝まっしろ〟で**マイクアキラ**と**北&澤（KZA）**が言うぐらいじゃなかったかな。ライムスターが先輩ラッパーに「おい、学生」って呼ばれてたっていう話もあるし、大学に行ってること自体が、ちょっと下げられるような状況もあったと思うんだ。

R KENさん（**KEN THE 390**）とかそういう話を曲に入れるけど……。

四街道ネイチャー
90年代前半から活動していたKZAとマイクアキラの2MCとDJ KENT（95年加入）からなるユニット。95年にミニアルバム『四街道ネイチャー』をリリース。「さんピンCAMP」と「大LB祭り」の両方に出演した唯一の存在。98年に活動停止。

——それはある種のカウンターでもあったんじゃないかな。もちろん、大学に行ってるラッパーなんて珍しくはないんだけど、それを曲には落とし込まなかったというか。

R　なるほどね。たしかに世捨て人とか浮き世離れしたような奴らっていうのがスタンダードやったから、逆に地に足着きまくった感じは受け入れられにくかったというか。

——そうそう。ストリート文化との食い合わせというか。でもケツメイシは大学に行って、一旦は就職してっていう経験も、そのままダイレクトに曲に反映してるわけで。

R　やっぱり、普通に生活を頑張ってる人たちに響くという意味での大衆性には、その影響も大きかったんじゃないかなと。そして〈楽しくて断れん誘い　また慣れないでかめの服を纏いライムスター・キングギドラ・ペイジャー歌詞覚えた全てを歌えた〉。まさに俺らもそうやったし、普通の人間が、普通にラップを好きになって、ステージの上で自分もプレイヤーとしてやり出すっていうような「普通の奴ラップやるあるある」というか、そこへ向かう

マイクアキラ
09年にSEEDAやNORIKIYO、EVISBEATSをはじめ30人以上のアーティストを招いた1stソロアルバム『THE RAP IDOL』をリリース。同年に2ndアルバム『THE RAP ROBOT』をリリースした。

北&澤（KZA）
DJ KENTとともにDJ／プロデュースユニットであるForce Of Natureを結成。ハウスやテクノ、クラブミュージック主体の音楽性で海外からも注目される。02年に1stアルバム『The Forces of Nature』をリリース。

CamScannerでスキャン

青春の道のりみたいなところを歌ってくれてるから、いま聴いたら余計にグッと来ますよね。あ、なるほどな、みたいな。

——それこそ自分史と重なるというか。

R ですね。そして12曲目の〝よる☆かぜ〟はクラシックですね。**香港でもカヴァー**されたり。

——そうなんだ！

R サビの〈よるのかぜ浴びたまま〉の後ろに「へーイ！　ホーウ！」みたいな**ノーティー・バイ・ネイチャー**の〝**HipHop Hooray**〟的な掛け声が入ったり。ＲＹＯＪＩさんの〈ガラガラの道をぶっ飛ばして〉、ＲＹＯさんの〈延々と続くドライブにトライする俺　一人目指してるのはあの橋の向こう〉ってリリック……いいなぁ。

——それは分析じゃなくて感想だよ（笑）。

R 普通の人間が経験することで、俺はまだできてないことの一つがドライブなんですよ。免許持ってないんで、夜風をまだ感じられてない（笑）。で、〈月明かりの指す方 君のいる所 朝日までに君迎えに行くとこ〉って、車で彼

KEN THE 390
81年生まれ。99年から活動を開始し、フリースタイルバトルで名を馳せる。05年にTARO SOULとの1stアルバム『JAAAM!!!』を、翌年にソロ1stアルバム『プロローグ』をリリース。ライムスターを輩出した早稲田大学ソウルミュージック研究会「ギャラクシー」出身。

香港でもカヴァー
01年にリリースされた香港の俳優・エディソン・チャンのアルバム『Ed Is On』に収録されている〝夜風〟。

CamScannerでスキャン

女をピックアップして、そのままドライブ……なかなか楽しんどるなぁ（笑）。
――情景がちゃんと時系列になっているね。

R　そうそう。ケツメってラブソングを歌うにもデートソングを歌うにも、エロい曲を歌うにも、3人で分担してストーリーテリングしてるんですよね。

――時間の経過や展開を3人で分け合うというか。

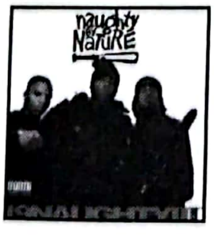
R　そう。時間の流れや、1人の人間の行為を、3人で分けて歌ってたり。それって結構珍しくないですか？

――珍しい。ヒップホップは自分のことを語るのが基本にあるし、1個のサブジェクトに対して、「俺はこう思う」をグループのメンバーで出し合っていくのがおおかたのあり方だよね。グループでのストーリーテリングも、別々の視点であることがほとんど。

R　だから、僕の予想ですけど、ケツメイシは「ケツメイシという自我」があるのかもしれない。もちろん、それぞれの視点で話してる曲もあるけど、ヒット曲だったりキャッチーな曲に関しては、3人が1人の人格というか、1人の人間の起承転結を分けて歌ってる場合が多い。それはケツメイシのオ

ノーティー・バイ・ネイチャー
86年にニュージャージー州で結成（結成当初の名前はニュースタイル）。91年に、ジャクソン5のヒット曲"ABC"をサンプリングした"O.P.P."が収録されたアルバム『Naughty by Nature』をリリース。

"HipHop Hooray"



93年にリリースされたノーティー・バイ・ネイチャーのアルバム『19 Naughty III』収録の楽曲。

リジナリティかも。

――かつ、それがポピュラリティを得られる理由かもしれないね。なにしろ話がわかりやすくなる。

R たしかにポップミュージックを聴いてる人からしたら、1曲の中で5人、6人の人格があるのは複雑ですもんね。で、13曲目の〝手紙～未来〟は「手紙3部作」の完結編。ヴァースがあって、サビがあって、最後にRYOJIさんの歌に被っていくように大蔵さんとRYOさんの掛け合いラップが入ってくるっていう、この後のケツメイシのヒット曲の雛形に沿った曲になってるんですよね。

――ケツメイシはメンバー間の掛け合いと連携が魅力だけど、この曲にその雛形を感じると。

R やっぱりケツメイシのめちゃくちゃ細かい掛け合い本当に魅力的なんですよね。改めて思ったんですけど、この曲のように「サビがあって、お互いのヴァースがあって、最後にRYOJIさんの歌に被っていくように、大蔵さんとRYOさんの掛け合いラップが入ってくる」っていう一つの流れが、

ケツメイシのヒットの雛形になってるのかなと。その構造自体は結構入り組んでるんだけど、聴感上はすごくポップなんですよね。続く〝トモダチ〟もそれに近い構造を持っていて、実際にヒット曲になったんですよね。

――ある種の構造的なケツメイシ節をそこに感じる。

R　〝トモダチ〟はRYOさんの〈変わらない気持ちそれこそが命　あれから何年汗ばらまいて〉からのフロウのつけ方はとにかくテクニカル。〈お前らは未だ走り続けてるだろう〉とか、三連や速く言葉を置くところにメロディーを乗せるっていう、それこそ**トゥイスタ**や**ボーン・サグスン・ハーモニー**、**ケンドリック・ラマー**につながるような、言葉を早口で畳み掛けるけどメロディアスっていう気持ち良さを、この時点でやってるんですよね。それから〈常に前上見てる決めるmy way〉の「前上」と「my way」の子音踏み。これが自然やし、変な固有名詞やオリジナルの言葉じゃなくて、みんな知ってる言葉でここまでテクニカルにライムを構成できるってことを証明してるんですよね。そこはキック・ザ・カン・クルーも一緒ですね。キックもケツメもやっぱり、みんなが日常会話で使う言葉で上手く踏める全部の例を出し

トゥイスタ
73年生まれ。04年に同じシカゴ出身のカニエ・ウェストがプロデュースで参加した4thアルバム『Kamikaze』が大ヒット。高速ラップが特徴的で、92年には「55秒で598の音節を発音することができ、世界で最も速く英語を話すラッパー」というギネス認定を受けた。

切っちゃったっていうぐらいやってるし、初期段階でここまでやられちゃったら、後続の奴らは日常を普遍的な言葉で切り取ろうと思っても、なかなかラップにしづらいんですよ。

――日本語ラップの歴史を経たからこその悩みがあると。

R　ホント、大変なんです（笑）。あと〈なる日わかる日までが共に変わる日〉って「aui」で踏んでいくんですけど、速くなるテクニカルなフロウがまた……ここの部分は何回もカラオケとかでやろうとしても上手くいかないんですよ。RYOさんの底の知れなさみたいなところがあるからなんかな、めちゃくちゃ気持ち良いんだけど真似ができない。

――配信を見てくれてるKZくんも「近しいことはできるけどあのグルーヴは出せない」ってコメントを寄せてくれているね。

R　KZさん、他にも良いこと言ってるな。「ライムが断片的やからこそ、そのランダムさにポエティックさがより強調される」。ホンマそのとおりやな。サビもすごいパンチラインですよ。〈ずっと友だち　だが時は経ち　変わりゆく街の中で共に育ち〉。シンプルやけどガツンと核心突いた記憶に残る

ボーン・サグスン・ハーモニー
オハイオ州出身のヒップホップグループ。94年にEP『Creepin On ah Come Up』でデビュー。生前の2パック、ノトーリアスB.I.G.、イージーE、ビッグ・パンと共演した唯一のグループ。

ケンドリック・ラマー
87年カリフォルニア州コンプトン生まれ。12年に『Good Kid, M.A.A.D City』でメジャーデビュー。17年の4thアルバム『DAMN.』で、クラシック、ジャズ以外の作品として初のピューリッツァー賞音楽部門を受賞。現在の最重要ヒップホップアーティストの一人。

言葉。メロディーや言い方も含め超パンチラインやと思いますね。〈この街から力溜め　一からのスタートを切った君に幸あれ〉も、「街から」「力ため」「一からの」ってめっちゃライムしてて、最後の「幸あれ」の「幸」も、アタマから続いてる「友だち」「経ち」「育ち」と掛かってて。

――「a」「i」のね。

R　めっちゃテクいな……。そりゃあ売れるやろ(笑)。〈離れた街と町で別々の道選んだり　Randomされた人生を共に生きてる君に幸あれ〉……いいねぇ。やっぱり目線が全方向の人間に向いてるし、訴えかけてる。それを形にするのは、ヒップホップの中でも珍しいと思うんですよね。でも、それをあえてやってるのかはわからんぐらい自然にやれてしまうのが、ケツメイシのすごさ。3ヴァース目の〈変わりゆく街の中で時経ち／思い思い形にして旅立ち／もう見慣れたのか景色／見上げた空いつの間にか星の数へった夜空〉の切ないメロディと大蔵ヴィブラートもキレキレ。叙情に訴えかけるようなフロウなんですよね。大蔵さんはメロディーの使いとかフロウの使いがアルバムを出すごとに新しい手数が増えているっていう。

——そして意外とドライな感触があるよね。

R　まさにそこで、友達やねんけど「俺たち親友やんな？　俺ら一生、絆崩れへんやんな？　ツレやんな？」っていう強制感がないんですよね。

——ベタベタしてないよね。

R　疎遠のような感覚もあるし、いなくなった友達もいるしっていう。でも、それを良しとも悪しともしてないんですよ。友達というテーマをベタベタ湿っぽく描いてなくて、ドライに描いてるからこそのリアルというか。俺も地元の友達に対して似たような感情があるんですよね。友情はたしかにあるけど、重くないし湿っぽくないし、あっさりしてるけど、それこそが友達の本質やんなっていう感じがするんですよね。

——本当の親友や友達には、友情を確認したり押し付けたりしないもんね。

R　そこです。梅田サイファーのやつもそうやし、俺とラップを一緒に始めた**ラードマン**とかに対しても、ホンマにこんな感じの感情。〈いつか話せよまた会ったなら〉なんですよね。「なにかあったら必ず俺に相談してこいよ！」じゃなくて、「また会ったときに話すよ」ぐらいのドライな感じがよりホン

ラードマン
R-指定が初めて梅田サイファーに行った時の友人であるヤマトのこと。名前の由来は子供の頃に父から「お前は脂を練って作り上げた人形や」と教えられたことから。

マの友達って感じがしてすごい好きなんですよ。この「淡い良さ」の感情が、ケツメイシの良さを凝縮してるんじゃないかなと。

——というのが『ケツノポリス2』でしたね。『Rの異常な愛情』SHOWROOM版の第2弾でした。改めてケツメイシについて話してみてどうでした？

R　1年の中でケツメイシを聴く期間は絶対に来るんですけど、やっぱり一生聴けるっていうくらいにグッドミュージックです。ヒップホップから離れたくなる時期でも聴けるのがケツメイシですね。ラッパーだからさんざんヒップホップに追い詰められる時期はあるじゃないですか（笑）。そのときに聴けるのがケツメイシだし、そこで自分の足元を確認することができる。だから言うならば実家ですね、ケツメイシは。

第4章
韻踏合組合の「韻の破壊と再生」

2021年2月14日

PROFILE

韻踏合組合

00年から大阪ミナミのアメリカ村を拠点に活動を開始した韻踏集団。これまでに脱退と合体を繰り返し、組合長であるSATUSSY、ERONE、DJ KANのCHIEF ROKKAと、HIDADDY、遊戯、DJ KITADA KENのHEAD BANGERZという現在の形となる。02年の『Volume.0』を皮切りに、『critical11』(02年)、『The Infumernas…EP』(03年)、『ジャンガル』(03年)と立て続けに作品を発表し、大きな話題を生む。"前人未踏"や"一網打尽"など、シーン内で数多くのリミックスが生まれ、バトルビートとしても使われることが多い楽曲も多数。22年11月11日に11曲入りの11thアルバム『So Far, So Good』がリリースされた。

CamScannerでスキャン

「ナシ」を「アリ」に変えた韻集団

――「ケツメイシ特集」以来、約半年ぶりの『Rの異常な愛情』でございます。

R　間が空いちゃってすみません。ちょっといろいろ立て込んでまして。

――Rくんは Creepy Nuts武道館ライブでヴァースを蹴りつつ、出演したドラマ『閻魔堂沙羅の推理奇譚』では中条あやみさんに蹴りを入れられるという日々でした。

R　どんな日常ですか（笑）。今回は韻踏合組合をテーマにお話できればと。

――「蹴る」から「踏む」にと（笑）。

R　今回は『Volume.0』『critical11』『ジャンガル』の韻踏初期アルバム三部作を中心に解読していきます。その前にまず韻踏合組合自体の紹介をすると、関西のヒップホップグループで、組合長と呼ばれているSATUSSYさん、『フリースタイルダンジョン』でお馴染みのERONEさん、そしてDJ KANさんによるCHIEF ROKKA。大阪アメ村にあるヒップホップショップ「一二三屋」を経営しているHIDADDYさん、そしてソロでも活躍している遊戯さん

とDJ KITADA KENさんによるHEAD BANGERZ。

――その2つのグループがユナイトしてるのが韻踏合組合で、いま韻踏としてイメージされるのはその6人だね。韻踏としてはレーベル「IFK RECORDS」の運営や、Rくんや梅田サイファーのラッパーも出場したMCバトルも行われている大阪の登竜門的イベント「ENTER」も主催されていて。

R 韻踏初期はその2グループに加えて、**OHYA**さんと**AKIRA**さんの2人によるNOTABLE MCが参加していて。OHYAさんは後にだるまさんに改名、AKIRAさんもAMIDAに改名したり、トラックメイカーとしてはEVISBEATSとして活動されてます。

――韻踏関連作はもちろん、SHINGO★西成 **〝ゲットーの歌です（こんなんどうDEATH?）feat.ViVi〟** など、数々のクラシックを生み出してるね。

R **ZORN**さんの〝Letter〟もそうですね。そしてソロMCの**ILLMINT**さん。その後MINT、今はMinchanbabyに改名された通称ミンちゃんが参加してて。その寄り合い世帯が韻踏合組合なんです。

OHYA
97年にAKIRAとともに地元・奈良でNOTABLE MCを結成。04年から「だるまさん」としてソロ活動を始め、05年に1stアルバム『How to Ride』をリリースするも、1年後に独断と偏見で廃盤にする。

AKIRA
韻踏合組合脱退後、MC・AMIDA、トラックメイカー／プロデューサー・EVISBEATSとして活躍。08年に1stアルバム『AMIDA』をリリース。ライムスターやKREVA、田我流はじめ、数多くのアーティストに楽曲提供をしている。

――韻踏は「Dotonbori Bridge Connection（DBC）」っていうクルーを母体に、そこから韻踏合組合に展開していって。マンガ**『少年イン・ザ・フッド』**を書いてる**SITE**くんがヒップホップ雑誌『BLAST』に韻踏のデモを紹介したのをきっかけに、**『BLAST』**が監修した**『Homebrewer's Vol.1』**っていうコンピレーションで、**MSC**と共に大々的にピックアップされて。その直後に韻踏としても『Volume.0』をリリースするんだよね。

R　このアルバムには**ポッセカット**曲はなくて、各グループごとの作品が収録されているんですよね。そしてその一月半後に『critical11』がリリースされて。

――だからすごい猛攻が突然始まったという印象だったし、とにかく『BLAST』で**古川耕**さんと**磯部涼**くんを中心にした、ニューカマーを紹介する「Homebrewer's」チームが推してた印象があったんだ。しかし『Volume.0』のジャケットは今見てもすごいね。

R　これはHIDAさんの背中なんですよ。

――韻踏合組合を結成した瞬間に背中に「韻踏合組合」という5文字を彫っ

・ゲットーの歌です（こんなんどうDEATH?）feat.ViVi

06年発売のSHINGO★西成のミニアルバム『Welcome To Ghetto』収録の楽曲。

ZORN

89年生まれ。14年まではZONE THE DARKNESS名義で活動。MCバトルで好成績を残し、09年に1stアルバム『心象スケッチ』をリリース。20年に初の日本武道館、21年には横浜アリーナ、22年にはさいたまスーパーアリーナにてワンマンライブを開催。

たという。

R　体張りすぎですよ。さすがに今のところ梅田サイファーには「梅田サイファー」っていう刺青を入れてるやつはいません（笑）。

――組んだ瞬間というのもすごいよね。Creepy Nutsを組んだ瞬間に刺青入れられる？　松永くんの背中に。

R　自分じゃなくて相方の背中に（笑）。でもユニット名って喧嘩して解散とかなったら……って考えちゃいますよね。韻踏も実際、解散の危機があったみたいで。

――その解散の危機の話し合いの時に、やおらHIDADDYさんは背中のタトゥーを見せて「俺はこれを背負っていく！」と宣言してみんなを納得させて、危機を乗り越えたという（笑）。

R　最高ですね。HIDADDYさんは足の裏にも「韻」っていう刺青を入れてるんですよ。でも、土踏まずに入ってるから踏まれへんっていうね（笑）。

――素晴らしすぎる(笑)。韻踏のデビュー当時はネットが未発達だったから、今では考えられないけど自分の環境外のヒップホップの情報ってすごく入

ILLMINT

04年に韻踏合組合脱退後、07年に1stアルバム『after school makin' love』をリリース。08年にはGin'N'Boysの結成や、フリーダウンロード楽曲を数多く発表した。16年には活動休止発表をするが、翌年からMinchanbabyに改名。

『少年イン・ザ・フッド』

19年から『週刊SPA!』で連載中。「何者でもなかった少年が、HIPHOPに熱中する中で自分自身を発見する」、著者がたどってきた道が投影されて描かれているマンガ。

CamScannerでスキャン

りにくくて。俺は関東だから、関西勢は**Future Shock**と契約してた"**Word Swingaz**"や**L B**周辺の**脱線3**、それから**OWL NITE FOUNDATION'Z**の"**OWL NITE**"みたいな、超話題作だったり大手と契約している存在じゃないとなかなか見えにくくて。その状況で登場した韻踏はすごく亜種に思えたし、大阪シーンの中心とはまた違うんだろうなという感触があって。

R　たしかに、韻や言葉遊びにすごくこだわったリリックや、**バウンスビート**を形にするにしても和風やったり、僕は当時をリアルタイムで知らないけど、おそらくすごくカウンターやったんじゃないかなと思いますね。

――その意味では、Rくんが韻踏を知ったのは？

R　僕が日本語ラップを好きになって、中学校でも普通にラップ好きの友達ができ始めた時に、友達から名前を聞いたのが韻踏合組合だったんですよね。「『UMB』っていうMCバトルで伝説的なバトルをしたラッパーがいる。それが韻踏合組合の**HIDADDY**さんと**ICE BAHN**の**FORK**さんや」って話から知ったんだと思いますね。

――最初に知った時は「地元大阪をレペゼンする韻踏」という知り方ではな

SITE
79年生まれ。ヒップホップ特殊情報機関Ghetto Hollywood主宰。グラフィティライターとしてSD JUNKSTAにも所属し、ライターやA&R、MV制作などの"ヒップホップ何でも屋"として活動中。

『BLAST』
シンコー・ミュージックから発行されていたヒップホップ／R&Bを専門とする音楽誌。『CROSSBEAT』増刊として94年から『FRONT』という名前で発行され、99年から『BLAST』に変更。07年5月号をもって休刊となった。

CamScannerでスキャン

かったんだ。

R　そうなりますね。ただ、当時はＺｅｅｂｒａさんやライムスターを聴いて韻を踏むという行為の面白さにバチバチ目覚めとった時やったし、自分でもリリックを書いて、ライミングを考える時期に足を踏み入れてたんですよね。それで韻踏合組合という名前を知って「……ちょっと待てよ！」と。

――俺の好物じゃないの!?って（笑）。

R　しかも実際に聴いたらとにかく韻を踏みまくってて「こういうのが聴きたかったんや！」って興奮しました（笑）。ハマりたての頃ってよりぶっ飛んだもの、味の濃いもの、極端なものが欲しくなるじゃないですか。それもあって韻踏に夢中になったんですよ。例えば、ジブさんやライムスターのような文章を構成するための韻、ちゃんとリズムとしてラップを構成するための韻も大好きですけど、それを超えて「とにかく韻を優先する」ような、ラッパ我リヤみたいなアーティストを聴いて「おもしろっ！」てなってたんですよね。だけど、友達に「この言葉とここが韻で掛かってて」って説明しても、「で、サビは？」「メロディは」っていう話になって。

『Homebrewer's Vol.1』

02年にリリースされた、磯部涼と古川耕が『BLAST』で連載していた新人発掘コーナーから生まれたコンピレーションCD。MSC（当時はMS CRU）、韻踏合組合、イルリメらの17曲を収録。『～vol.2』（03年）にはSD JUNKSTA、サイプレス上野とロベルト吉野、Romancrewなどの楽曲が収録されている。

音楽性じゃなくて韻の話をされても「それは音楽なのか？」っていう話にはなりがちだよね。

R　だから韻の話に飢えてた状況で、韻踏合組合に出会った時の衝撃たるや。

――それはどういう意味で？

R　韻を踏みまくってるんだけど、その構成が我リヤとはかなり違ったんですね。例えば我リヤは、ダジャレ的な押韻もあるんですけど、基本的に母音に分解して踏んでるから、一聴しただけではそこが韻なのかってわからないことがあるんですよ。例えば"Check1,2"の〈本日も非常に良い調子のDJ TOSHI。まるで貴公子の様に移動し営業〉っていう韻は、口に出すと、耳で聴くとどこで踏んでるかわかるんですが、文章上ではパッと見わかりにくい。それは母音で踏んでるから。でも、韻踏合組合は子音踏み、同音異義語で踏むことが多いんですよね。母音だけじゃなくて子音の響きまで一緒だから、要はダジャレにめっちゃ近いし、文章上でもわかりやすい。「ブドウ一粒どう？」みたいな。平仮名にすると『ぶどう』ひとつ『ぶどう』って同じ言葉が出てくるのが子音踏みなんですよね。

MSC
00年にMSCRUとして漢a.k.a GAMIを中心に結成された「新宿拡声器集団」。02年に1st EP『帝都崩壊』、MSC改名後の03年に1stフルアルバム『Matador』をリリースした。

ポッセカット
1つの楽曲内で複数人がマイクリレーを行うラップ曲。

古川耕
73年生まれのライター、放送作家、脚本家。『ライムスター宇多丸のウィークエンド・シャッフル』や『アフター6ジャンクション』、『ジェーン・スー 生活は踊る』の構成作家としてもおなじみ。

——言葉の連なり自体は同じなんだけど、切り方と構成で、その意味と理解が変わる言葉群というか。

R　そういうことを韻踏は多用したんですよね。ただ、それを韻とするか否かは、日本語ラップの中でも結構際どいラインやったみたいなんですよ。韻自体がダジャレと思われがちな文化の上で、日本語のライミングがダジャレに聞こえないように模索する中、特に宇多丸さんは意識的に子音の響きまで同じ韻を探していたと思うんです。例えば〝B-BOYイズム〟〈傘もささずに歩く土砂降りの中を／見ろよこの晴れやかな顔〉の、〈土砂降りの中を〉と〈晴れやかな顔〉。ここには「NA/KA/O」という同じ響きが出てくる。それを宇多丸さんは接続詞や構成も含めて、リリカルな表現として突き詰めることで、ダジャレじゃなく聴かせた。でも、韻踏合組合が革命的やったのは、それを「開き直った」ところだと思うんです。

——「おもしろければどんな韻の踏み方でもいい」という面白主義というか。

R　完全にダジャレに聞こえようが、文章に整合性がなかろうが、ラップとしておもしろければいいっていう。同時に、それを追求したことで、ライミ

磯部涼
78年生まれのライター、音楽評論家。主な著書は『ヒーローはいつだって君をがっかりさせる』(04年)、『ルポ川崎』(17年)、『令和元年のテロリズム』(21年)など。

Future Shock
97年にBrooklyn Yasによって設立された日本初のヒップホップ専門のメジャーレーベル。ZeebraやSOUL SCREAM、OZROSAURUSなどが所属していた。

Word Swingaz
97年に結成されたRYWとMISTA O.K.I.の2MC。01年にシングル『誰が、今夜…(Who's Da Hustla?)』でメジャーデビュー。

ングに関するナシをアリにしたんやと思うんですよね。ヒップホップのおもしろいところって、時代が変わっていくにつれ、「ナシ」が「アリ」になっていくところやとは思うんです。そもそも「日本人がラップするっていうのはナシ」だったのを、「アリにした人たち」の積み重ねが今のヒップホップですよね。

――メロディーをつけるかどうか、**オートチューン**をかけるか否かみたいに、いろんな「ナシかアリか」議論があるけど、その問題をいかに解消していくかで、技術や歴史が発展してきたともいえるよね。

R　そういう意味で、韻踏合組合は壊し方が格好良かったと思うんです。例えば、小節のケツでダジャレみたいな韻を2つ踏むだけだと、「それはダジャレやん」で終わるけど、そのダジャレみたいな韻を果てしなく踏んだり、フリーキーな配置をするような「独特な壊し方」によって、それをオリジナルにしていった。もうひとつ重要なのは、韻踏って「ユニットの中のラップの中心軸」がないんですよね。クルーにはその中心になるようなラッパーがいると思うんですけど。

LB
「リトル・バード・ネイション」の略称。スチャダラパーやタケイグッドマン、TOKYO No.1 SOUL SET、かせきさいだぁらを中心に90年ごろからゆるく結成されたアーティスト集団。

脱線3
89年にロボ宙、BOO、KING 3LDKの3人で大阪で結成。94年に1stアルバム『パチルカ』をリリース。

——UBGにおけるZeebraのような、基準線になる人というか。

R　でも韻踏はみんなとにかくカラーがバラバラで、根本的な基礎からして違う。

——その意味ではLBに近いのかな。スチャダラパーとかせきさいだぁと脱線3が同じクルーに存在するというか。

R　近いかもですね。トーンやテンション、ラップの基本構造、思想も音楽性も全然違うMCが7人集まって、しかも曲ごとにバラバラに組み合うから、余計にカラーが分散されていくのが韻踏なんですよね。だから「壊し方」も全員違ったし、それが魅力的だったというか。そして、この構成が今どんなクルーに近いかというと、梅田サイファーではないかと。

——急に自分側に引っ張ってきたな（笑）。

R　でも、今作ってるアルバム『ビッグジャンボジェット』を聴いても、梅田は初期の韻踏に近いなと思ったんですよね。全員がそれぞれ違う正義を持って寄り合っているという。

——韻踏も梅田も幼馴染や同級生ではないって部分も大きいのかな。関係性

OWL NITE FOUNDATION'Zの“OWL NITE”

大阪のヒップホップシーンを黎明期から盛り上げたDJ KENSAW（16年に死去）による97年の楽曲。OWL NITE FOUNDATION'Z名義で茂千代、RYUZO、BAKA De GUESS?、HEERO da JOKER、WORD SWINGAZらが参加。関西版“証言”とも言えるクラシック曲。

が古いほど、思想やペースが似てくるじゃない？

R　たしかに。その代表がBAD HOPですよね。それぞれは個性的だけど、幼馴染だからこそ感性のすり合わせが早くて、1つの進むべきベクトルを見据えた世界観が作れる。でも、1グループの中にいくつもの世界観があって、AというMCの考えに対して、BというMCが反対的な側面をぶつけたり、Cはそれを折り合うように構成したり、Dはまったく関係ない話をしたりするのが韻踏合組合の特徴であり、梅田サイファーもそれに近いのかなって思いますね。

——梅田と韻踏の共通点としては、インタビューが全員饒舌且つ、まとまらないというのも似てる（笑）。

R　アハハ。すんませんねえ（笑）。でも確かに『critical11』を出す時の『BLAST』のインタビュー記事の写真を見たんですけど、これは完全に高木さんにインタビューを受けた時の梅田サイファーと同じですよ（笑）。服も統一せえへんし、佇まいもバラバラ、好きな表情もみんな違うみたいな。

——総勢9人のはずなのに15人ぐらいいるし、誰が誰だかのキャプション

バウンスビート
90年頃からアメリカ南部のニューオーリンズで発祥したサウンドの一種。高速のハイハット音が特徴的であるため「チキチキ系」と形容される。日本ではTWIGYが00年に『SEVEN DIMENSIONS』にていち早く取り入れた。

FORK
80年生まれ。「UMB」をはじめとするMCバトルで圧倒的な実力を見せつけ、『フリースタイルダンジョン』のモンスターとして全国にその名を広めた。

や説明もない乱暴な記事で「昔の雑誌だな〜」って（笑）。その次のページが奇しくも当時大阪で売出し中だったDOBERMAN INC（現：DOBERMAN INFINITY）なんだけど、ドーベルはしっかりアーティスト写真になってて。

R　その特異性も込みで、韻踏合組合がイロモノだったりキワモノって見られた時期も確実にあったと思うんですね。でも『ジャンガル』によって、アンダーグラウンド感もラップの言葉遊びも、全てが研ぎ澄まされて、「これが韻踏合組合や」ってなったと思うんですよね。

四者四様のごった混ぜ感

——なるほど。まずは初期三枚までの歴史とRくんの韻踏との出会いを聞きましたが、ここからは具体的にアルバムの話をしていきましょうか。

R　では時系列として『Volume.0』（02年）から行きましょうか。僕が高校生の頃、梅田サイファーの奴らとちょいちょいMCバトルに出始めたんですけど、やっぱりアメ村界隈からは「なんやあいつら」みたいな野次も飛んできたんですよね。

“Check1,2.

ラッパ我リヤの2ndアルバム『ラッパ我リヤ伝説』（00年）収録の楽曲。

オートチューン

楽器・ボーカル用音程補正用ソフトウェア。05年にデビューしたT-ペインがエフェクターとしてオートチューンを導入した楽曲群が大ヒットし、世界的な主流となる。現在ではオートチューン含め、エフェクトをどう使うかもフロウにおけるスキルの一つになっている。

——いわゆる「ストリート性問題」というか。

R その中で「いや、でもこいつらラップ上手いやん」って認めてくれたのが韻踏合組合やSHINGO★西成さんなんですよね。そういう人たちが認めてくれたお陰でだいぶ俺たちも生活しやすくなったっていうのがあります。

——だるまさんも10年のAmebreakインタビューで「最近注目しているのはコッペパン」って言ってるんだよね。

R コッペパンがだるまさんの前座に出て、フリースタイルをやりまくっていたのを見て、後で楽屋で「お前らヤバいな」「俺らも韻踏合組合を組む前に、自分らのスキルにすごい自信があったから、いろいろひっくり返そうと頑張ってたのを思い出したわ」って言ってくれたりして。本当にありがたかったですね。

——コッペパンと韻踏というと、韻踏の〝MECCHA MECCHA〟のビートジャックをコッペパンもやってるよね。

R ……まあ僕のヴァースは上質なストーリーテリングとなっております(笑)。

かせきさいだぁ
68年生まれ。ヒップホップグループ・TONEPAYS解散後の94年にソロ活動を始め、95年に1stアルバム『かせきさいだぁ≡』をリリース。シティポップをテーマにした『ミスターシティポップ』(12年)、アニメソングカバー集『かせきさいだぁのアニソング!! バケイションー!』(13年)発表など、幅広いジャンルで活動している。

〝MECCHA MECCHA〟

10年発売の6thアルバム『都市伝説』収録の楽曲。

――上質なエロ話が続くっていう。あの時いくつ？　未成年じゃないよね？

R　取り調べですか？　あの時は19、20歳やからセーフセーフ（笑）。まぁストーリーテリング、「BASED ON A TRUE STORY」ですので（笑）。話を『Volume.0』に移すと、このアルバムはまだ韻踏のクルー曲はなくて、それぞれのユニットでの曲が収録されてて。ユニットごとに絞っていくと、CHIEF ROKKAの〝CASH MONEY〟は、組合長がいろんな言い回しで当時のアイドルとかをネタにしていくっていう。

――芸能界に何の恨みがあったんだという（笑）。

R　これはラッパーあるあるなんですけど、テレビを観ながら難癖をつけてライミングをしていくみたいなのがあるんですよ。

――不毛だなぁ（笑）。

R　この曲で聴いてわかるように、CHIEF ROKKAは韻踏合組合において、踏みながらうまいことやおもしろいこと言っていくとか、ダブルミーニングやサンプリングが上手い2人なんですよね。

――ストーリーテリングや内容の構成力がすごく高い2人だよね。

CamScannerでスキャン

R　オープニングも**ウータン・クラン**の〝C.R.E.A.M.〟のヴァースを、フックで替え歌にしてるんですよね。ＥＲＯＮＥさんの〈明かりをつけましょ道頓堀に〉も替え歌だし、こういうサンプリングや変化の付け方がCHIEF ROKKAは上手い。ＥＲＯＮＥさんの〈幸か不幸か以上が硬貨／高価でもないが異常な効果〉っていうパートも上手いですね。同じくCHIEF ROKKAの〝ALL ROUND PLAYER〟での、言葉遊びをしつつ自分のラッパーとしてもすごさを表現するっていう、スタンダードなボースティング・スタイルの構成力の高さからも、ラップの礎や足腰の部分の確かさを感じます。

——ではHIDADDYさんと遊戯さんによるHEAD BANGERZでオススメの曲は？

R　〝BEAT盤〟でいきましょうか。ＨＩＤＡさんの〈縄跳びとビート板とバウンド〉ってパートからもわかるように、ＨＩＤＡさんは韻の置き方が数珠つなぎになっていたり、連想ゲーム的にリリックが展開していくんですね。わかりやすい母音の脚韻みたいな「ここに韻があります」っていう韻の踏み方ではなくて、口に出してみて近い響きの言葉があったら、脈絡を超えて使

ウータン・クラン
92年にニューヨークのスタテン島で結成された大所帯グループ。93年のデビューアルバム『Enter the Wu-Tang (36 Chambers)』が大ヒット。主なメンバーはRZA、GZA、オール・ダーティー・バスタード（04年に死去）、メソッド・マン、レイクウォン、ゴーストフェイス・キラーなど。各メンバーのソロ作品も豊富。

CamScannerでスキャン

うことで、その連鎖によって物語やリリックが繋がっていくというか。一方で、この時の漢さんは〈縦書きタレる俺書くノートに／濃く描き出される意味の濃度に〉ってしっかりサ行で踏むスタイルで、10代の頃の漢さんはこういうスタイルやったんやなって。そして言葉の発音の仕方がヤンチャですよね。

——HEAD BANGERZは[illegible]ないと入れないっていう逸話がありますよね。

漢 [illegible]「ENTER」に出た時に、HEAD BANGERZなんて[illegible]って聞かれて、「大学行って[illegible]」[illegible]

[illegible]

[illegible]

漢 [illegible]

――これは説明不要でラップ力のすごさがわかる曲ですよね。

R　わかりやすく衝撃ですよね。2人とも出だしから子音踏みで展開していくんですけど。それをダジャレっぽく聴かせないことで韻の世界に革命を起こしたと思います。AKIRAさんの出だしの〈俺はアメリカ人離れした肉体美〉も最高の言い回し。よく「日本人離れしたフロウ」とは言うけども、それはそもそも日本人を下に見た前提の言い回しじゃないですか。それを逆手に取って〈俺はアメリカ人離れした肉体美〉っていう。

――要は筋肉や脂肪のつきづらい、ひょろっとした身体をこう表現するかっていう。

R　それを〈ん〜何とも良いガタイ（言いがたい）〉って（笑）。あと〈肉体美〉と〈ネクタイピン〉みたいに、「母音で分解してみたら」のようなお勉強的に考えたら絶対に出てこないフレーズも発明ですよね。〈原稿書く〉と〈人間合格〉の子音での踏み方も、それまでの日本のライマーにはなかった考え方というか。近かったのが宇多丸さんかな。

――**三善／善三**さんとか。おそらく時代的[illegible]時多発で韻の[illegible]分解と再

三善／善三　ラッパ我リヤ結成時のメンバー。MMC三将としてキャリアスタート。05年に1stアルバム『三善的大発見』をリリース。

構築が始まってたんだと思う。

R 〈ときめいたり〉〈ドキュメンタリー〉っていうのも言い間違いや空耳、もっと言えばダジャレに近いんだけど、上手いこと韻と韻で挟み込んで、さらにフロウさせることでちゃんと格好良いラップにしていくっていう。その後のOHYAさんもエグいですね。〈プロ野球と洗濯機／黒和牛と弦楽器／たこ焼き甲賀流とケンタッキーほど／似てるようで似てないコンビネーション〉って（笑）。

――ほぼ言葉の脱線事故みたいな展開なんだけど、それが韻とフロウによる脱線だから、必然的にラップとしての強度が増していく。

R 韻先行で話や展開が脱線していくから、とんでもなく意味不明やし、わかるようでわからへんのですけど、〈似てるようで似てないコンビネーション〉っていう一言で納得させるという（笑）。〈良いアイデア出す言い合いでは〉とか〈俺憎いほど折れにくい〉みたいな子音踏みは、もはやインパクト重視の方向に開き直ってる感じがするし、そういう開き直りの凄味を提示したのがOHYAさんだと思うんですよ。

CamScannerでスキャン

——そして最後はMINTさんを紹介しましょう。

R　天才ILLMINTさんの"MCM氏"なんですが、社会的には言うのがはばかられる性癖だって、こうやって軽快なリズムに乗せて韻を踏んでしまえば、割とさらっと聴けるっていう事実がここには表れてますね（笑）。

——いったん理性とか倫理を放棄してもらって（笑）。

R　そうでないと〈わざとボール放り込んだロリコンだ〉ってラインは楽しめない（笑）。MINTさんは引きこもり傾向のある人で。

——自宅の2階にずっと居るから自分のことを「ジタニカ系」って呼んでて。

R　「ジタニカでロリコン」なんて、当時モーヲタであることを誇ってみんなに引かれてた宇多丸さんなんて比じゃない（笑）。

——アイドルでいえば、今から10年前、ももクロから早見あかりさんが卒業するライブがあって。そこでミンちゃんとL-VOKALとCherry Brownが揃って中野サンプラザ前の広場で開場を待ってた時の衝撃は忘れられない（笑）。

R　その意味でもハードコアやマチズモが強かったシーンの風通しを良くし

L-VOKAL
72年生まれ。イギリス人の父と日本人の母を持つ。96年に1stアルバム「Laughin'」をリリース。SEEDAやKREVAらを客演に迎えた楽曲なども話題になる。

Cherry Brown
89年生まれ。アメリカ系の黒人を父に持つ。Lil'諭吉名義でトラック提供やプロデュースも行う。ネットを中心に膨大な楽曲を発表し、13年には1stアルバム『Escalate』をリリース。

てくれた1人ではあることは間違いないですね。

――風通しを良くする方法も様々だな（笑）。

R　スキルの面もとんでもないですよ。〈どうなんだい全校生徒一生懸命で／ミッション系で全寮制の某団体〉は、韻が逆流してるんですよね。〈どうなんだい〉と〈某団体〉、〈全校生徒〉と〈全寮制の〉、〈一生懸命で〉と〈ミッション系で〉って、文章で書くとわかりやすいですけど、韻が小節で対象構造になってて、もう「何考えてんの!?」って。とにかく韻の配置が新鮮。それから〈本当にもったいないけど／本校に目下居ない〉みたいに、フレーズのすぐ後にもう一回同じ踏み方をするような、韻を振った瞬間に落とすのがＭＩＮＴさんの特徴ですね。その意味でも特に脱退組のラップの異様さは、それまでになかったタイプのラッパーだと思います。

――いま聴いてもプログレッシヴだよね。

R　スタンダードに韻を踏みながら、文章的にもストーリー的にも構成力高く、皮肉の利いたリリックでうまいこと言うCHIEF ROKKA。フリースタイル的／連想ゲーム的に言葉を紡いで、それがリズムを刻んでいく面白さを

提示するHEAD BANGERZ。ともすればダジャレに思える子音踏みで振り切ったNOTABLE MC。思想的にも今までのラッパーにはいなかったMINT。そういう多種多様な存在が一同に介していたのが、初期の韻踏合組合の最大の魅力ですね。そしてその全ユニットが集まって作ったアルバムが『critical11』(02年)というアルバムなんですよ。ただ残念ながらERONEさんが不参加なんですよね。

情報過多な名ポッセカット曲

──『TRASH TALK』収録の〝ER-1 緊急救命室 1〟で、ERONEさんはその時期のことを曲にしてるよね。

R 梅田サイファー『NEVER GET OLD』でテークエムがおらんかったみたいに、誰かがいないっていうのは、大人数グループあるあるでもあって。なので集合曲の〝揃い踏み〟も、ERONEさんは不参加なんです。とはいえ、この曲は『Volume.0』で話したようなメンバーの特徴がいかんなく発揮されている曲なので、重点的にお話できれば。まず最初に登場するラッ

『TRASH TALK』
06年にリリースされた4thアルバム。

CamScannerでスキャン

パーは遊戯さん。一番若手で、ラップに対しての熱量や吸収力が高くて、スキルもかなりキレキレです。最初の〈Yo! Shut up!! 容赦なくよっしゃ！ラップするでワクワク〉での、子音踏みを連続で展開していく感じは、HEAD BANGERZの特徴でもある、連想ゲーム的に言葉をフリースタイルで繋げていく方向性が特に出てて。内容的にも「これが大阪の最先端の韻やで」っていうのをいかんなく発揮している感じがしますね。そして、その血気盛んな感じは梅田サイファーで例えると、〝トラボルタカスタム〟のKennyDoesに近い。若い切り込み隊長が「兄さんたち、行ってきますわ！」みたいな（笑）。音の乗せ方や、すごく細かくタイトにリズムを刻んだりする所も、Kennyに近い感じがしますね。

――次のヴァースはＡＫＩＲＡですね。

Ｒ 〈**ホッタイモイジンナ!?**〉という耳に残るフレーズから攻めつつ、〈汝は不器用と評判の仏教徒〉ってNOTABLE印の同音異義語で展開していって。続く〈大阪、神戸、奈良支部共同作業Narattive〉は、意味合い的には大阪のCHIEF ROKKAとHEAD BANGERZ、神戸のＭＩＮＴ、奈良のNOTABLE

ホッタイモイジンナ!?
江戸時代から伝わるとされる「空耳」で、元となる"What time is it now?"を訳すと"今「何時」?"。続く「汝」と、ここでも同音異義語踏みがされている。

MCっていう出身地を表現してるのと共に、韻としても「不器用」と「仏教徒」「都共同」と繋がっていて、さらに「奈良支部」と「Narrative」でも踏んでいるという。そして続く〈仰天!!〉と〈来よってん〉の踏み方ですよね。

——関西弁だからこその踏み方というか。

R　しかも関西弁での子音踏みなんですよね。SHINGO★西成さんも使うテクニックですけど、韻やリズムの必然性の中に、関西弁という言葉づかいを方法論としても取り入れてる。かつそれが形になると、関西弁ってやっぱりライムするとおもしろく響くんやなっていうのがわかりますよね。〈来よってん〉に掛かる形で、〈経典説くが冥土 in 米国製〉ってラインが出てくるんですけど、後にAKIRAさんは、トラックメイカーとしてEVISBEATS、MCネームとしてAMIDAに改名するんですが、その意味でも仏教に造詣が深い人で。

——AMIDAは阿弥陀如来だよね。一方で「えびす」は大阪では今宮戎神社が有名なように、神道の神様だから一つのアーティストの中に仏教と神道が混在してるのもおもしろい。

R　EVISBEATSとしてリリースした『**AMIDA**』っていうアルバムでは般若心経をラップした〝般若心経ＲＡＰ〟って曲を発表してて。その意味でも、ホンマに「評判の仏教徒」やと思うんですけど、同時に、この曲で言ってる〈経典〉はラップのことなんですよね。〈ビッグに経典説くが冥土 in 米国製〉、つまり、その経典はアメリカ産のヒップホップやと。そして仏教的な「冥土」という概念と「Made」も掛けてるっていう。

——短いセンテンスでも情報量が多い。

R　密度がヤバいですよ。次のヴァースのＯＨＹＡさんも〈そりゃあもうだいぶ韻中毒なライミングちゅうとくか／踏み込んだ組合員は注目株〉の時点でものすごい踏んでるんですよね。

——大きなところだけでも「だいぶ韻中毒な」「ライミングちゅうとくか」「合員は注目株」で畳み掛けてて。

R　続く〈目下チーフロッカ、イルミント、ノータブル、ヘッドバンガーズ／No doubt、わかってんだKnow How〉も、「チーフロッカ」「ミント、ノータブル」「ヘッドバンガーズ No doubt」「かってんだKnow How」と複雑な配

『AMIDA』

08年にリリースされたEVISBEATSの1stアルバム。「908」名義のKREVAや、茂千代らが客演で参加している。

服や服を脱いでて、ASーBAさんの関西弁を読みに置いて、OHYAさんを「OHYAはヤンキーやんとかやないか、「服出やん…」ゆうてくれてなかったら、Wackは家いんやー」ってキャッチするんですけど、これはまさかまさかの関西弁で。

――「服出やん」つまり「服が出ない」なんで、非関西弁ネイティブからするとすぐには理解できない。特に「家いんやで」はわかりにくい。

R　これは「家帰れ」っていうことなんですよ。「いね」は「去ね」＝「どっか行け」って意味なんですけど、家に繋がってるから「家に帰れ」っていう意味になるんよ。

――なるほどね〜。

R　これぞまさしく関西ーですよね。その後にはーDさんは、表現さんに続いてHEAD BANGERZ団のラインで、「舞い上がっていけた大阪のHiphop Bigup rapping」ビーズップ、リリーダースでもDon't give up fight」とはくんな発表にビショップ、ジャンプかジャンプの読者はJump!!」っていう。

――同音異義語や近い言葉をとにかく畳み掛けてるね。

R 発声してみるとわかるんですけど、こういうラップって口が気持ち良いんですよ。そして続くMINTさんは、得意の振った韻をすぐ踏んでいくっていうスタイルで〈ったく言われなくても類稀なる〉って始めるんですけど、「ったく」から始まるヴァースなんてなかなかないですから。

――ラッパーとして解読すると「類稀なる」と「ったく言われなく」というライミングは、どう生み出したと思う?

R 「類稀なる」で韻を踏みたいと思って、それを母音に分解すると「auiaeau」だから、「祭り上げます」みたいな言葉が出てくると思うんですよね。

――7文字踏みがパッと出るRくんもすごいね(笑)。

R いやいや。だからMINTさんの場合は、もしかしたら「ったく言われなくても」って言葉がまずあって、そこから音の近い「類稀なる」を発想したのかもしれないし、言葉の流れとかフロウが近いこともあるから、同時に発想したような気がしますね。で、〈金品とチンチンをぶら下げてる新人王〉っていう最高のラインがきます。

――「金品」と「チンチン」の韻はすぐ出ただろうね。(笑)。

R　それをちゃんと「新人王」まで続けてますからね（笑）。ただ、このラインにも意味があって、ナードだったり、オタク的な要素を感じさせるMINTさんなんですけど、〝揃い踏み〟のMVの中だと、一番当時のメインストリームな格好をしてるんですよね。

――ファッション的にはDOBERMAN INCとも近いよね。ドーベルはサウンドプロデューサーだったBACHLOGICの作るトラックもUSとの直結を目指していたし、ファッションやアプローチも、**ザ・ディプロマッツ**みたいな当時のNYスタイルを意識していて。

R　その部分は以降に韻踏でも曲にもなっていくんですけど、OHYAさんはそういう部分に対してアンチな立場だったんですね。でもMINTさんはプリンプリンをつけたり、先端のファッションをしていて。だから「金品とチンチンをぶら下げてる新人王」なんですよ（笑）。ここのフレーズの時にMVでOHYAさんとMINTさんが向かい合ってメンチ切り合ってるんですけど、考え方や思想が完全に2人は対立していた（笑）。それで同じグループにいるのがすごくおもしろい。

ザ・ディプロマッツ
97年にニューヨークのハーレム地区で結成されたヒップホップ集団。主要メンバーはキャムロン、ジム・ジョーンズ、ジュエルズ・サンタナ、フリーキー・ジーキーなど。03年に1stアルバム『Diplomatic Immunity』をリリース。オーバーサイズで派手なファッションが特徴。通称はディプセット。

――ミンちゃんはいっとき「galaxxxy」っていう原宿系のファッションに傾倒していたりして。

R だからオシャレなんですよね。それは〈少年隊のニシキオリ以上に高い位置に居り／身だしなみはヒガシ並み〉ってリリックにも表れてます。

――そうかな～？（笑）。

R だって、あのイケメンのヒガシぐらい身だしなみに気を遣ってるんですよ？　でもそれに続くのが〈ウエクサは論外ですが〉……ヒドい（笑）。

――韻のために人を傷つけてる（笑）。

R 少年隊を勝手に仲違いさせてる（笑）。最後は組合長がビシッと締める構成もいいですよね。「I/N」っていうライムでワードを連結させていって。例えば〈Made in大阪／韻王様／引火寸前赤目の放火魔〉。「in」「韻」「引」で始まるんですけど、「大阪」「王様」「放火魔」に着地する。韻の位置をバラけさせることで、リズムやフロウにメリハリが出るし、さらに韻まみれやぞっていうことを頭に刷り込むためにわざと「いん」を2回言うと聴覚上「いんいん大阪」となる。そして、〈イントロから口うるせー奴／インベーダー乗っ

少年隊
85年に『仮面舞踏会』でレコードデビューした、錦織一清、植草克秀、東山紀之の3人組。20年にベストアルバム『少年隊 35th Anniversary BEST』がリリースされた。

CamScannerでスキャン

取り計画／インターナショナル／ワールドフェイマス〉っていう他の部分では固さもあるし、最後に〈韻踏合マザファッキン組合〉でビシッと締めるっていう。

――一曲の密度が高すぎた（笑）。では各曲に移りましょうか。

R 『critical11』の〝HEAD BANGER〟は、まさにHEAD BANGERZ色が、出た曲ですね。ラップはもちろん、ビートにもヤンチャなハード感が出てて、ローライダーっぽさがあるんですよ。このサビのピアノの音階が上がってくるのもちょっと不良っぽいでしょ？（笑）。そういうG-RAPっぽい雰囲気があるのに、ライミングは韻踏印で、ラップを口に出してみるとすごく気持ちいい。例えばHIDAさんの〈三か七転び八起き参加型のこの病気〉の「転び八起き」は「ぴゃーおき」と発音することで「この病気」と踏めるっていう。がっつり子音踏みじゃないけど、口に出すと踏める。その前の「三か七」と「参加型」でも踏んでいる。〈もうむせてきたんならto the Breakdown〉もHIDA印の踏み方ですね。このあとの遊戯さんはフロウの手数がすごい多いですよ。〈バース2熱くかつぐ58からドンパチY.O.U.G.I〉でのスピードの緩

G-RAP
「ギャングスタ・ラップ」のこと。80年代半ばに発生し、N.W.Aの大ヒットにより全米に広がる。ドクター・ドレーやスヌープ・ドッグ、2パックらが代表的。

急のように、意識的にいろんなフロウにチャレンジしてる。その後のインタビューで「韻踏で一番フロウが好きってよく言われます」って言ってたりしてて、それぐらい意識的に、言葉遊びっていう面もちゃんと大切にしつつも、音のノリとかグルーヴみたいなところを意識されてて。

――サーファーだからっていうのもあるんじゃない？　身体が波のグルーヴに……とか適当なこと言いますが（笑）。

R　サーフィンへのイメージが貧困ですよ(笑)。次はNOTABLE MCで〝ノータブルーム〟いきましょう。この曲でのAKIRAさんのフロウもおもしろいですね。なんというか、言葉にリズムがある。例えば〈ただただ危険と…疲れ癒すこれ肩叩き券〉の部分みたいに「ずらし」が超上手いですよね。「こう来たらこう」みたいなセオリー通りのところであえて踏まない。**ジェイ・Z**の韻よろしくちょっとずらすんですが、それがすごく上手い。

――それはトラックメイカーとしての感覚から生まれるものかもしれないね。

R　多分そうですね。ビートメイカーゆえのリズム変態というか、「ドラムはこう刻んでるから、ラップはちょっと変なところに韻を置いたほうがグ

ジェイ・Z
69年生まれのラッパー、実業家。ロッカフェラ・レコードの共同設立者の一人であり、96年に同レーベルより1stアルバム『Reasonable Doubt』をリリース。キャリア最大のヒット作『Vol. 2... Hard Knock Life』(98年)や『The Black Album』(03年)はじめ、数々の傑作を生む史上最大のラッパーの一人。

ルーヴが生まれるやろ」って意識からも、ラップが生まれてるのかな。だから韻の設置が意図的に気持ち良い不規則というか、規則的に不規則な場所にあることによって、「それ欲しかった！」というズラし方が生まれてて。そして一方ＯＨＹＡさんは、フロウをメロディに変換できるんですよね。後にソロになってだるまさん名義でアルバムを出した時に、その精度がもっと上がって。

——単にノリで気持ちいいメロディアスなフロウをするんじゃなくて、ちゃんとコードに当てたり、意識的にメロディとして、譜割りとしてフロウを組み立てるというか。

Ｒ　だからこそ、全編に渡って歌ったりする曲もすっと作れるんやろうなって。次はＭＩＮＴさんの〝転校生〟を聴きましょう。これはＭＩＮＴさんの「振って即落とす」というリリックの特性が全開に出たヤバい曲です（笑）。

——内容としてはナンセンスなんだけど、それで生まれるラップが気持ち良いんだよね。

Ｒ　例えば〈妻子どーなってても再始動〉って……いないんですよ、ミンちゃ

んに妻子は（笑）。

――映画『GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊』の清掃員のような、イマジナリー妻子（笑）。

R　そんな想像上の嫁と子供が実家に帰ってもラップをする、という気合いを感じます（笑）。そういう風にゲラゲラ笑いながら「そう来るか！」って思う曲もあれば、〈バリキモいけど馬力もイイ〉みたいなダジャレとして上質な、ＭＩＮＴさんが発明したんじゃないかと思うぐらいの踏み方がありますよね。

――「質のいいダジャレ」が連続する気持ち良さがあるよね。

R　〈指くわえて／You be quiet!〉。これはＬＩＴＴＬＥさんも同じ踏み方をしてますよね。

――そのキック・ザ・カン・クルーの〝sayonara sayonara〟のリリースが『critical1』の2カ月前だから、ほぼ同時に思いついたのかもね。

R　そして〈数ある中から選んだカジュアル身だしなみ少年隊のヒガシ並み〉。やっぱりだいぶヒガシにこだわってます！

『GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊』
95年に公開された劇場用アニメ映画。士郎正宗の漫画『攻殻機動隊』第1巻が原作で、監督は押井守。17年にアメリカでスカーレット・ヨハンソン主演で『ゴースト・イン・ザ・シェル』としてリメイクされた。

〝sayonara sayonara〟

02年にリリースされたキック・ザ・カン・クルーの7thシングル表題曲。

——ヒガシへのリスペクトがだいぶ高い（笑）。

R　〈マサチューセッツ州でまたチュー、セックス〉、「また」ということは、一回やってるという（笑）。〈ランドセル降ろしたら何もせず〉みたいに、〝転校生〟ということでちゃんと学校っぽいワードに戻ってくる構成もさすがです。

——ソロ作が『after school makin' love』だったり、学校にフェチシズムがあるよね。

R　MINTさん自身、自分のことを「転校生」って表現することが多くて。

——いわゆるアウトサイダー的な自我がある。

R　そこが韻踏におけるMINTさんの魅力の源にもなってるのかなって。

——イメージやビジュアルが浮かびやすいリリックでもあるよね。

R　支離滅裂ではあるけど絵が浮かぶから、聴いてて置いてけぼりにはならないし、意味不明さが逆にちゃんとアートフォームになっているのは、野性爆弾のくっきー！さんみたいな感じですよね。

——そのミンちゃんとAKIRAが化学反応を起こしてるのが〝ヤットデタ

『after school makin' love』

07年にリリースされたMINTの1stアルバム。

CamScannerでスキャン

マン』アニソンの〝**ヤットデタマン・ブギウギ・レディ**〟を下敷きにしてる曲だけど、この表拍とも裏拍ともつかないビートと、完全にディスコードになってる音感を「アリ」にした功績はすごく大きいと思う。

R　AKIRAさんはトラックやサンプルに民族音楽を取り入れて、それを格好良く構築するすごいセンスの持ち主ですよね。

――AMIDAでの〝般若心経RAP〟も「ラップはお経」って揶揄されるなら、そのお経をラップとして格好良くしようってことだし、プロデュースしたKREVAの〝**国民的行事**〟も、陳腐になりがちな「ヒップホップ×クラシック」をクールなものにするチャレンジだった。その反骨精神はヒップホップならではだよね。

R　同じアルバムの〝デンジャーレンジャー〟ではOHYAさんが〝ヤットデタマン〟のことをイジってるんですよね。

――〝ヤットデタマン〟でもミンちゃんがOHYAのことをイジってて、そのアンサーになってる。

R　キャラが出来上がってるからこそ、お互いの曲でイジり合ったりできた

・ヤットデタマン・ブギウギ・レディ
81年から82年に放送されたアニメ『タイムボカンシリーズ ヤットデタマン』のエンディングテーマ曲。鈴木ヒロミツが歌唱している。

・国民的行事

05年にリリースされたKREVAのメジャー6thシングル表題曲。モーツァルトの"アイネ・クライネ・ナハトムジーク"がサンプリングされている。キック時代含め、他者のトラックを使用してKREVA名義でリリースした初めての楽曲。

と思うんですよね。

――〝デンジャーレンジャー〟ではOHYAが〈NYかぶれのお坊ちゃん／解らないならば**ビタワン**食ってろ！〉って言ってるよね。これはおそらくDOBERMAN INCへの口撃で。

R 〈「野性的でない室内犬がSugぶったって素質ないけん／親御さん方少しつないでもらえまっか〜」これが堅実な意見〉と、固く踏みながらディスってて。一方でHIDAさんは（『ジャンガル』9曲目の〝BAHHHHN!!〟で）〈トモゲンはダチ〉って言ってて、みんなが同じ方向を向いて敵対意識を持ってるわけじゃないみたいですね。

――**韻踏とドーベルがイベントでフリースタイルバトルになった時**、ドーベル側はトモゲン（**TOMOGEN**）だけ出てきて、1対6みたいな状況になったんだけど、トモゲンがそこでバチバチに返したという話も。それで〈トモゲンはダチ〉に繋がるというのをHIDADDYさんがインタビューで語ってた。しかもそのイベントがキングギドラ〝公開処刑〟の大阪リリパだったという話もあって（笑）。

ビタワン
日本初の国産ドッグフード。

韻踏とドーベルがイベントで〜
ウェブマガジン「ZERO MAGAZINE」のインタビューでの、HIDADDYの証言が出典。

TOMOGEN
80年生まれ。13年にDOBERMAN INCを脱退。

R　因果が……（笑）。でも韻踏が20年にリリースした〝Street Survivors(Blood,Sweat,Tears&HipHop)〟で遊戯さんは〈ドーベルとのビーフも最後はピースで〉って言ってますから、解決はしたということでしょうね。そして〝critical11〟を聴いてもらいましょうか。

――この曲のSATUSSYさんはラップが上手すぎる！

R　〈はまれば即効ストーン、気持ち良さ羽布団／耳栓代わりにスコーンスコーンと突っ込む韻のスコーン〉みたいな、韻や言葉の繰り返しや倍速も含めたビートアプローチがシンプルに上手いんですよね。多分、洋楽的な価値観で上手いラップっていうのと近い並び方をするのが、韻踏だと遊戯さんとSATUSSYさん。

――SATUSSYさんはUS音源を中心にしたＤＪミックス『Leaks Of The Week』をリリースしてたり、現在進行系のヒップホップに対して分析的に関わっているのも影響してるのかもしれないね。

９人体制ラストの集大成

〝Street Survivors(Blood,Sweat,Tears&HipHop)〟

20年に配信リリースされた楽曲。

『Leaks Of The Week』

オンライン音楽ストリーミングサービス・Mixcloudにて更新されている。

CamScannerでスキャン

R　そして駆け足になりますが『ジャンガル』（09年）に入りましょうか。
このメンバーでの韻踏合組合というアートフォームが確立されて、全員の立ち位置がはっきり明確になった上で出来上がったアルバムが『ジャンガル』。まさしく初期の韻踏の完成版、集大成とも言えるアルバム。まずここでAKIRAさんのビートメイカーとしての才能が爆発するんですね。そのAKIRAプロデュースの『ジャンガル』を聴きましょう。

——冒頭のサンプルは見当もつかないけど、戦前の曲かも知れない。その後にリリースされる**『DBマーチ』**での**海原千里・万里**『道頓堀行進曲』使いのように、AKIRAは和モノや民族音楽からのサンプリングが印象的だけど、それがいわゆる飛び道具で終わらないで「笑える」と「格好良い」をちゃんと両立させるのが本当にすごい。

R　そのバランスはホンマにエグいですよね。ラップでは1ヴァース目のSATUSSYさんのヴァースはナチュラルにフロウがめちゃくちゃ気持ちよくて。〈Jungle Jungleラップスター／ちゃんとちゃんと日本語からマスター〉って、あわよくば全箇所踏んでるように聞こえるぐらい踏みまくってますよね。

『DBマーチ』

06年にリリースされたミニアルバム『VOL.3（赤盤）』収録の楽曲。

海原千里・万里

70年代に活躍した姉妹漫才コンビ。75年リリースの『大阪ラプソディー』が大ヒット。千里は現在の上沼恵美子。

〈インダストリアルな韻出すとリアルか？／インスタント無理あるただのダミー〉の長い韻ですね。9文字ぐらい踏んでるか？　超長い韻をドカンドカンと踏んでいて。

――「イン」にアクセントを付けてるのも素晴らしいよね。

R　最後は〈あばら折るアルバム／さらばHOLLA BACK!〉と、短い韻で畳み掛ける感じもシャレてるんですよね。続くOHYAさんは、完全にメロディを意識してラップを作り始めてますね。〈オレはラップするケダモノ／つまりライミングだけだもの〉みたいに、コードがしっかりとある状態でラップしつつ、〈森の木々の小枝から耳の肥えた方へ唄う。／高音域の声だから〉のように韻のテクニカルさも進化させてて。HIDAさんは〈まるでこのジャンルはジャングルやん／オレらはジャンクや、じゃグルやん／みんなもジャンガルじゃ上がるやん〉みたいに同音異義語にも磨きをかけてて。この時はフリースタイルをキレキレにやりまくってる時期やから、その言葉の連想がリリックにも反映されてるんちゃうかな。その後のAKIRAさんは〈なんで焼肉定食？／だって弱肉強食〉みたいに、完全に踏み切れへんけど、韻踏合組合としてはこうい

う韻もありですよっていうぐらいの余裕も出てきてるように感じます。

――タイトな韻だけが韻じゃないという。

R　それから〈What's Up? 大嫌いなニガ瓜〉。ここはいわゆる「Nワード」的なアプローチをすることへの批判、そしてそれは「何が売り」なんだってことを表してるんやないかな。

――「だいきらいな／にがうり」「だいきらい／なにがうり」ってことだよね。こういう「**ぎなた読み**」も韻踏は多用してて。

R　聴き込むほどいろんな意味が入ってることに気付かされます。遊戯さんは「ジャンガル」の母音「anau」で基本踏んでいくんですけど、その間にも〈Please 1バッズ〉〈ブリーフ短髪〉〈Freakたんぱく〉みたいに別の韻を挟み込んで。〈何発でも吸引ここに何泊？／自給自足GET、玉子、卵白〉あたりの跳ねたリズムというか、ストップ・アンド・ゴーみたいな緩急のあるフロウが遊戯さんの持ち味になってきてるな、と。

――〝What's tha Numba?〟は、この時期ほぼ戦線離脱していたERONEさんも参加してる、数少ない全員参加曲だね。

ぎなた読み
文節の区切りを間違えて、もしくは意図的に変えて読むこと。由来は「弁慶がなぎなたを持って」という文章を、正しくは「弁慶が、なぎなたを持って」のところを「弁慶がな、ぎなたを持って」と読んだことから。

R　俺の中ではかなりクラシックの上位に入る曲ですね。ＡＫＩＲＡさん節のど真ん中バウンスで。

——ＡＫＩＲＡの〈40分11000円〉は**サイプレス上野とロベルト吉野もサンプリングした**名フレーズですよ（笑）。

R　どこサンプリングしてんすか（笑）。それから忘れちゃいけない**"Kansaiiii"**。

——HIDADDYの「Kansaiiii」ってフレーズの発明はやっぱりすごいよね。

R　「ウェッサイ〜！」をサンプリングして「カンサイ〜！」って。それをＫＲＥＶＡさんがサンプリングして「イッサイガッサイ〜！」って言ったりとか広がっていって。

——ＫＲＥＶＡが韻踏を広めた部分は大きいよね。

R　EVISBEATSをプロデューサーに起用したり、HEAD BANGERZと一緒に**"マッハGOGO"**という曲を出してたり。やっぱりＫＲＥＶＡさんもフリースタイルをしてきた人やし、韻フェチやからこそ、そういう人からしたら、韻踏みたいに活きの良いライムをバンバン踏んでくる奴らが出たってい

サイプレス上野とロベルト吉野もサンプリングした
07年にリリースされた1stフルアルバム『ドリーム』収録の"徘徊ブルース feat. Mic大将"でそのフレーズがサンプリングされている。

"Kansaiiii"

『Trash Talk』（06年）、『入門盤』（13年）に収録の楽曲。

うのは嬉しかったんちゃうかなって。ただ『ジャンガル』を最後にこの9人体制は終了するんですよね。

――韻踏からOHYAが抜ける時にAKIRAも一緒に抜けたのが個人的にはすごくおもしろいと思って。NOTABLEはそれぞれかなりタイプが違う存在性があると思うんだけど、それでもこのタッグだから韻踏に参加したし、片方が抜けるなら、もう片方も残る理由はないと思ったというのは印象的だよね。そして同時にMINTも脱退して、『ジャンガル』以降は多くの人がイメージする、〝一網打尽〟を形にする6人体制の韻踏になっていくと。

R　そこでまた個性が明らかになるんですよね。MINTさんはより海外の最新トレンドに接近して。

――サウスのトラックを作品の中心に据える一方で、HyperJuiceとエレクトロな高速トラックでもラップしてたり。

R　最近も若いラッパーともコラボしてるし、音楽家として天才的なんですよね。OHYAさんもソロのだるまさんとして、より歌的なアプローチのアルバム『How to ride』のリリース、AKIRAさんはご存知EVISBEATSと

〝マッハGOGO〟

06年にリリースされた『くレーベルコンピ【其の二】～100%RAP～』収録のKREVA、CUEZERO、遊戯&HI-DAによる楽曲。

〝一網打尽〟

13年に配信リリースされ、7thアルバム『NOW』（14年）に収録された楽曲。〝一網打尽 REMIX Feat. NORIKIYO, SHINGO★西成, 漢〟（14年）も話題に。

して〝ゆれる feat. 田我流〟を制作したり。韻踏の残ったCHIEF ROKKAはおもしろい話をちゃんとラップにしていく「スタンダードB-BOYイズム」を打ち出し、HEAD BANGERZはよりストリート感のあるスタンスと、ユニットごとにも個性が出てきて。同時に全員がソロをリリースするようになるんですけど、SATUSSYさんは『THE NOVEL』のようなストーリーテリングものをリリースして。〝道頓堀通りストーリー〟とか……。

——DJ NAPEYの〝ホラー話 feat.ポチョムキン，SATUSSY〟に続く〝続ホラー話 feat.漢〟とか最高だよね。

R アレも必聴作です。そういう風に各々の道にここから進んでいくんですけど、そこに至るまでの一つの集大成として『ジャンガル』があると思いますね。『都市伝説』収録の〝前人未踏 feat.AMIDA、だるまさん、MINT〟で久しぶりにみんなが集合したのも最高やったんで、またそういう曲も聴きたいですね。

——最後に、ざっくりした質問だけど、関西の人間にとって韻踏ってどういう存在になるの？

HyperJuice
13年にfazerock-とharaの2人で結成されたサウンドチーム。湘南乃風やMINMIへの楽曲提供や、様々なアーティスト楽曲のリミックスを手掛けている。

〝ゆれる feat. 田我流〟

12年にリリースされたEVISBEATSの2ndアルバム『ひとつになるとき』収録の楽曲。

Ｒ　「韻踏が大阪を支配してる」っていう感じではないんですよ。でも自然と顔役になるし、人が集まってくるという。それには人柄やキャリアもそうやし、ラッパーの登竜門「ＥＮＴＥＲ」の主催や、大阪ヒップホップのハブであるＨＩＤＡさんの**「一二三屋」**の存在もデカいと思います。中学の頃、電車を乗り継いで初めてアメ村にヤマトとヒロムと行って、一二三屋でＣＤ買ってＨＩＤＡさんと握手してもらいましたから（笑）。テークエムもペッペＢＯＭＢと一緒に「一二三屋」に行ってポスターを買ったり。だから、梅田サイファーの奴はほぼ全員ヘッズやった時期から韻踏を聴いてたし、今仕事で一緒になったりするようになったのは、純粋にうれしいですね。

――その意味でも「ＥＮＴＥＲ」や「一二三屋」は大阪や関西のヒップホップを繋ぐ存在であると。

Ｒ　ＨＩＤＡさんは自分のことを「アメ村の村長」って言ってるんですけど、若い子らにラップを教えたり、リリックを書くのを手伝ってあげたりしてるんですよね。ＥＲＯＮＥさんは『ダンジョン』の審査員やったり、いろんなところで幅広く活動してるので、大阪の顔役やったり窓口であること

『THE NOVEL』

08年にリリースされたSATUSSYの1stアルバム。

DJ NAPEY

神戸のトラックメイカー／DJ。代表作である2ndアルバム『FIRST CALL』には韻踏合組合、茂千代、MISTA O.K.I、神戸薔薇尻などの関西勢のほか、関東からライムスター、ICE BAHNといった幅広いメンツが集結。

は間違いない。次のアメ村ストリートの顔役的な存在としてWILYWNKAが登場して、韻踏も安心しているんじゃないかと。もちろん、梅田サイファーも大阪ヒップホップの一翼になれたらなと思います。一翼といえば韻踏が『critical11』っていう1枚目のポッセカット的なアルバムを出したのと同じぐらいゴチャゴチャしてる『ビッグジャンボジェット』という飛行機系のアルバムを、僕も所属する梅田サイファーがリリースしました（笑）。

——ハハハ！　唐突な宣伝が！（笑）

R　いろんな思想、いろんなフロウ、いろんなラップの基礎がある人たちが集まったグループはやっぱりおもしろいと思うし、韻踏の存在はすごく革命的だったんですよね。そういう部分は梅田サイファーにも強く影響してると思いますね。

〝ホラー話feat.ポチョムキン、SATUSSY〟
03年にリリースされたDJ NAPEYの1stアルバム『ILL FINGER』収録の楽曲。R-指定は『関ジャム』でも同曲を紹介。

「一二三屋」
大阪・アメリカ村にあるHIDADDYが経営するアパレルショップ。

顔役的な存在
「アメ村はWILYWNKAです」とHIDADDYさんからも取材で伺いました（高木）。

飛行機系のアルバム
『critical11』の裏ジャケには飛行機の写真が載っている。また、アルバムタイトルの由来は、航空機の離陸後3分間と、着陸前の8分間を合わせた11分間が最も事故が多発するという「クリティカル・イレブン・ミニッツ」、また、リリース当時のメンバーが11人だったことから。

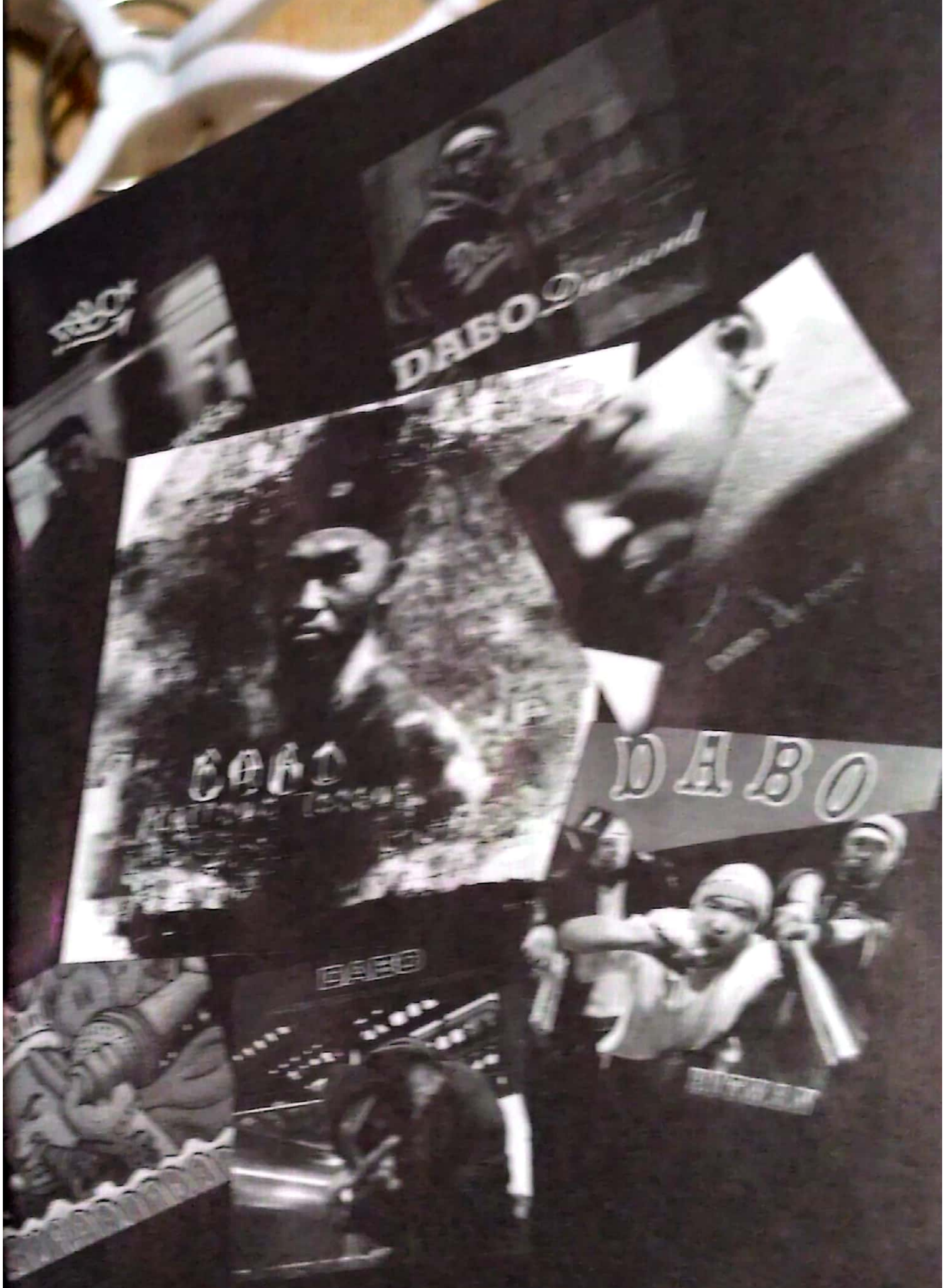
CamScannerでスキャン

第5章

DABOがライムで示す「粋」の構造

2021年12月9日 | 高田馬場BSホールにて開催

CamScannerでスキャン



PROFILE

DABO

75年生まれ。99年に『Mr.Fudatzkee』でインディーズデビュー。00年には新設されたDef Jam Japanの第1号アーティストとして契約し、翌年にメジャーデビューシングル『拍手喝采』、1stアルバム『PLATINUM TONGUE』をリリース。その後、『HITMAN』(02年)、『DIAMOND』(06年)とコンスタントに作品を発表し、これまでに5枚のアルバムと1枚のベストアルバムをリリース。09年には『札と月』(トランスフールドデジャパン)を刊行。ソロ活動のみならず、NITRO MICROPHONE UNDERGROUNDの一員としても活躍。自らBABY MARIO PRODUCTIONというレーベルを主宰し、イラストレーターや文筆家としても活躍している。

ひと目でわかるラッパー感

——11回目の『Rの異常な愛情』が始まりました。約10カ月ぶりの開催ですね。

R　いろいろ……ちょっと忙しくて（笑）。今回はＤＡＢＯさん特集、その中でも今年リリース20周年を迎えた『PLATINUM TONGUE』（01年）を解説できればと。

——まずＲくんがＤＡＢＯさんの作品に出会ったきっかけから話を始めましょうか。

R　中学生でヒップホップを聴き始めた時に、ツタヤで「めっちゃラッパーやん！　聴くならこれやろ！」ってジャケット借りしたのがＤＡＢＯさんの**『DIAMOND』**だったんですよね。ビジュアルからもう完全に当時のヒップホップファッションを体現してて。

——『DIAMOND』はＤＡＢＯさんのレーベル「BABY MARIO PRODUCTION」の制作だけど、それ以前にリリースされた『PLATINUM TONGUE』**『HITMAN』**は**Def Jam Japan**からのリリース、つまりアメリカの最重要ヒッ

『DIAMOND』

03年にリリースされた3rdアルバム。

『HITMAN』

03年にリリースされた2ndアルバム。

プホップレーベルの日本支部からのリリースだったんだよね。

R そのレーベルと契約した第一号がDABOさん。**Def Jam**という看板を背負ったアーティストとして、「俺を見たらヒップホップがわかるようにしなくちゃいけない」みたいな、見た目もラップも音の感じも「これぞヒップホップ!」とわかるようなキャラクターにしていこうと当時は思ってたというニュアンスの話をインタビューでもされてて。その戦略にまんまと俺は乗せられて、CDを手に取りました(笑)。『DIAMOND』で最初に心持ってかれたのは"ワカホレ(Get Busy)"や"スーパーバックシャン(Yes,Sir)"。"ワカホレ(Get Busy)"はまずキャッチーなフックにハマりましたね。すごいラッパー的なサビというか、フックの作り方だと思うんですよ。

——ラッパーとしてそれを解読すると?

R 「ビートの上ネタのメロディに合わせて歌ってる」んですよね。それは『PLATINUM TONGUE』では"O-RE-BA-NA"ですでに発露されてるんですが、それはロックやポップスからするとかなりヤンチャなメロディの作り方だと思うんですよ。

Def Jam Japan
00年に設立。S-WORDやTOKONA-X、A-ら在籍していた。現在はDef Jam Recordingsの日本支社として、AK-69やBTS、SWAYらが所属。

Def Jam
84年にリック・ルービンとラッセル・シモンズによって設立されたヒップホップ・R&Bを専門とするレーベル。パブリック・エネミーやLL・クール・J、ビースティー・ボーイズらを擁していた。現在はジャスティン・ビーバーやリアーナ、ロジック、ナズらが所属。

——ロックに例えれば、ギターで弾いてるフレーズを、同時にヴォーカルも歌うことに近いのかな。そういう曲もあるけど、普通は違うメロディを歌うことで、そこにハーモニーを生むことが多い。

R　「シンガーに比べると、ラッパーはメロディを自在に操る人たちではない」という前提を立てると、もともとビートで鳴ってるメロディに合わせて歌うというラッパー的な方法論は、Mummy-Dさんが言う「音楽家ならざるもの」ならではの発明なんかな。そういう「音楽一歩手前で、音楽を放棄する」感じが、ヒップホップの格好良さに通じるとも思うんですね。これを上手に言語化したのはＤＪ松永なんですけど、シンガーは歌のそもそもの上手さやスキルがあるから、歌唱力でメロディや作品のクオリティを高めることができる。だけどラッパーは歌唱力がないから、歌いやすかったり、頭に残るメロディラインで勝負する必要がある。

——「ヴォーカル力」を補うために、強烈なメロディや歌詞が必要になると。

R　だから、結果的にラッパーのフックは、味付けが濃かったり、印象的なものになるんじゃないかと松永が言ってて、それはこの曲のフックにも通じ

ると思いますね。そしてヴァースの高度さも「ずっと同じフロウなんだけど、内容は変わっていく」という〝ワカホレ〟のヴァースによく現れているんじゃないかと。〈NITROメンバーメーン〉〈リメンバーメーン〉とか、〈ふてってなんかられっかってんだメーン〉という同じ言葉と音だけでライムを繋げつつ、〈鉄仮面〉〈天まで〉〈どこだって面バレ〉みたいに大きい韻も踏んで、手数の多さを見せつけてますね。Zeebraさんの〝MR.DYNAMITE〟の「奴ら」踏みにも通じますね。この曲で〈フローは連打系フックは演歌系〉と言ってますけど、まさにそれは、この手数の多さとフックの爆発力を表現してますよね。

——では〝スーパーバックシャン（Yes, Sir）〟は？

R　プレイボーイな曲はDABOさんの十八番だと思うんですけど、まず**「バックシャン」**という表現ですよね。これはどうやら大正時代の流行語なんですよ。

——最近またリバイバルして女性誌で使われたりするけど、「後ろ姿が美しい」という意味だね。

バックシャン
英語の「back＝後ろ」と、ドイツ語の「schön＝美しい」が組み合わされた言葉。旧制高校のエリートが使い始めたとされる。

R　そういう古の流行語と、海外の最先端のヒップホップとをガツンと混ぜるのもDABOさんならではの良さというか。当時の最先端のUSヒップホップのスタイルを、ビート的にもラップの乗せ方的にも取り入れるのがこの当時のDABOさんの特徴だと思うんですけど、そこに「和のお出汁」というか、和を滲み出させるのも同時に、DABOさんのラップじゃないかな。そしてこの描写力ですよね。DABOさんがモテまくる、遊びまくる曲なんですが、その光景が目に浮かびます。

――この曲は女子高生、クラブで遊んでる女の子、人妻の3人と、DABOと思しき男性の関係がテーマになってるよね。

R　3人の女性の解説が曲の冒頭であるんですよね。例えば女子高生のキョーコだったら、「黒髪の少女」とか「ギャル雑誌デルモ」というリリックが最初にくるから、『GTO』の雅みたいな感じかな？　じゃじゃ馬的な感じなんかな？」みたいなイメージが湧く。3ヴァース目の人妻イズミもすごいですね。〈彼女の名はイズミ　いわゆる行きずり　名の如くシーツはずぶ濡れグリズリー〉……要は爛れた関係というかね。〈日影の身ならNo.

『GTO』
97年から『週刊少年マガジン』に連載された藤沢とおるによる漫画および、98年に放送された反町隆史主演、松嶋菜々子がヒロインを務める漫画原作のテレビドラマ。

CamScannerでスキャン

リスキー〈I'm A Mothafuckin' P-I-M-P フダッキー〉なんかは50セントの"P.I.M.P."を持ってきたりして。この〈日影の身なら〉という表現が入ってくるのもDABOさんの妙ですよね。

──「公にできない」ことを表す慣用句だけど、なかなか使わない言葉だよね。

R　でも俺はアウトローやから、人妻とこういう遊びをしても大丈夫だぞって。このご時世、ラッパーがこんなことをしたらもう……（笑）。

──人妻と不倫でアウト、女子高生でお縄ですよ（笑）。

R　〈ダンナは出張中はるか遠くおフランス　知らぬが仏さ自慢のワイフは〉は、「フランス」と「仏」が掛かってるんですよね。

──気づかなかった！

R　俺も中学の時は気づかんくて。『ANN』で紹介する時に、改めて歌詞を洗ってて〈おフランス〉〈知らぬが仏〉……あぁっ！みたいな（笑）。何年越しかに気づく上手さというか、他の上手さに気を取られてて「こんなとこにもあったんや！」みたいに、DABOさんの曲には、しがんでもしがんで…、いろんな仕掛けが凝らされてるんですよね。中学生の時

"P.I.M.P."

03年にリリースされた50セントの1stアルバム『Get Rich or Die Tryin'』収録の楽曲。

CamScannerでスキャン

はただ「なにこの曲！　エロっ！」ってフガフガしてただけでしたけど（笑）。俺の名誉のために言うと、俺はフガフガしてただけなんですけど、梅田サイファーのたまこぅは、初めてラップで勃起したのがこの曲（笑）。

――「俺の名誉」と一緒に、たまこぅくんの名誉も守ろう（笑）。

R　あいつは著作権フリーみたいなもんやからいいんです（笑）。しかもそういうエロさも描写力の高さも「やったろう！　どうですか！」っていう感じじゃなくて、自然と生み出されたようなスムーズさがあるし、それがDABOさんのすごさの根源じゃないかと。これが俺のDABOさんとのファーストコンタクト、出会いでしたね。

――『PLATINUM TONGUE』の話に入る前にDABOさんの音楽的なキャリアをさらうと、まずDABOさんは**DJ HAZIME**さん、**SUIKEN**さん、**K-BOMB**さんで**CHANNEL5**というユニットを結成するんだけど、音源はリリースされていなくて。世の中的にDABOという存在が知れ渡ったのは、97年にSHAKKAZOMBIEの〝**共に行こう（VERSION PURE）**〟に**GORE-TEX**、**MACKA-CHIN**、SUIKEN、DABOが客演して、その

DJ HAZIME
75年生まれのDJ、音楽プロデューサー。04年に豪華客演陣を招いたアルバム『AIN'T NO STOPPIN' THE DJ』をリリース。アパレルブランド・DOUBLE HARDのディレクターも務める。

SUIKEN
75年生まれ。00年にニトロメンバーの中からいち早くシングル『ALKMAN』でソロメジャーデビュー。01年には1stアルバム『SUIKEN PRESENTS SIXTEEN STARS』をリリース。

MVも作られたのがきっかけじゃないかな。**少なくとも僕はそうでした。**

R 初お披露目という感じなんですかね。

——GORE-TEXさんはMUROさんの**〝三者凡退〟**に客演してたり、MACKA-CHINさんは「さんピンCAMP」でMUROさんのサイドキックをしてたから存在は知ってたけど、SUIKENさんも**〝カモ狩り〟**を出したか出さないか、BUDDHA BRANDに客演する前で、DABOさんはなんの作品も出してないから、正直最初は「誰だ?」という感じだった。だけど曲を聴いて「超格好いいじゃん!」って驚いた記憶があるな。

R まだ自分の作品をリリースしていないタイミングで、その時のシーンを代表するアーティストに呼ばれてヴァースを蹴る緊張感がこの曲にもありますよね。カマさないと呼んでくれた先輩の顔に泥を塗るし、「ここで一発逆転」みたいな色気もあって。それこそ**バスタ・ライムス**もそんな感じでしたよね。

——**ア・トライブ・コールド・クエスト〝Scenario〟**での客演が一気にスターダムに上がる契機になって。

R DABOさんも〝共に行こう〟でのライムの固さやったり、意味の数珠

K-BOMB
97年に結成されたTHINK TANK、00年設立のレーベル・BLACK SMOKER RECORDSの中心人物。KILLER BONGをはじめ様々な変名を使い分け、灰野敬二やテンテンコなどヒップホップ以外の人脈とのコラボも多い奇才アーティスト。

CHANNEL5
95年頃に結成。再結成後に作られた楽曲〝Return of the Channel 5〟が『AINT NO STOPPIN' THE DJ』(04年)に収録。

CamScannerでスキャン

繋がり感、ボキャブラリーの豊富さに「こいつ何!?」みたいな衝撃があったと当時から聴いてる人はよく言いますね。リリック最後の〈共に行こう今夜もナイヤビンギ〉って歌詞もすごい。太鼓に合わせて**ラスタファリズム**の賛美歌を集団で歌う、レゲエの源流の源流みたいな集いを「ナイヤビンギ」というんですけど、〈ヒップホップの夜明けが近い〉とSUIKENさんが言っているように、日本のヒップホップシーンをもっと大きくするために「共に行こう」という曲に通底する意識を、DABOさんは〈今夜もナイヤビンギ〉と表現するという。まさに革命前夜、ここから何か起こるという予感をナイヤビンギとして締める展開が素晴らしい。

——ナイヤビンギは輪になって歌う形式だから、それはサイファーとも通じるし、その意味を掛けたのかもしれない。そして**キエるマキュウ〝第三ノ忍者〟**への参加があり。この曲は**MAKI THE MAGIC**さんの〈俺は直球勝負投げる球カーブ〉という、「どっちなの!?」という最高のパンチラインに耳が行きがちですが（笑）。

R　ラッパーにはこういうところあるんですよ。「タバコ止めます」って記

「共に行こう（VERSION PURE）」

97年にアナログリリースされたSHAKKAZOMBIEの『虹／共に行こう』B面収録の楽曲。1stアルバム『HERO THE S.Z.』（97年）シークレットトラックとしても収録
21年には「共に行こう CDS Version Pure 2021 Feat. VaVa, JU
EE, BIM, in-d」も発表された。

GORE-TEX

75年生まれ。ニトロ結成の前で
6 97年に『WATER PROOF』をアナログリリース。04年にはソロアルバム『RELOAD』を発表した。

CamScannerでスキャン

者会見してるのにその最中にタバコを吸い始める勝新的というか（笑）。で、キエるマキュウ自体がパンチラインの応酬のようなユニットなんですけど、その曲のトリをDABOさんが任せられるんですよね。

——先輩2人の忍者設定が曲の中でブレていく中で、DABOさんだけ忍者設定を守る、仕事人的なラップが素晴らしい（笑）。

R　DABOさんの重要な役割としてその側面もありますね。ニトロも楽曲のテーマと関係ないことを他の7人が言ったりする場合が割とあるんですけど、DABOさんは理路整然とテーマに沿ってうまいことをラップして、その曲の意味をわかりやすく伝える役割を担われてて。ただ、単にバランサー的な役割に収まらず、テーマを踏まえた上でのリリックがめちゃくちゃおもしろいのが最高なんですよ。この〝第三ノ忍者〟だと〈抜き足差し足千鳥足　Baby　お前の夢にチン入　まるで反町〉というラインでは、〈千鳥足〉〈反町〉って踏みつつ、〈お前の夢に〉「侵入」「闖入」じゃなくて〈チン入〉なんですよね。いろんな意味で、別のものまで入ってくるという（笑）。〈まるで反町または岡村　とにかくタカシ系な1900飛んでナイナイ〉の、この

MACKA-CHIN
74年生まれ。ラッパーとしてだけでなく、トラックメイカー、DJ、音楽プロデューサーとしても活動するニトロのブレイン的存在。01年にソロ1stアルバム『CHIN-ATTACK』をリリース。22年12月に最新アルバム『muon』をリリース。

少なくとも僕はそうでした。
YouTubeはまだ存在していませんでした（高木）。

〝三者凡退〟

96年にアナログリリースされたMUROの楽曲。

フリースタイル的な言葉の数珠つなぎは最高ですね。〈タカシ系〉って何？という（笑）。

——2人しか出てこないのに（笑）。

R　〈1900飛んでナイナイ〉、これは99年のリリースと岡村隆史さんのナインティナインを織り込んで。そこに掛ける韻が〈**ドープライン栽培**　まるでナイタイ　下世話な広辞苑　MCども連れ去る高次元〉。

——「ナイタイ」は『ナイトタイムス』というゴシップ／エロ／ギャンブルのみで貫かれた週刊の新聞のことで。まさに下世話の広辞苑だった（笑）。

R　韻の必然性から、内容がどんどん脱線していく構成にも、ラップの面白さ、うまみがめっちゃ詰まってるんですよね。〈俺はチョンマみたいにべろ出しトンズラ　糸目の端っころ引っかかったお前のアホ面〉みたいに、DABOさんは自分のことをアニメとかカートゥーンコミックみたいにデフォルメして書くのも得意技なんです。

——「べロ出しチョンマ」という昔話のキャラに自分をなぞらえてるよね。

R　そう。そしてDABOさんは自分のことを結構「糸目」って言ったりす

・カモ狩り・
97年にカセットテープでリリースされたミックステープ『DJ HAZIME VOL.2』収録のHuster Bose（DEV LARGEの別名義）＋SUIKENの楽曲。OZROSAURUSの"狩人の唄"（97年）で客演したZeebraのヴァースを深読みし、自らがディスされたと感じたDEV LARGEが相手を口撃している。後に勘違いだったことが判明し、和解。

バスタ・ライムス
72年生まれ。パブリック・エネミーのツアーでオープニングアクトを務めたリーダーズ・オブ・ザ・ニュースクールのオリジナルメンバー。96年に1stソロアルバム『The Coming』をリリース。骨太な高速ラップが特徴的。

CamScannerでスキャン

るんですけど、「切れ長の目」みたいに格好良く言うんじゃなくて、自分をアニメっぽくビジュアライズしている感じがあるんですよね。

——DABOさんが絵が上手いこと、「要素を捉える」ことに長けてることが、ビジュアル的なリリックに繋がってるかもしれない。

R 『BLAST』の記事でもDABOさんが自分で挿絵を描いてたりもするし。

——MACKA-CHINさんとのユニット・**MABO**のキャラクターとかも自分で書いてるよね。もう一曲、この時期の重要な客演曲としては**MICROPHONE PAGER**のP.H.FRONさん、Mummy-Dさん、DABOさんでの**“3大ザ HARDWAY”**。「ペイジャーっ子」「ライムスターっ子」と自認するDABOさんが、その両名と一緒に曲を作るというのは、一種のサクセスストーリーだと思う。

R そういう風に客演仕事でどんどん頭角を現しつつ、99年にソロ**『MR. FUDATZKEE』**でデビュー。そしてNITRO MICROPHONE UNDERGROUND**『NITRO MICROPHONE UNDERGROUND』**のリリースですよね。

ア・トライブ・コールド・クエスト
Qティップ、ファイフ・ドーグ（16年死去）、アリ・シャヒード・ムハマド、ジェロビ・ホワイトの4人で結成。90年に1stアルバム『People's Instinctive Travels and the Paths of Rhythm』をリリース。デ・ラ・ソウル、ジャングル・ブラザーズに続くネイティブ・タンの主要グループだった。

“Scenario

91年発売の2ndアルバム『The Low End Theory』収録の楽曲。バスタ・ライムスだけでなく、リーダーズ・オブ・ザ・ニュー・スクールのチャーリー・ブラウン、ディンコ・Dも客演で参加。

CamScannerでスキャン

——ニトロの登場がどれだけすごかったかは、今でいえばBAD HOPの登場に近いのかな。本体の登場までそれぞれのメンバーがいろんな場所で話題を集めつつ、満を持して待望の登場を果たすという。

R　スキルや才能も持ち合わせた奇跡的なメンバーが集った、まさしく時代に選ばれしグループ。

——リリース年はどのメディアもヒップホップの中で年間一位にしてたし、『BLAST』の表紙を1枚のアルバムで2回やってて。もちろん広告費だったりいろんなファクターはあるとはいえ、それだけリスナーが熱狂してたということは間違いない。

R　ニトロの持つ「得体のしれない集団感」は、やっぱりヒップホップならではの格好良さですよね。ジャケットも顔がわかりそうでわからない絶妙な感じで。

——ニトロは先行してリリースされたアナログの表面には顔が写ってないし、CD**『NITRO WORKS』**に至っては盤面に何も書いてない、つまり再生面とレーベル面の区別すらつかないという狂気の仕様で（笑）。

ラスタファリズム
30年代に生まれたアフリカ回帰を願うジャマイカの思想・運動のこと。

キエるマキュウ
98年に結成されたMAKI THE MAGIC、CQ、ILLICIT TSUBOIによるユニット。13年のMAKI THE MAGIC死去の翌年に、『明日に向かって撃て!』と『THE SECRET OF KIERUMAKYU 大リーグボール2号のひみつ』の2枚のベストアルバムがリリースされた。

CamScannerでスキャン

R　DABOさんがインタビューで「ニトロの何が革命的だったかというと、韻に縛られることなく格好良いラップができる8人が集まったことがすごかった」と話してて。基本的には日本語のライムや文法の上で「日本語のラップ」が成立するわけですけど、そういうのを飛び越えて「聴感的に格好良かったらええんちゃうの？」という、フロウ主体で格好良いラップができるということをニトロが提示したと。たしかにそれがそういったスタイルの人たちが増えるきっかけになったんじゃないかと思いますね。

——ヒップホップファンだけじゃなくて、ミクスチャーとかロックのファンもニトロに飛びついたのはそれが理由でもあるだろうね。

R　同時に、DABOさんはそういった聴感も大切にしつつ、ちゃんと理路整然としたライムや言い回しを、グループの中でひときわ工夫したというところがあったと思うんですよね。ただニトロは、当時のサウンド的な流行は取り入れてないんですよね。

——どちらかといえば80年代後半から90年代前半のゴールデンエイジ／ミドルスクール期のヒップホップに近いよね。〝Mr.Fudatzkee〟もJB's〝The

---

〝第三ノ忍者〟

00年にリリースされたキエるマキュウの1stアルバム『TRICK ART』収録の楽曲。

MAKI THE MAGIC

DJとしてキャリアをスタートさせ、トラックメイカー／プロデューサーとしてMICROPHONE PAGERの〝病む街〟(95年)を手掛ける。98年にはキエるマキュウの〝NANJA〟で初めて音源でラップを披露した。13年に46歳で死去。

ドープライン栽培

『めちゃイケ』の前身TV番組『とぶくすり』のことを指しているのかもしれない(R談)。

Grunt〟が元ネタのオーセンティックなものだし、〝SUPADONDADA〟はレゲエっぽいスロウビートで。

R それなのにDABOさんは01年リリースの『PLATINUM TONGUE』ではバウンスも含めた流行のビートに乗ってるんですからすごいですよね。

——「〝SUPADONDADA〟には倍速バージョンもある」とインタビューでは話していて、当時のトレンドである**チキチキ系**へも意識はすでに向いていたのかもしれない。では『PLATINUM TONGUE』本編の解説に入りましょう。このアルバムはDef Jam Japanとソロ契約第一号でのリリースであり、**レッドマン**との2マンライブも行われたり、その期待度は尋常じゃなかった。

R アルバムのトラックメイカーも敏腕揃いなんですよね。DJ CELORYさん、LAMP EYEの**DJ YAS**さん、**DJ MASTERKEY**さん、Mummy-Dさん、**D.O.I**さん、**CQ**さん……。

——そしてMACKA-CHINさん、**DJ WATARAI**さん、DJ HAZIMEさん、**MR. ITAGAKI**さんという宇田川のイツメン勢。海外勢は**P.KING**だけ。時代的に海外のトッププロデューサーのトラックを、言い方は悪いけど買い付けて箔

MABO
03年にラッパ我リヤ主演の映画『3on3』のサウンドトラック収録の楽曲〝カスタマイズ〟で参加。05年にアルバム『テラコスタ』をリリース。

MICROPHONE PAGER
92年にMURO、TWIGY、P.H. FRON、MaSaO、DJ GOで結成。93年に〝改正開始〟を発表。95年には『DON'T TURN OFF YOUR LIGHT』をリリースし、活動を停止。08年に長い沈黙を破り復活した。

〝3大ザ HARDWAY〟

00年にアナログリリースされたP.H.の『Kabaki '92／3大ザ HARDWAY』収録の楽曲。

をつけるということもできたと思うけど、それをしないでこのサウンドクオリティを出したことは、日本のシーンが一段階変わった象徴でもある。

R　成り立ちがNASの『Illmatic』に近いなと思ったんですけど、インタビューでDABOさんもそう発言されてて。「『Illmatic』を作ろうとした、『Illmatic』を作ってくれと周りから言われてた」と。

――『Illmatic』には当時のNYの超一線級のトラックメイカーが横断的に参加したのと同じように、『PLATINUM TONGUE』にも東京シーン全体からプロデューサーが参加してて。

説得力しかない「オレバナ」

R　そこからもいかに期待されてたかが伺えますよね。では本編の話に入りましょうか。まずはD.O.Iさんプロデュースの〝Platinumintro〟。

――この曲は〈new generation begin〉と宣言するけど、それは「今までのシーンは旧世代」ということと同義だから、かなり気合いの必要な発言。Rくんだったらデビューする時に言える？

『MR.FUDATZKEE』

99年にアナログリリースされた初のソロ名義楽曲。

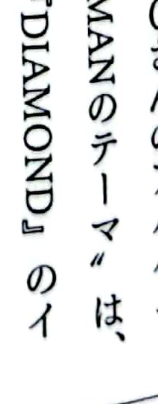
『NITRO MICROPHONE UNDERGROUND』

00年にインディーズリリースされるも、瞬く間に完売。同年にDef Jam Japan設立後初の作品として再発された。

R　俺はちょっとそのタマじゃないですね（笑）。DABOさんのアルバムはイントロからおもろいんですよ。『HITMAN』の〝HITMANのテーマ〟は、ヒットマンの足音がコツコツ聞こえて銃声が鳴るとか、『DIAMOND』のイントロの〝多面体〟は、HAZIMEさんがDABOさんの別名、二つ名をずっと叫んでいくという。「DABO A.K.A. MR.フダツキ！　A.K.A. PLATINUM TONGUE!　A.K.A. HITMAN!　A.K.A. BIG DICK Bruner!」と10個ぐらい言ってますよ（笑）。そして〝MIC CHECK〟ですが、（曲を聴きながら）上手いですねぇ……。DABOさんのラップはスムースやし、滑らかすぎるから、すごさを見逃しちゃうんですけど、分析するとんでもないライミングなんですよね。〈マチガイナイ／お前のスケじゃ扱えない／危険人物いざ意見陳述／チョーパン一発新天地進出〉。〈危険人物〉〈意見陳述〉は、もっと強調してもいいぐらいのロングライムなんですけど、それをもったいぶって使わないんですよね。よくやりがちなのは「なんとかかんとか、危険人物／なんとかかんとか、意見陳述」みたいに。

——置き方でそのライムを強調してしまうと。

『NITRO WORKS』



99年にリリース。〝Bambu〟〝Smokin' Blaff〟〝Otogheebanasee〟〝Requiem〟の4曲を収録。

JB's

70年から80年代初頭に活躍した、ジェームス・ブラウンのバックバンド。Pファンクの主要メンバーであるブーツィー・コリンズが在籍していた。

CamScannerでスキャン

R　だけどDABOさんは〈危険人物いざ意見陳述〉と当たり前みたいにサラッと使うんですよ。その後も〈新天地進出〉とライム的に同じ言葉を持ってきてさらに聴感を刺激する。でも、そんなすごいライムをしたその後に、〈どいたどいた俺様の御成り／夜風にさらす特大御稲荷〉……キンタマ出してるんすよ（笑）。

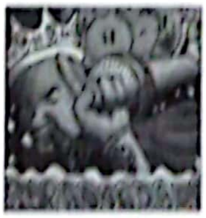
――「どいたどいた」って、人をどかすほどデカい（笑）。

R　クライムサスペンス的な流れから、いきなり『平成狸合戦ぽんぽこ』みたいな感じに（笑）。海外にもこういうチョケはあると思うんですけど、「御稲荷」という表現に、和のわびさびや奥ゆかしさを感じますね。そしてその後〈一口いかが？　お嬢さん〉……食わせようとしてますから（笑）。耳で聴いたらあんなにクールな声なのに、絵を想像したら相当おもろいですよね。

――Creepy Nutsを名乗るアーティストが、人前でキンタマの話で笑ってるというのも相当異常事態だけど（笑）。

R　たしかに（笑）。そして〈食わにゃ損々／脱ぎなThongThong／泉コンコン／振るう根棒〉。音的には「on／on」という韻を連打してるんですけど、

『SUPADONDADA』



00年にリリースされた2ndシングル収録曲。CDのカップリングに、DEV LARGEプロデュース"Mr.Fudatzkee (Let Me Diss'Em One More Time, Kaz! Mix)"も収録されている。

チキチキ系

90年代後期以降のアメリカを代表するプロデューサーであるティンバランドの変則的な高速ハイハットの打ち込み音が「チキチキ」と聞こえることから広まった俗称。

この〈ThongThong〉は、R&Bシンガーのシスコの"Thong Song"からの引用なんですよね。

――「Thong」はTバックとか紐パンのことで、それを脱がすぞって曲だね。

R　だから「滾々（こんこん）」という日本的な表現と、どエロR&Bをサンプリングして混ぜるという。この引用のバランス感覚がすごくDABOさん的。最先端の音楽や曲名、ラインを持ってきつつ、それを日本のボキャブラリーと上手く混ぜるバランスがホンマにDABOさんの一番の特徴的なところですね。そして〈ビッチ　パパラッチバイバイキン／戸をバタン顔面に刻むソール・バターーン〉。

――「蹴る」とは言わないで、「蹴っている」ことがここで表現されているのもうまい。

R　話も全部筋が通ってるんですよ。「ヴァースを蹴る」から、最後に「キックする」という意味合いで終わる。「御稲荷」もDABOさんの「MIC CHECK」に意味がつながる（笑）。

――くだらね～（笑）。

レッドマン
70年生まれ。EPMDのエリック・サーモンに見出されツアーに同行しラッパーデビュー。92年に1stアルバム『Whut? Thee Album』をリリース。盟友であるウータン・クランのメソッド・マンとのコラボ作品も話題に。

DJ YAS
71年生まれ。DJ KRUSHの付き人としてキャリアスタート。LAMP EYE、雷のトラックメイカー、ライブDJとして活動。レーベル・KEMURI PRODUCTIONSを設立した。

DJ MASTERKEY
80年代後半にニューヨークに渡り、現地でDJ経験を積みBUDDHA BRANDの一員として活躍。HARLEMなどでのイベント主催、MIX CDのリリースなどで日本のクラブシーンを盛り上げる。

CamScannerでスキャン

R 素晴らしい〝MIC CHECK〟でした（笑）。そして〝マチガイナイ！〟。この曲は聴かず嫌いにも無理やり俺のラップを聴かせに行くぞみたいなリリックなんですけど、〈くわえブランツで颯爽とお出まし／当たると痛えぞ寝てろ骨無し／（Knock .Knock）（ピンポン、ピンポン、ピンポーン）（どちら様？）D-A-B-O お前こそ何様 Ha?〉は、〈ピンポン〉と〈D-A-B-O〉の連携も小気味良いんですけど、そもそも主張としてすごい。ピンポン鳴らして「どちら様？」って出てきた人に、「D-A-B-O お前こそ何様 Ha?」ですから（笑）。

――そのうえブランツくわえてるんでしょ？ 危険人物すぎるよ！（笑）

R そのぐらいの勢いでお前の鼓膜に侵入するぞ！というね（笑）。〈動くな／観御さんに気の毒だ／それに夜中起こされるドクター〉、ここらへんとかも単に「やっちまうぞ」と言うんじゃなくて、持って回った表現するのがDABOさんらしいし、粋なんですよね。

――**古今亭志ん生**が「大きなナス」を表現するのに「暗闇にヘタつけたような」と表現したけど、それに通じる粋さ。

R 「ラップって粋なもんじゃないですか」とインタビューでも話してるし、

D.O.I
日本語ラップ黎明期からミックスエンジニアとして数多くの作品に携わる。プロデューサーとしてのトラック提供、リミックスなども手掛けてきた。Creepy Nutsの作品にも関わっている。

CQ
BUDDHA BRAND、キエるマキュウとして活躍。19年には1stソロアルバム『NAUTILUS～恋する潜水艦～』をMUTAのプロデュースのもとリリース。YouTubeチャンネル『実録CQ』主宰。

DJ WATARAI
73年生まれ。〝つつみ込むように…（DJ WATARAI REMIX feat. MURO）〟（98年）をはじめ、多くのヒップホップ、R&B楽曲のリミックスやトラック提供を行う。

その粋さはDABOさんのマンガ表現っぽい書き口とも通じるのかな。例えば〈次の瞬間目から火花／ゆっくりと定位置に戻る俺のティンバーランド〉というラインの、顔面蹴られて目から火花が出て、スローモーションでDABOさんのティンバが定位置に戻っていくという表現なんて、マンガっぽいじゃないですか。絵が浮かぶというか。

——誇張の仕方が過剰なんだけど、それこそが面白みに通じてる。

R 〈俺のメガトンパンチラインドランカー〉の表現もいいですね。メガトンパンチを打つ、メガトンなパンチラインを書くってことに加えて、いろんなパンチラインを喰らいまくって、自分の脳もドランカーにもなってしまっているという。もともとDABOさんはペイジャーやライムスターが大好きなヘッズで、そういう意味での「メガトンパンチドランカー」、いろんなパンチラインを喰らってきた、俺もそのひとりだ、みたいなことを言ってるんですよね。それもラッパーならではの、言い得て妙な表現というか。

——このラインはRくんも餓鬼レンジャー**〝ちょっとだけバカ with Creepy Nuts〟**で引用してるよね。

MR.ITAGAKI
a.k.a.ITA-CHO。元Manhattan Recordsのバイヤーにして日本屈指のヴァイナル掘り師。DJ、選曲家、プロデューサーとしても活躍。20年に死去。

P.KING
メソッド・マンなどの楽曲を手掛けるアメリカのプロデューサー。

NAS
73年生まれ。ニューヨーク・ブルックリン出身。94年のデビューアルバム『Illmatic』はヒップホップ史に残る名作とされる。史上最高のラッパーの一人。

R　ここからサンプリングさせていただきました。〈言語道断（Test Da Don Gurgon）〉も良いですね。〈Don Gurgon〉はパトワの言い回しで「一番のボス」みたいな意味らしいですけど、DABOさんはレゲエ知識もすごいですね。そして〈黙らす／イカしたパンチラインかます／たまらずスカした勘違い／姿消す〉は、「黙らす」「たまらず」と「イカしたパンチラインかます」「スカした勘違い姿消す」と、韻の音数が増えたり、変化してるんですけど、それによっておしゃれな踏み方や刺激を生んでる。この姿勢がヒップホップ的やし、DABOさんのDABOさんたるゆえんというか。そして自分の曲は〈良きリスナー 判別機能搭載〉。すごい自信満々の殿様商売（笑）。

——そもそも自分の曲を「マチガイナイ」と自分で言うのはかなりの胆力が必要だよね。

R　ヒップホップの根源的な「俺イズム」を感じるし、自分に言い聞かせて鼓舞してるともいえるんですけど、それをDABOさんはすごくナチュラルに出すし、それを言って然るべきスキルを、作品として形にしてますね。フックの〈オールウェイズ M.M.K.〉の「M.M.K.」は何なんやろうと思ってたん

『Illmatic』

94年リリース。DJプレミアやラージ・プロフェッサー、ピート・ロック、Qティップなどの大物たちがトラックを提供。『N.Y. State of Mind』や『Life's a Bitch』、『The World Is Yours』などの代表曲を収録。

シスコ

78年生まれ。99年に1stアルバム『Unleash the Dragon』をリリース。

古今亭志ん生

明治後期から昭和期にかけて活躍した落語家・5代目古今亭志ん生のこと。NHK大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック噺～』で志ん生の役をビートたけしが演じた。

ですけど、当時のインタビューを見ますと、「**M.M.K.**は『モテてモテて困る』の略」らしいです（笑）これは漫画家の**中尊寺ゆっこ**さんのコミックから借用したワードみたいですね。

――中尊寺さんは**YOU THE ROCK★**さんがパーソナリティをやっていた**『Hip Hop Night Flight』**を放送するためにTOKYO FMと交渉したり、資金提供もされた、日本のヒップホップの影の功労者で。

R なるほどな～。〈オールウェイズ M.M.K. 生娘クラブビッチからバンサンカン〉は、このあとの〝スーパーバックシャン〟の予告でもあるのでご期待ください。そして〈俺様の御成り／今夜もメデタクブランニュー・ライム御懐妊〉。〝MIC CHECK〟では「御稲荷」でしたけど、マイクチェックが済んだらもう〈御懐妊〉ですよ（笑）。DABOさんは自分の楽曲を子供に例えるみたいなことをよくしますよね。『HITMAN』のブックレットでも、「新たな俺の子どもたちが世に放たれたぜ」みたいなことを言ってたり。そして、DABOさんの象徴ともいえる「俺最強、お前最低」という世界が、次の〝O-RE-BA-NA〟で炸裂します。このアルバム自体、とにかく「俺の話」で、

〝ちょっとだけバカ with Creepy Nuts〟

19年にリリースされた餓鬼レンジャーの8thアルバム『ティンカーベル～ネバーランドの妖精たち～』収録の楽曲。

M.M.K.
旧日本海軍の士官用語、隠語として同様の意味で流行していた。M.M.K.はまだマシなほうで、他にもとんでもない隠語が多数。

中尊寺ゆっこ
62年生まれの漫画家、エッセイスト、コメンテーター。代表作は『スイートスポット』。90年の流行語「オヤジギャル」を生み出した。05年に死去。パートナーは音楽評論家の小林雅明。

ヒップホップ的ボースティングにとにかく特化してるんですよね。

——Creepy Nuts『Case』は「俺の話」が中心だったけど、そもそも論として「オレバナ」をひたすら書き続けるのは、プレイヤー側からするとどういう感触があるの？

R　例えばZeebraさんの「都会の野蛮人」っていうキーワードや、宇多丸さんのサブカル性やナレッジ、BOSSさんのローカリズムやストイシズム……そういう良い意味で「あの人だったらこれが得意技」「おなじみの」みたいな、そういう「オレの得意技」を見つけるのに、とにかく苦労するんですよね。とんでもないバックボーンがあれば別ですけど、俺みたいに何もなかったやつは、それを見つけるまでがとにかく大変で。でも「DABOといえばフダツキ」みたいな、テーマとキーワードを早い段階で見つけられた時点で、DABOさんが一抜けしたのは当然やと思いますね。

——しかも『Platinum Tongue』はその「おなじみ」をひたすら浸透させるためのアルバムともいえるね。

R　その楽曲の最たるものが〝O-RE-BA-NA〟。この曲は出だしからスキル

YOU THE ROCK★
71年生まれ。92年にDJ BENとともに『NEVER DIE』をリリース。主催イベント「ブラック・マンデー」で出会ったメンバーとともに95年に雷を結成。96年に代表作『THE SOUNDTRACK '96』をリリース。21年には前作より11年ぶりとなるアルバム『WILL NEVER DIE』をTHA BLUE HERB RECORDINGSよりリリースした。

『Hip Hop Night Flight』
95〜98年まで日曜日の深夜に不定期放送された3時間番組。新譜紹介やDJプレイはもちろん、ライムスターによる番組内コーナー「デモトピア」での新人発掘（『悪の華（BOSS THE MC featuring DJ ONO）』などが紹介された）なども行われていた。

全出しで、〈行くぜつむぐ万巻／つなぐ倍々ゲーム／きしむウーファー／ボリューム最大限／ろれつ大回転〉と、「a/n/e/n」という音で踏んでいくかと思ったら、そのライムを引き継ぎつつ、「倍々ゲーム」「最大限」「大回転」で大きめのライムも組み合わせる。その後の〈見よ奇跡呼ぶ舌（タン）／今度はお前が咳き込む番／是非今晩御相伴／謎の伝言板／ひたすらディープな語録天文学〉も、「奇跡呼ぶ舌」から気持ち良いぐらいに韻が連なっていく。その後の〈夜空の向こう／瞬く譲らぬフロー／羽ばたくうずらの子〉なんかは、DABOさんの口の構造、DABOさんの発声の仕方やからこそものすごい気持ち良いラインに聞こえる。というのも、「夜空の向こう」と「譲らぬフロー」は普通に言うと韻には聞こえないですけど、「よぞらの」と「ゆずらぬ」がヤ行とサ行＋濁点とラ行とナ行の位置が同じかつ、DABOさんの口の開き方やから気持ち良く聞こえるんですね。〈蹴飛ばす古巣口ずさむブルース／イルな路上散らばる禁断のフルーツ／上手く避けなオレのティンバーのブーツ〉では、「禁断のフルーツ」「ティンバーのブーツ」みたいな長いストレートなライムをより響かせるために、「古巣」「ブルース」「フルーツ」「ブーツ」

『Case』

21年にリリースされたCreepy Nutsのアルバム。

BOSS

71年生まれ。BOSS THE MC／ILL-BOSSTINO。97年からトラックメイカーのO.N.Oとともに札幌でTHA BLUE HERBを結成。99年の1stアルバム『STILLING,STILL DREAMING』から全国にその名を轟かせる。15年にはソロアルバム『IN THE NAME OF HIPHOP』をリリース。

レス／**ワンフー**ギャル／穴開けるニプレス〉。

——……ニプレスに穴開けるってどういうこと？

R　これはね……。

——インタビューで説明してる？

R　してます（笑）。

——さすが！　先回りがすごいなDABOさん（笑）。

R　〈滲むブレス〉、つまりラップをする俺の息継ぎだけで興奮させて、要は穴が開くぐらいにビュッと立っちゃうぞ！……というすごい下ネタということですね（笑）。2ヴァース目は色男感が直接的に出てますね。この時期のDABOさんは、スケコマシキャラ、「ラッパー＝モテる」というのをリックの中で一貫して言ってますね。

——差別的な表現をすれば「女子供に用はない」というマチズモが90年代は支配的で、だからこそDABOさんの伊達男で、モテを強調するリリックは新鮮だった。

R　3ヴァース目の〈甘い蜜／女神に荒いキス／マイク電源Onならとことと

ワンフー
「ファン」の逆さ言葉。

レス／**ワンフー**ギャル／穴開けるニプレス〉。

――……ニプレスに穴開けるってどういうこと？

R　これはね……。

――インタビューで説明してる？

R　してます（笑）。

――さすが！　先回りがすごいなDABOさん（笑）。

R　〈滲むブレス〉、つまりラップをする俺の息継ぎだけで興奮させて、要は穴が開くぐらいにビュッと立っちゃうぞ！……というすごい下ネタということですね（笑）。2ヴァース目は色男感が直接的に出てますね。この時期のDABOさんは、スケコマシキャラ、「ラッパー＝モテる」というのをリリックの中で一貫して言ってますね。

――差別的な表現をすれば「女子供に用はない」というマチズモが90年代は支配的で、だからこそDABOさんの伊達男で、モテを強調するリリックは新鮮だった。

R　3ヴァース目の〈甘い蜜／女神に荒いキス／マイク電源Onならとことと

ワンフー　「ファン」の逆さ言葉。

ん仕意気」。ここもかなり重要で、DABOさんはそもそもめちゃくちゃ喧嘩っ早かったり、思いきり危ねえ奴ってわけではない。USでもイカついことを言うラッパーは多いんですけど、実際に武力行使するようなヤツではなかったりするんですよね。**N.W.Aのアイス・キューブ**とか。

——育った環境自体はハードだけど、キューブ自身は大学に通うぐらいインテリで。

R 自身はギャングではないけど、まわりの危なっかしいツレの言葉とか、体験談をリリックとして落とし込んだのがキューブなんですけど、DABOさんもそれに近いと思うんですよね。〈このドープビーツ上通す自己主張／過剰な修辞塩コショウ少々／非難ゴウゴウ？ 下等止まらない衝動／フロウに調合〉とラップするように、「過剰な修辞」、つまり「盛りの美学」もDABOさんの特徴で。リリックで話をまったく盛らないラッパーって結構少ないはずで、事実を盛ったり、自分の存在を大きく見せるために、リリックに味付けしていくのは常套手段ですよね。ストリート系や不良系だけじゃなく、自由や感情を表現する、日常を歌うようなラッパーでも、ただ内省を「悲

N.W.A
86年にカリフォルニア州コンプトンで、イージー・E、アイス・キューブ、ドクター・ドレらを中心に結成。88年にリリースされた1stアルバム『Straight Outta Compton』は、大きなヒットを記録するとともに、その過激な歌詞が物議を醸し社会問題にまで発展。15年には伝記映画『ストレイト・アウタ・コンプトン』が公開された。グループ名は、「[illegible]主張する黒人たち」の略称。

アイス・キューブ
69年生まれ。N.W.Aのメインラッパーとして活躍し、イージー・E、ドクター・ドレーのリリックの一部も書いていた。89年に報酬面に疑問を抱きグループ脱退。90年にソロ1stアルバム『AmeriKKKa's Most Wanted』をリリース。91年公開の『ボーイズン・ザ・フッド』より、映画俳優としても活躍する。

CamScannerでスキャン

しい」「悔しい」と言葉で表現するんじゃなくて、感情の流れをより大きく見せるために、いろんな表現で「盛る」ことはあると思うんですよ。

——盛らないと伝わらないことは絶対にあるし、それが「表現」だよね。

R　ただその「盛り」の方向性が違うことで、**MC漢**さんとぶつかったとも思うんですよね。例えば漢さんはより生々しくストリートの現実を描くために、実際にあった出来事とその際の心理描写を盛ったり味付けするという「盛り」をしていたと思うけど、DABOさんはUSのヒップホップの流れを吸収して、より興味を引くために、「エンターテインメントとしての盛り」をしてたと思うんですよね。

——写実主義と浪漫主義の違いにも近いというか、「自分の見た景色」を、エンターテインメントとして昇華するか、よりリアルに表現するかの違いがあったと。

R　今では和解してますけど、そういう意味では対照的といえば対照的だったと思うんですよね。

MC漢
a.k.a GAMI、78年生まれ。鎖グループ代表。00年よりMSCのリーダーとして活動し、02年には「B BOY PARK」のMC BATTLEで優勝。05年に1stソロアルバム『導〜みちしるべ〜』をリリース。DABOとのビーフの一連は15年に刊行された著書『ヒップホップ・ドリーム』に詳しく書かれている。（単行本第一巻で紹介）

すみずみに張り巡らされた韻

——そしてアルバムタイトル曲の〝PLATINUM TONGUE〟。

R　この曲はDABOさんとSUIKENさんという、ニトロのメンバーであり、かつ1975年生まれ、兎年組がタッグを組んだ曲で。この二人の掛け合いがホントにすごいんですよね。

——二人のリリックやラップの内容の差も印象的だよね。

R　SUIKENさんのラップは語感中心というか。めっちゃ意味がわかる場所と、すごいスキャットっぽい、宇宙語チックなところがあって。

——DABOさんがインスタライブで話してたんだけど、SUIKENさんは日本語ラップをほとんど聞いてこなかったそうで。

R　だからSUIKENさんは「音」としてラップを作っていく部分も強いんでしょうね。DABOさんの〈秒殺（ハ！）居合い抜きMic Check／惜しまず絞り出す七癖〉というリリックで、ここで「七癖」というワードを使うのがDABOさんのDABOさんたる所以とも感じて。「無くて七癖」とい

うように、意識しないでも出てしまう部分こそ、自分のオリジナリティであり、DABOイズムもそこに出てるってことを、「惜しまず絞り出す七癖」と表現するのは本当に上手い。その後はオリジナリティのないラッパーが人のスキルを盗むことをディスり、それは〈ギャグだろう 実際 マジなら失敗〉、その行動がギャグじゃないなら失敗、と嫌味もかましつつ、そんな奴は〈チンケな陰茎 ゴン太な神経〉だと（笑）。

――「モノは小さいのに、神経は図太いな」という嫌味を（笑）。

R そして〈かつ露出狂すっこめ変態！／これが天才 知れ凡人の限界！〉と、韻でコテンパンに叩きのめします。ただ「露出狂すっこめ変態」と言うけど……。

――さっきまで自分は特大御稲荷を夜風にさらしてた（笑）。

R やっぱりサイズの問題なんかな……（笑）。〈未体験ゾーン飛びたつボイジャー〉の昇天する感じを宇宙船に例えるのもいいですね。かと思ったら〈しっかり締まってなデンジャーデンジャー／ノーヘル原チャオレが運転者〉と、現実に戻るという（笑）。

――ハーレーじゃなくて50ccバイクなんだ（笑）。

CamScannerでスキャン

R　その庶民感も大事で、DABOさんのラップは重厚なリリシズムと一般人的な軽口が同居してるんですよね。**『WREP』**の企画で日本のラッパーを『アベンジャーズ』に当てはめようという遊びをしたんですけど、俺はDABOさんをスパイダーマンに当てはめたんです。スパイダーマンって、軽口も弱音も冗談も言いながら敵と戦うじゃないですか。

――ティーンエイジャーとしての悩みも抱える、人間くさいヒーローだよね。

R　DABOさんは高度なラップとライミング、テクニックの中に、しょうもないワードや展開をつけてくるんですけど、それこそが日常生活にラップがある感じだと思うんですよね。当時のインタビューでも「もともとクリエイティブなことをやってるという意識はあんまりない。秘伝のタレを塗れば、それは俺のものになるんだ」と話してて。つまりワードのチョイス、連想、ライム……それをすごく自然なものとして、息吸って吐いてしゃべる、ぐらいの感じに捉えてて。キャラクターとしてはUSのラッパーに近づけたかも知れないけど、その実であるラップ自体はすごくナチュラルなんですよね。

――「スキルの高度さ」と「俺はスゴイ」みたいなラージさを併せ持ちつつ、

『WREP』
Zeebraが発案・主宰のヒップホップを専門にしたインターネットラジオ。

その表現自体はすごく普段着というか。
R　極端に言えば駄話の延長でおもしろいラップをするという。その感じが当時のDABOさんが考えるラップにおける粋さだったんでしょうね。そこらへんの街のあんちゃんが自分の言語を獲得して、アートにまで昇華させるという、「ヒップホップならではのラフでタフな格好良さ」が、DABOさんの肝かなと思います。
――その意味でも、街のあんちゃんの軽口が芸に達してる象徴的な曲は、〝PINKY～だから、その手を離して～ feat. TYLER〟だよね。
R　クラブで一番イカしてる女性がいて、当然ナンパされるけど、そのナンパしてるところにDABOさんが来て……。
――一発殴ってナンパ男を退散させる!
R　……んじゃなくて、「おいおい、俺の彼女に声かけてるけど、お前みたいなやつが俺の彼女にナンパするなんて百万年早いぞ?」と、5分以上に渡って、しかもうまいこと言い続けて退散させるという(笑)。まずはナンパされてる女性が〈ヤメて その手を離して アタシのワイングラス揺らす気?〉

と。ナンパ男が強引やったんかな？　いきなり手ぇ掴んだり。

――肩くんだりとかとかね。

R　そんな男に〈オツムの熱 良く冷まして／落ち着かせてよ **Jumbrowski**〉と続きます。「**Jumbrowski**」は御稲荷周辺の隠語なんですけど。

――「いきり立つ」のを鎮めなさいよ、と。

R　そうやってモメてるところにDABOさんが「コラコラ」と出てくる。〈コラコラ その手を離しな そこのブサイク／お前の息は何だか魚クサイ 下がれ生ゴミ お口にファスナー〉……いきなり一息でこれだけ悪口言います（笑）。テクニック的なところだと、ビートの余りのところに「おわかり？」とか入れたりするのがテクい。**Diggy-MO'**さんもラップで畳み掛けたあとに「そうだろ？」とか入れてくるんですけど、その間の使い方は上手いラッパーじゃないとできない。そして口臭を指摘したあとは、ファッションもディスって、〈お似合いは クニのカウガール〉と畳み掛ける。

――「田舎に帰りな」をこう表現するという。

R　〈ほら見てみな 鏡に映った自分 俺のベイビーとは月と人糞〉。「月とスッ

Jumbrowski
88年にリリースされたジャングル・ブラザーズの1stアルバム『Straight Out The Jungle』に『Jumbrowski』という楽曲が収録されている。

Diggy-MO'
SOUL'd OUTのメインMCとしてデビューし、08年に1stシングル『爆走夢歌』でソロデビュー。09年には1stアルバム『Diggyism』をリリースし、ツアーを行う。14年のグループ解散後もソロ活動を再開し、楽曲発表やライブ活動、楽曲提供などを行っている。

CamScannerでスキャン

ポン」とかではなく、「月と人糞」です（笑）。それぐらいお前は身の丈に合ってないナンパをしてるんやぞ、と。そして〈視力いくつ？　紹介しようか？　良い目医者／キミはまさに 夢見がち ティーンネイジャー〉。「良い目医者」と「ティーンエイジャー」っていう、日本語と英語踏みに加えて、単語の飛距離もすごい。〈グッモーニン コケッコッコー 実に滑稽で結構だが ここらでジ・エンド〉の「コケッコッコー」と「結構」は、「結構コケコッコー」みたいなダジャレにも近いんだけど、そこに「滑稽」を挟むことで上等なライムになるんですよね。ＦＯＲＫさんも**「布団が吹っ飛んだ これはダジャレだ 布団が俺に吹く強烈な追い風によって吹っ飛んだ これはライムだ」**と言ってますけど、ライムにはプロセスも大事なんですよね。どう繋げるかで、ダジャレもきれいなライムになるという。

——構造で韻の深みが増していくと。なるほど。

R　そして〈枯れ木に咲かせな ティッシュの花 一方／俺は女神のキスの嵐 Keep On〉ですね。超上手いですね。「ティッシュの花」「キスの嵐」、「一方」「Keep On」と、2個のライムを同じ位置で踏んでセットにしていく。で、

「布団が吹っ飛んだ これはダジャレだ 布団が俺に吹く強烈な追い風によって吹っ飛んだ これはライムだ」
『フリースタイルダンジョン』(5th season Rec 3-6) のR-指定 vs FORK戦「ROUND1」でのヴァース。「ROUND3」まで白熱のバトルが繰り広げられ、R-指定がクリティカル勝利を収めた。ちなみにこの試合が初対戦。

2ヴァース目は〈まばゆい 天使の輪 色はやや栗色／光る前歯 まるでトミー・クニヒロ〉と彼女を褒めるんですよ。

――女性が**国広富之**に例えられてうれしいかは置いといて（笑）。

R ここでイチャイチャしてる時にナンパ男も帰ればいいのに、まだ粘ってたんでしょうね。だから後半は〈聞きたかないだろ 鈍い銃声I-Ght?〉と、命に関わる話になってきてます（笑）。〈おかしな動きは無駄な努力 俺の手には お前のヤサの住所録〉……お前の住んでる場所なんかすぐ割れるぞ、ということなんでしょう。そして〈いい年こいて 近所に迷惑かけたらあかんて ガキンチョじゃねぇんだ／ボヤでも出たら 日頃のバツだ 俺の**レーコー**に手を出すな〉。……怖すぎる（笑）。

――**「月夜の晩ばかりじゃないぞ」**という婉曲表現。

R 「ボヤでも出たら」ですから「火を点ける」とは言ってない（笑）。そして3ヴァース目、〈リサ曰く スクラブ エリカ曰く タイローン〉。

――**TLC**のリサ〝レフトアイ〟ロペスと**エリカ・バドゥ**のことだね。

R TLCの〝No Scrubs〟（99年）、エリカ・バドゥの〝Tyrone〟（97年）、

国広富之
53年生まれの俳優。松崎しげるとのコンビで人気を博した『噂の刑事トミーとマツ』など人気ドラマで活躍。

レーコー
「コレ」の逆さ言葉で、しばしば小指を立てながら言われる「彼女」という意味。

月夜の晩ばかりじゃないぞ
「いつも明るい夜ばかりじゃないから夜道には気をつけろよ＝ただじゃおかないぞ」という古典的な脅し文句。

どちらも女性視点からダメ男を歌った曲なんですよね。だから「お前はダメ男なんだ」という意味になってて。で、〈ダイスケ曰く なんちゃってサイモン〉。「ダイスケ」はDABOさんの本名である芦田大介のことですね。「サイモン」は**ファロア・モンチ**に"Simon Says"(99年)って曲がありますけど、もともとは子供の遊びですね。

——サイモン役の人が命令して、みんながそれに従うというゲーム。

R 言わば絶対的存在だと。それに対して〈外野曰く「やっちゃって下さいよ!」おだまり!〉。取り巻きとか野次馬がわーわー騒いでたんでしょうね。でも「お前らも調子乗んなよ」と制するという。しかし、5分にも渡って延々説教してる彼氏を、彼女は横でどう思ってたのか(笑)。

——一番引いてるかなと思いきや、〈さもなきゃ鼻っつらにアイスピック〉だから。

R 彼女もDABOさんが助けに来んかったらやる気満々(笑)。

——DABOさんは口で行くけど、彼女は武力行使だからね(笑)。

R ナンパ曲は数あれど、ナンパ阻止曲はおもしろい観点やなと。その次は

TLC
90年に結成されたT-ボズ、レフト・アイ(02年死去)、チリの3人による女性R&Bグループ。94年リリースの2ndアルバム『CrazySexyCool』(代表曲"Creep"や"Waterfalls"収録)が大ヒット。

エリカ・バドゥ
71年生まれ。97年に1stアルバム『Baduizm』をリリース。ディアンジェロやマックスウェル、ローリン・ヒルとともに90~00年代のR&Bシーンを牽引し「ネオソウルの女王」と称される。

ファロア・モンチ
72年生まれ。プリンス・ポーとのデュオであるオーガナイズド・コンフュージョンを経て、99年に1stアルバム『Internal Affairs』をリリース。複雑で知的なラップテクニックが評価された。

CamScannerでスキャン

〝拍手喝采〟です。これはもう日本語ラップ義務教育曲。細かい解説とかはせずとも、曲の持つ花とかすさまじさみたいなのは聴けばわかってもらえると思うんですけど、言うたらアルバムでこの曲に至るまでが、DABOさんがどんな人間か、いかにすごいか、どれだけモテるかっていう、壮大なキャラクター紹介なんですよね。そして、そのとんでもない奴が〝拍手喝采〟で迎え入れられると。

――ファーストヴァースからド派手な入りだよね。

R 目に入るもの全部を蹴散らしてくぐらいの「俺最強!」な登場のリリックですよ。〈モチのロン マイクに抜かりあるわけなし/チケット代はなけなしよく見てな 駆け出し〉の、ライムと畳み掛けるようなフロウもテクい。〈感謝込め顔射 しかも濃いやつ乱射!〉、すごい下ネタですけど、そんぐらい濃いラップがくると。〈一見さん 大歓迎 いらっしゃーい!!〉という、**桂文枝**師匠的なワードで収めるところもDABOさんっぽいですね。

――〝拍手喝采 Remix feat.**Deli**, **Bigzam** & **OSUMI**〟も制作されていて。

R **リミックス**はOSUMIさんがさらにこの曲を化けさせるという伝説的

桂文枝
落語家。11年までは桂三枝として知られた『新婚さんいらっしゃい!』の元司会者。

Deli
75年生まれ。00年にニトロのデビューアルバムに先駆けて、1stソロアルバム『AQUARIUS』をリリース。14年には松戸市議会議員一般選挙で当選し、政治家としても活動している。

Bigzam
78年生まれ。最年少メンバーとしてニトロに加入。05年に1stソロアルバム『WESTSIDE FAR EAST SIDE』をリリースした。

CamScannerでスキャン

な仕事をしてまして。イントロのソロパートは勿論、フックをメロっぽいフロウでラップするんですよね。何やったら、DABOさんもライブではそっちを歌うことが多くて。〝共に行こう〟でDABOさんをフックアップしたOSUMIさんが、この曲ではフック力やったり破壊力で曲の彩りを変えたという事実は付け加えておきます。そして続くのが〝レクサスグッチ〟。

——オーセンティックな〝拍手喝采〟と、バウンス／チキチキを取り入れた〝レクサスグッチ〟という対比はおもしろいよね。

R　今でいったら**ブーンバップ**の後に**トラップ**の曲がきて、しかもどちらもクラシックにするという離れ業をやってるんですよね。

——バウンスはTWIGYさんの**〝七日間〟**や、餓鬼レンジャー**〝火ノ粉ヲ散ラス昇竜〟**などが先行としてあったけど、〝レクサスグッチ〟は**『ワイルド・スピード』**のサントラに入るレベルの注目度だった。

R　ラップのビートアプローチが正解すぎて、多分、このラップをトラップのビートに乗せ替えたり、この感じのフロウをトラップに当てはめても、めちゃくちゃ格好良いラップになると思うんですよね。それぐらいラップの

OSUMI
Big-O名義でも活動。ファッションデザイナー・オオスミタケシとして「SWAGGER」や「PHENOMENON」、「MISTERGENTLEMAN」などのブランドを手掛け、世界的な評価も受けていた。21年に死去。

リミックス

01年発売のシングル『ZERO』に収録されている。ベストアルバム『I'm The Best』（09年）にも収録された。

ビートアプローチが正解で、ラップの速度の切り替え、要は「ビートを倍速で取るか、オンで取るか、もっと遅く取るか」というアプローチをこの時点で完成させてるし、それを形にしてるんですよね。例えば入り口の〈肩揺らせ Bounce 腰揺らせ Bounce〉はオンで取ってますね。だけど〈聞いたことも無いようなフロウだ 耳澄ませな〉は、その倍の速度で言葉を詰めてる。そして〈**クルックー**、ワタ坊ともう一回組ませな OK?／それで行こう 決定! 早く貸せマイク Check Check〉は、さらにそのフロウをスウィングさせて、アクセントをつけてるんですよね。

――かつ韻で言葉をグルーヴさせる構造でもある。

R そこらへんは、ただ韻をケツに置くだけの人にはできません。LITTLEさんとDABOさんが『愛韻TV』で喋ってたんですけど、そもそもこの曲は韻の配置と韻の数を全部決めてから作った曲だったと話されてて。

――その細かい内容は具体的には話されてなかったんだけど、あれはどういうことなのかな?

R おそらく、曲の構造を最初に宇宙語とかスキャットで作ってから、言葉を

ブーンバップ
キックドラムとスネアドラムのシンプルなループで構成される、80〜90年代に主流となったビートのこと。"boom-boom-bap"という擬音から名付けられた。DJプレミアやピート・ロック、Jディラなどの作品におけるビートが代表的。

トラップ
80年代にアメリカ南部で発祥し、00年代にアトランタで発展、10年代にメインストリームとなったハイハットの連打と低音のベース音が特徴的なビート。T・Iやグッチ・メインを先駆けに、ミーゴス、トラヴィス・スコットなどの爆発的ブレイクにより全世界に広まった。

当てはめていった可能性がある。俺もそれに近いラップの作り方をするんですけど、「タタン、タタンタタタン」みたいにヴァースの設計図を決めて、そこに韻の配置とか数を設定してから、リリックにしていったんじゃないかなと。

――例えるなら「ドラムパターンを組んだ」ってことだよね。

R　そうですね。ラップは打楽器的な側面もあるので、そのパターンを考えてから作ったんじゃないかなと。例えば〈煙たいバース蹴飛ばす ためらわずエゴ出す／勘操る雑魚ヘコます 悪夢のエントランス〉なんかはそうだと思いますね。「バース」「ばす」「出す」「ます」「ランス」と踏みつつ、その間に「蹴飛ばす」「エゴ出す」「ヘコます」「エントランス」という長い韻もちゃんとつながってるという。さらに「勘ぐ」「悪夢」も踏んでるし、「ためらわず」「勘操る」も音が合ってるからこそ、めちゃくちゃ気持ち良く聴こえるんですけど、そういう踏み方の構造を最初に設計してたんじゃないかなと。そして、これもLITTLEさんが言ってたんですけど、この曲はラップなのにAメロBメロみたいなのがある、と。

――たしかに〈Hey Hey～〉以降のブロックと、それ以前のブロック、そし

"七日間"

99年にリリースされたTWIGYのシングル『七日間』及び、2ndアルバム『SEVEN DIMENSIONS』（00年）収録の楽曲。

"火ノ粉ヲ散ラス昇竜"

01年にリリースされた餓鬼レンジャーのメジャーデビューシングル表題曲。1stアルバム『UPPER JAM』（01年）にも収録。

てフックに分けられるね。

R　〈Hey Hey Hey Hey Hey〉パートは、「ei」とか「en」の韻と音が続いていくんですけど、曲の中後半でも同じようにそのパートは出てくるから、意識的にBメロ的な役割として作ったんでしょうね。そして締めの〈実際問題 一部を除き一切論外／所謂 ツーケーのナーアー小さい業界／突っ込む つっけんどんなマイク まだ痛い状態？／大丈夫 なれたが最後…「いっぱいチョーダーイ」〉。「実際問題」「一切論外」「小さい業界」「痛い状態」「いっぱいチョーダーイ」の踏み方はテクい。その間に「ケツの穴小さい業界」という業界批判を、「ツーケーのナーアー」みたいにあえて業界用語で言う粋さ(笑)。しかも「突っ込む つっけんどんなマイク」でそのワードを踏むっていう。

――芸が細かいよね。

R　この曲はそもそもテーマの時点ですごいですよね。

――当時、ヒップホップだけではなくMISIA〝つつみ込むように…(DJ WATARAI REMIX feat.MURO)〟などを手掛けていたDJ WATARAIさんがレクサスに乗ってて、「俺もレクサスに乗るぞ！」と思ったというのがきっ

〝ワイルド・スピード〟
01年公開の映画『ワイルド・スピード』のエンドクレジット時に〝レクサスグッチ〟が使用されており、国内盤サウンドトラックに収録されている。

クルックー
「コケコッコー」に続きニワトリの鳴き声かと思いきや、本イベントの後日に行われた本人インタビューで、当時のマネージャーの愛称だったことが判明。

MISIA
78年生まれ。98年にシングル『つつみ込むように…』でメジャーデビュー。00年の7thシングル『Everything』が爆発的ヒット。21年の東京オリンピック開会式では〝君が代〟を独唱し話題となった。

CamScannerでスキャン

かけみたい。日本語ラップがバブルに入った時期だから、そのテーマを歌うことに齟齬もなくて。

R　メッセージ的な部分でいうと〈後ろの正面から撃つ この証言〉。これは高木さんの見立てでいうと。

——LAMP EYE〝証言〟の世代、いわゆる「さんピン世代」を打ち破るという意思でもあるのかな、と。

R　上の世代もまくってやるぞ、みたいな感じもあるのかなと。後半の〈恐るべき この才能にペイしろ〉っていうのも、とんでもない自信がないと言えないですね。〈未曾有の悲劇もたらす原子炉／ピース デミさん これも全自動〉は、〝**DON'T TEST DA MASTER**〟の〈FULL AUTO これ全自動〉というデミさん＝**N－PPS**さんライムに対しての〈ピース デミさん これも全自動〉という引用であり、これぐらい自然に最新型のヤバいフロウが「俺も全自動で自然とできちまうぜ」という感じで終わるという。

——ちなみに、この曲を作った時、高熱を出してたか、入院レベルで体調悪かったらしい。

〝DON'T TEST DA MASTER〟

99年にアナログリリースされたBUDDHA BRANDの楽曲。00年リリースのミニアルバム『Don't Test Da Master』にも収録。

N－PPS

64年生まれ。「飛葉飛火」「緑の5本指」とも自称する。99年にHIBAHIHI名義でミニアルバム『HIBAHIHI+SILENTPOETS001』や、『MIDORINOGOHONYUBI presents MIDORINOGOHONYUBI MUSIC / ONE FOOT』（02年）をリリース。The SexorcistやTETRAD THE GANG OF FOURとしても活動。

R　マジで？　……元気でも書けないですよ？

――時間もない、体調激悪、明日にはNYに飛んでRECというプレッシャーの中で作ったという話をされてて。

R　うわぁ……。俺は、普通に飛びます（笑）。そろそろ時間ですね。いやあ、〝レクサスグッチ〟まではいけたか！

――アルバムの半分ちょっとまで行けたね（笑）。

R　HUNGERさんとMACHHOさんとの相性が素晴らしい〝徒然草〟とかも紹介したいんですけどね……。アーティスト丸々語るのが無理で、アルバム2、3枚で語るのも無理になって、アルバム1枚にしようとして……無理だった（笑）。

――我々には一体何ができるのか（笑）。

R　それぐらい、しがんでもしがんでも味が出る作品をみんなラッパーは出してるし、『PLATINUM TONGUE』もその一枚です。そういう作品を元にオリジナルな妄想だったり、飛躍のさせ方で見ていったら、より楽曲を楽しめるんじゃないかなと思いますね。

HUNGER
78年生まれ。96年に仙台を拠点にGAGLEを結成。01年に1stアルバム『BUST THE FACTS』でデビュー。審査員として『ラップスタア誕生』に出演していた。

CamScannerでスキャン

対談

CHICO CARLITO × R-指定

2022年10月10日｜白夜書房にて収録

CamScannerでスキャン

『フリースタイルダンジョン』でのバトルを皮切りに出会い、その後、同番組では初代モンスターとして活躍したR-指定とCHICO CARLITO。この連載や様々なインタビューでもR-指定の口から幾度となく彼の名前が挙がり、またCHICO CARLITO"Here I Am feat. R-指定"やhokuto"Shooting Star feat. CHICO CARLITO & R-指定"での好セッションなど、その絆の深さを感じさせる。今回はその二人に、これまでの二人の関係性や、改めて二人の考える「ラップスキル」について話し合ってもらった。

PROFILE

CHICO CARLITO

93年生まれ。沖縄県那覇市出身。ヒップホップを聴き始めた翌年から本格的に活動を開始。「UMB」をはじめとする数多くのMCバトル優勝で名を上げ、『フリースタイルダンジョン』のモンスターとしてレギュラー出演を始めた16年に1stアルバム『Carlito's Way』をリリース。その後、客演仕事や制作期間を経て20年に約2年ぶりの自作『Ryukyu Style』の発表や、Red Bull Musicの企画「Red Bull 64Bars」で鮮烈なラップスキルを披露した。最新アルバムは22年リリースの『Sandra's Son』。

CamScannerでスキャン

ラップ最強グループLINE

——そもそもの二人の出会いは？

R-指定（以下R）　一発目は『フリースタイルダンジョン』ですね。

CHICO CARLITO（以下、C）　ちゃんと向き合ったのはあのステージ。

R　その前に沖縄でCreepy Nutsのライブをした時に、同じイベントに唾奇が出てて。それで唾奇やその仲間から「運天（CHICOの本名）っていう東京で頑張ってる奴がいるから、どこかで会ったらよろしく」と言われていて。それから1年ぐらいして『ダンジョン』が始まって、最初はチコがチャレンジャー、俺がモンスターという立場で出会ったんですよね。

——「season1/rec2」（15年11月放送）がファーストコンタクトだったと。

R　そうですね。最初は年齢が分かんなくて敬語で喋ってたんですよ。

C　俺はその時、髪もヒゲも伸びっぱなしだったから。

R　完全に年齢不詳。「この見た目はちょっと年上かな」ぐらいに思ってたら年下だった（笑）。

唾奇
91年生まれ。CHOUJIとともに客演参加したCHICO CARLITOの楽曲「一陽来復」（16年）やKANDYTOWNのIO & YOUNG JUJUとの"Same as"（16年）で注目を集める。17年にはSweet Williamとの共作『Jasmine』をリリース。

C　俺がラップを始めた時期から、Rはバトルですでに超有名だったから「うわ！　R-指定がついに来た！」っていう感じでした。そしてバトルでは史上最強を肌で体感しましたね～。

R　そういうのいらんいらん（笑）。それからすぐに『ダンジョン』のモンスターにチコが加わって、一番歳が近かったのもあって、普通によう喋るようになって。T-Pablowも含めた3人が年下チームみたいな感じで。

C　そうだね。

R　その『ダンジョン』の若手メンバー3人が、「『ダンジョン』の今後はどうなります？」みたいなことを先輩に話しにいったこともありますね。『ダンジョン』が一気に人気が出たときに、「このまま続けて右肩下がりになるのも嫌やし、盛り上がってる間に伝説の番組で終わるのはどうやろ？」という共通認識もあって。

——それは年下チーム3人で？

R　そうですね。先輩たちはリリースやライブというキャリアを経ての『ダンジョン』でしたけど、僕らはまだまだリリースも重ねてないし、バトルや

T-Pablow
95年生まれ。「高校生ラップ選手権」での2度の優勝、『フリースタイルダンジョン』初代モンスターなど、MCバトルで注目を集める。双子の弟・YZERRとともにBAD HOPの一員として活動している。

『ダンジョン』の面だけで盛り上がってしまうことの焦りや、『ダンジョン』よりも自分らの音楽活動に時間を費やしたいという思いもあって。

C　しかもシーズンが終わったタイミングの打ち上げだったんじゃない？

R　そう。先輩方が「次のシーズンはどうしよう」みたいに盛り上がっている中で、若手3人が「俺らはもっと自分の音楽で頑張っていかんと」という話になって、これは言ったほうがいいな、と。それで先輩方が話してる中に、「あの……番組終了しません？」みたいに言いに行って（笑）。

C　T-Pablowが言い切ったんですよ。「これで終わったら、俺ら伝説っすよ」って。

——考えただけで鳥肌立つね！

R　だから先輩たちも「なんで!?　こんな盛り上がってんのに？」っていう感じでしたね。

——「ダンジョン」が始まったとき、MCバトルはほぼ世間的な知名度は無かったからこそ、一気に注目を集めたと思うんだけど、逆に言えば「バトルしか知らない」人を多く生み出した瞬間でもあったし、そこで「ブームとし

て消費」されてしまうことに危機感があったと。

R　それに近い。ここからミュージシャンとしてやっていこうという気持ちも強い時期やったし、バトラーとしての側面だけ注目されるのは本意ではないという危機感もありましたね。それから『ダンジョン』のバトルに対しても、普通に一喜一憂してたんで。

C　みんながどう思ってるかはわからないですけど、結構「リアル」なバトルなので、普通にメンタルが削られてた（笑）。

――キャリアの展望などは話しましたか？

C　明確にした記憶はないかな。でも覚えてるのは、**般若さんの武道館ワンマン**が終わったあと、ZORNさんがRに「武道館、俺らも行けそうじゃね？」って話してたんだけど、そのとき「俺には全然見えんわ」と思ったのを強烈に覚えてる。実際、**RとZORNさんは武道館公演をやったし、その前にはBAD HOPも武道館をやってて**。そういう風に、RとT-Pablowたちが着々とキャリアを進めてるのを、俺は傍から見てるっていう感じでしたね。みんなが思ってることを現実化して、達成していくのは羨ましかったし、

般若さんの武道館ワンマン
19年1月11日に開催された般若ワンマンライブ「おはよう武道館」のこと。R-指定とCHICO CARLITOは"MONSTER VISION"の、ZORNは"HUNGRY"のフィーチャリングゲストとしてステージに立った。

悔しかった。

——そういう思いをぶつけることは？

C　絶妙にしてないかも。基本的にフザけて話してるから。

R　そのほうが多いか。でも、結局その3人がずっと連絡取り合ってるんですよね。18年に初代モンスターと二代目モンスターが戦うという企画のときも「あの話聞いた？」みたいな話を3人でして。

C　その3人の近々の話題が『FSL』ですね。パブロとRのエキシビションについて。Rから「エキシビションとはいえ久々のバトルだし、パブロとのセッションは緊張する」って連絡があって。パブロはパブロで、エキシビションが終わってすぐ電話かかってきた（笑）。

R　その前に『凱旋MC BATTLE』もあった。

C　そう。そこでは俺とパブロが戦うことになって。

R　パブロから「『凱旋』に出ることになって、もしかしたらCHICOくんとも戦うことになるかも知れないんですけど、どうしたらいいっすかね？」みたいに言われて。俺もあんまアドバイスできひんから、「今のパブロがパブ

[illegible]

順に「Creepy Nuts One Man Live『かつて天才だった俺たちへ』日本武道館公演」（20年11月11・12日）、ZORNの「My Life at 日本武道館」（21年1月24日）、BAD HOPの「Breath of South」（19年11月）。

『FSL』

フリースタイルのプロリーグ化をコンセプトに掲げて始まったプロリーグ。第一回大会は20年10月11日に開催された。

『凱旋MC BATTLE』

17年に初開催された般若主催のMCバトル。20年6月にはさいたまスーパーアリーナで開催され、T-Pablowが優勝した。

ロのまんまおれば勝てるんちゃう?」みたいなことを話したんですよね。それとほぼ同じタイミングでチコからも連絡があって、そこでも「あんまり相手を貶めないのがお前の気持ち良いところやから」みたいな、フワッとしたことを伝えて(笑)。

――絶妙な距離感が3人にはあるんだね。直接言わないでワンクッション挟むというか。

C それがちょっとめんどいなと思ったので、グループLINEを作りました(笑)。

R 『FSL』のエキシビションが終わった当日に作ったな(笑)。

R流「韻」と「ライム」の違い

――話変わって、『Rの異常な愛情』で、二人で原宿に15時集合で待ち合わせしたら、チコくんは16時に到着して、その時Rくんはまだ家にいたという話がありましたが。

R ヤバすぎやろ(笑)。

C　ヤバすぎる。

——あの話の真相は？

R　「チコは**沖縄タイム**で遅くなるやろな」と思ってたら、案の定、約束の時間に「16時に着くわ」って連絡があったんですよね。じゃあ俺はどう動けばいいかな……と計算して、原宿に着いたら17時。

C　どんな計算したんだよ！

R　びっくりした！　あんなふうになるとは思ってなかった（笑）。

C　びっくりしたのはこっちだよ。お前、数学2だろ（笑）。

R　2やったらもっといけんちゃう？（笑）。着いたらチコが原宿駅前でめっちゃ囲まれて写真撮ってて。

C　むっちゃプンプンした記憶あるわ（笑）。

R　それこそ『Rの異常な愛情』のイベント直前にもチコが家に泊まりに来てて、漢さんやSHINGO★西成さんの曲をずっと一緒に聴いたり。

——チコくんとはフリースタイルの練習もよくしてたという話もありました。

R　チコは現行のラップのノリ方とか音の乗せ方、空気感を教えてくれる先

沖縄タイム
ウチナータイム。「なんくるないさー」の精神もあるが、長らく公共交通機関がバスやタクシーしかなかったという名残りもあります。

生なんですよね。だからチコから最近聴いてる曲や、「今、ヤバい人おる?」みたいな話をよく聞きます。年齢は近いけど、ヒップホップに入った時期が全然違うから、根本的な感覚がちょっと違うんですよね。

C 俺がちゃんとヒップホップを聴き始めたのは12年なんですよね。DINARY DELTA FORCEがドンピシャぐらいの時期。

R 俺が04年ぐらいやから、「チコで言うダイナリが、俺らの時はニトロやと思うわ」みたいな話してましたね。

C それ言われたの、めっちゃ覚えてる!

R だから、ヒップホップに対する受け取り方が感覚として違うんですよね。チコは日本語ラップ然とした固いライムだったり、小節のケツでしっかりオチをつけなアカンみたいな、「日本語ラップの呪い」みたいなものにかかってないというか、もっと柔らかい感覚でラップを聴いてる。逆に俺はそういう呪いにかかってたから、SCARSとかBRON-Kさんみたいな、USの感覚を取り込んだラップを飲み込むのに少し時間がかかったタイプなんですよね。音を感覚的に「かっけえ!」と感じるかどうかでいいんや、と自分の中

DINARY DELTA FORCE
01年に神奈川県藤沢市で結成された4MCによるグループ。10年に1stアルバム『SOUNDTRACK TO THE BEDTOWN』をリリース。

SCARS
03年にリーダーのA-THUG、BES、SEEDA、STICKY(21年死去)、bay4kらを中心に神奈川県川崎市で結成。日本におけるハスリングラップの先駆け的存在となった。06年に1stアルバム『THE ALBUM』をリリース。

CamScannerでスキャン

で判断出来るようになるまでタイムラグがあって。

C　例えばBRON-Kさんの**"ROMANTIK CITY"**〈どっから来たの？　今何歳？　酒でも飲もうよ〉の言葉の切り方とか？

R　そう、「何て言ってんのかな？」ってなったもん。次の〈おごるからさ〉の「お」とか言わなくて「っごるからさっ」みたいな。そういうのを飲み込むのに時間かかった。

――もちろん、音楽だからフィーリングとして気持ち良さを覚えてた部分があったと思うけど、リスナーとしてのキャリアを重ねるうちにいつしか「呪い」にかかってしまったというか。

R　その部分はあると思いますね。でもチコはもっと気持ち良い音に対してオープンだと思う。

C　俺が聴き始めたのはSALUさんとかAKLOさんが出てきた時期だから、言葉を崩すのがトレンドでもあったし、それが自分の中でもスタンダードだったんだよね。

R　印象的なのは、俺んちでフリースタイルをやってたときに、TRAPの

BRON-K

神奈川県相模原市を代表するラッパー・SD JUNKSTAの一員。SEED A&DJ ISSOのMIX CD『CONCRETE GREEN』シリーズでは多くの楽曲に参加した。歌うようにフロウするメロディアスなラップと文学的なリリックが特徴的。

"ROMANTIK CITY"

08年にリリースされたBRON-Kの1stアルバム『奇妙頂来相模富士』収録の楽曲。

ビートにラップを載せたら「ダメダメ！　韻が長いし言葉がムズいから、ナシ！」みたいな（笑）。

C　ハハハ！

R　でも、あれはマジで的確やった。今っぽいビートに昔ながらの7、8文字ぐらいのロングライムを載せていくと、響きがどんくさくなるんすよね。わかりやすい言葉で短く2、3文字とか踏んで、語感を合わせていくぐらいがちょうどよくて、リズム感的にも、今っぽいフロウにラップが映えることに気付かされて。すごい勉強になりましたね。

C　うれしー。

R　「今の古いから！」にはグサッときましたけど（笑）。

C　逆にRは韻の先生ですね。「これって俺踏めてるの？」とか「この韻は何点？」って聞いたこともありますよ。例えば、俺の中では「う」と「ん」は韻としてOK――「まんじゅう」と「たんじゅん」みたいな――と思ってたけど。

――発話としては踏めてるように思えますね。

R　でも「これはパーフェクトではないよ」「何この人……厳し！」みたいな（笑）。そういう風に、Rは韻を細分化して考えてきたんだろうなって。

——この連載でも、チコくんはRくんのリリックに「何でそんなに細かく考えてるの？」と思っていたし、逆にRくんは「何でロジカルに考えないであのラップが書けるのか分からん」と、お互いに不思議に思っていたと話していましたね。

R　チコは1st『Carlito's Way』（16年）をあのクオリティで作ったのに、そこから1、2年後に沖縄で会ったら「最近リリックの書き方がわかったよ。みんなオチのライムとか考えてんだね」って言われて、「マジか！　お前、それ考えてなくてあのクオリティのアルバム作ったん？　気持ち悪！」みたいな（笑）。

C　ケツのライムに向かって走っていくような作り方は考えたことがなかったから。こっちもそういう作り方をRから聞いたときに「気持ち悪！」と思った（笑）。俺はいま韻の理屈が分かってきて、ラッパー二年生ぐらいの感覚だね。ちゃんと韻を崩さないで作る楽しさが分かったというか。

R　最新アルバム『Sandra's Son』（22年）はすごいそれを意識してるよな。

『Carlito's Way』
16年にリリースされたCHICO CARLITOの1stアルバム。

『Sandra's Son』
22年にリリースされたCHICO CARLITOの2ndアルバム。

ちゃんと同じ場所にライムが来るんだけど、それにチコがもともと持ってるリズムとかフロウのセンスが組み合って、ベタになってない。声とリズムと、もともと体内に内蔵されてるリズム感が「いま」やから、それとライミングが合わさったとき、チコのオリジナリティとして成り立つんですよね。

C あと、沖縄がもともと韻をかっちり踏む文化じゃないことにも気づいた。それよりも聴感の気持ち良さを重視してる気がする。

R 大阪は沖縄より韻の呪縛が大きいかも。例えば韻踏合組合みたいに、俺らの前の世代の韻重視の人は、音の気持ち良さありきで踏んでるけど、俺らの世代はいかに変な踏み方するかとか、特徴的な韻を出すかに縛られてた時期が長らくあったと思う。

C でも長くて固い韻が、ラップの王道といえば王道じゃん？　だから……沖縄全体が邪道？（笑）

R そんなことはない！　ムズいのは、「韻」と捉えるか「ライム」と捉えるでも違ってくる部分もあるなと。

C そこ定義して！（笑）

R　これはあくまでも俺の定義やけど、「ライム」はさっきチコが言ったみたいな、言葉を大きな音の塊として捉えて、感覚として音が合っていれば基本的にOK。だけど「韻」は、より文字面で判断する側面が大きくて、母音と子音に分解しても、音が組み合っているかどうかみたいなことが重要というか。

C　じゃあ、ライムはフロウでも踏めるっていうことだね。

R　「フロウも込みで、聴感的に踏めてるなら踏めてるとみなす」のがライムやなっていう感覚があるな。

C　また賢くなりました（笑）。

R　海外のラップも、基本的には大きな音の流れでライムを捉えてると思うんやけど。

――そもそも、英語は言語としてライムできる「音素」が多いわけで。

R　そのライムをより文字として、言葉として、韻として分解したいという呪縛に、大阪のヘッズはかかりがちやったと思う。でも沖縄のラッパーはもっと、グルーヴとかノリを重視しながらライムしてるよな。チコもそうや

し、Awichさんもめちゃくちゃライムの数が多い。

C　アッコ姉さんは踏むよね。しかも短い言葉でパンパンパン！って踏んでるイメージがあるな。

R　〈「鋭さ」、「図太さ」、備えた「ブルドーザー」〉（"Shook Shook"）みたいな感じ？

C　もっと短い、〈Hocus pocus 坊やほら Focus〉（"Open It Up"）みたいな踏み方。

R　それが気持ち良いねんなぁ。

C　あの人は14歳からラップしてて。

R　聴いた。ラジオに出てもらった時に「これ私が初めてレコーディングしたやつ」って聴かせてもらってんけど。

C　俺も同じ曲かな。渋谷のクラブでアッコさんから聴かせてもらって、酔い冷めたもん、すごすぎて（笑）。

R　同じく（笑）。

Awich
86年生まれ。06年にEP『Inner Research』でデビュー。YENTOWNに所属後、17年にChaki Zuluプロデュースアルバム『8』をリリース。22年3月には『Welcome to the Queendom at 日本武道館』を成功させた。

"Shook Shook"

20年にリリースされたAwichのメジャー1st EP『Partition』収録の楽曲。

二人のルーツ

——ライムや韻の違いには言葉の地域性もありますか？　キングギドラは標準語で韻を固めたから、日本語ラップのひとつの基準点たり得たと思うんだけど、方言による言葉遣いやイントネーションの違いで、韻やライムの方向性も変わる部分があるのかなって。

C　テレビとかで広まってる関西弁と比べて、沖縄の言葉はそのまま使うには独特すぎて注釈を入れないと難しいかも。でも沖縄の言葉のグルーヴはあると思う。沖縄の市場に並んでるおばあちゃんたちの話を聴いてみたら全然すごいいね。「ニーニーどっから来たのかっこいいねぇハッサー」みたいな(笑)。

R　今の言葉の連なりだけで気持ち良い音の流れになってんな（笑)。

C　そうそう。やっぱり土地の言葉のグルーヴがあるし、沖縄はそれが強いと思う。

R　関西弁やと、SHINGO★西成さんがめっちゃデカいかな。シンゴさんは「**カマゲン**」と「かまへん」みたいに、関西弁のままで、方言で英語と

“Open It Up”

20年にリリースされたAwichのアルバム『孔雀』収録の楽曲。

初めてレコーディングしたやつ

03年にリリースされたコンピレーションCD『オリオンビート——オキナワン ヒップ ホップ——』収録の“ジャマルヤン”。

カマゲン

「come again」の意味。「コマゲン」とも。

踏んでみたりとか、そういう道を拓いたと思う。

C 〈足も洗う 皿も洗う〉〈返してもらう〉（"G.H.E.T.T.O."）みたいなイントネーションも、これぞ関西だなと思う。

R 確かに。シンゴさんはもともと関西弁が持つグルーヴに絶対的な信頼があったと思うし、「この言葉がおもろい」という自信があったから、それをそのままラップにできたんかなと思いますね。それこそ『ダンジョン』が始まったときに、シンゴさんが「西成もダンジョンやから。玄関開けて2秒でバトル仕掛けられるで」って(笑)。でもそれは、西成のおっちゃんやおばちゃんの喋る言葉に独特のグルーヴを感じたり、喋り言葉にフロウが存在するっていうことだと思うし、それをシンゴさんもラップとして体現してるという。あと、チコの原体験でもある小林（勝行）さんは、関西弁ですけど、神戸の言葉なんですよね。兵庫の関西弁。

C へぇ〜。

R ANARCHYさんもナチュラルに標準語を使われますけど、やっぱりイントネーションには京都を感じるし、それがオリジナリティにもなってると

"G.H.E.T.T.O."

10年リリースのSHINGO★西成の2ndアルバム『I・N・G』収録の楽曲。

ANARCHY

81年生まれの京都府出身のラッパー。00年にRUFF NECKの一員として頭角を現し、06年にはRyuzoの主宰レーベル・R-RATED RECORDSから1stアルバム『ROB THE WORLD』をリリース。最新アルバムは21年リリースの『NOISE CANCEL』。

CamScannerでスキャン

思いますね。

C　UKロックも、イギリス英語じゃなくてアメリカ英語にしたほうが売れるっていう時期があったらしくて。

――**ローリング・ストーンズ**の**"(I Can't Get No) Satisfaction"**の「サティスファクション」の発音がそうだというよね。

C　いま俺らが使ってる日本語も、どこかの訛りや、地方の言葉が混ざってると思うんですよね。俺はそこまで訛ってないほうだと思うんですけど、それでも俺が標準語のイントネーションで「マジでヤバいじゃん！」みたいなことを言ったら、それは多分キショい（笑）。

――そこに地に足のついてない感じが出てしまうというか。

C　そう。だから土地柄から出てきてる言葉はやっぱりオリジナルだから、それを大事にしたほうがいいかなって思いますね。

R　それこそCreepy Nuts**"フロント9番"**でモチーフにした、**やしきたかじん"やっぱ好きやねん"**も、「すっきゃねん」と発音することで、意外な音のハマりをするけど、「やっぱ」は基本的には関西弁ではないんですよね。

ローリング・ストーンズ
62年から今なお現役のイギリスのロックバンド。

"(I Can't Get No) Satisfaction"

65年にアメリカでシングルリリース、アルバム『Out of Our Heads』収録のローリング・ストーンズの代表曲。

"フロント9番"

22年にリリースされたCreepy Nutsのアルバム『アンサンブル・プレイ』に収録の楽曲。

CamScannerでスキャン

関西だったら「やっぱし」になる。

C あ、「やっぱ好きやねん」は造語なんだ！

R でも、あの曲ができたことによって「やっぱ」を普通に使うようになったという話をききましたね。ちょっと話は変わるけど、チコの音楽的な原体験は何やったん？　どっちかというとバンド？

C ポップスや、ELLEGARDENみたいなバンドだね。俺もバンドのボーカルをやってました。逆にヒップホップは遠ざけてたんだよね。スペシャとかMTVでいろんな音楽を小学校の頃から聴いてたけど、ヒップホップにはなんにも感じなかった。エミネムが中学校ぐらいのときに流行って、『8マイル』も観たけど、映画としてはオモロかったけど、ヒップホップ的な側面は……みたいな（笑）。

R マジか！　まさかその時は自分のリリック（KEN THE 390〝真っ向勝負 feat. MC☆ニガリ a.k.a 赤い稲妻、KOPERU、CHICO CARLITO、晋平太〟）でサンプリングするとは……。

C 思ってもなかった（笑）。でも、SOUL'd OUTは聴いたな。〝イルカ〟とか。

やしきたかじん
49年生まれの歌手。『たかじん胸いっぱい』や『たかじんのそこまで言って委員会』などタレントとしても関西のお茶の間を賑わせた。14年に死去。

やっぱ好きやねん
86年にリリースされたやしきたかじんの大ヒット曲。作詞作曲は静岡県出身の鹿紋太郎が手掛けた。

ELLEGARDEN
98年に結成された細美武士、生形真一、高田雄一、高橋宏貴からなるロックバンド。01年にミニアルバム『ELLEGARDEN』で全国デビュー。08年に活動休止し、18年に活動再開を果たした。

〈PURE,PURE,PURE,PURE,PURITY〉ね。

R それは**〝ALIVE〟**。〝イルカ〟は〈Quick,Quick,Quick Turn〉やな。

C ハハハ！ オタクだし、あんまり変わんねえし（笑）。で、18歳で高校卒業したあたりで、**鬼**さんの**〝小名浜〟**、**NORIKIYO**さんの**〝2 FACE（feat. BES）〟**、漢さん**〝何食わぬ顔してるならず者〟**、**THA BLUE HERB〝路上〟**。ANARCHYさんの**〝Fate〟**、小林勝行さんの〝108bars〟……そういう曲に出会ったんですよね。「こんなこと歌ってOKなの？」という驚きもあったし、「今まで誰がこんなこと歌ってきた？」という格好良さも衝撃だったっすね。全然自分と違う環境、境遇の人たちのラップを聴いて、こういう世界があって、こういうことを歌にしてるラッパーたちがいるんだ、すごいなと。それで初めて〝小名浜〟聴いた1ヶ月後にはバトル出てた。

R バトルに出るまで早すぎてわけわからんわ（笑）。

C 高校卒業してから唾奇とかに出会って、クラブ行くようになったんだけど、そこでいろんなヒップホップのライブを生で観て「絶対俺にもできる！」って思って、その帰り道からラップ始めてた（笑）。

〝真っ向勝負〜〟

16年にリリースされたKEN THE 390のミニアルバム『真っ向勝負』収録の楽曲。

〝イルカ〟〝ALIVE〟

SOUL'd OUTの9thシングル表題曲〝イルカ〟と、10thシングル表題曲〝ALIVE〟（どちらも05年）。

R　そういう経歴がチコの特色でもあると思いますね。バンドやポップミュージックの素養があった上で、ハードなヒップホップにもシンパシーを覚えるっていう。歌詞はどうやって書き始めたの？

C　例えばエルレの英語の歌詞を一生懸命辞書開いて和訳して、「あー、こうやって歌詞書いてるんだ」とか分析したかな。

R　それが俺にとってはエミネムの**〝Lose Yourself〟**。耳コピでまずはカタカナに起こして、一個ずつ英語で調べて「こういう意味なんや」っていう。

C　わかる。USとか英語の曲をツタヤでいっぱい借りて、原曲の英語と和訳を見るのがめっちゃ好きだった。

R　それはほぼバンド系？

C　そうね。リンキン、**オフスプリング**、**ゼブラヘッド**……。

R　俺は50セント、エミネム、**スヌープ・ドッグ**……。で、50の和訳を見て超がっかりするっていう（笑）。ホンマは上手いこと言ってるんやろうけど、和訳すると「俺は何も恐れねえ、誰でもかかってこい」みたいなことしか言ってない（笑）。

鬼
78年生まれの福島県いわき市小名浜出身のラッパー。08年に鬼一家名義でアルバム『赤落』をリリース。ドラム、ベース、MCの3ピースバンド・ピンゾロとしても活動している。

〝小名浜〟

08年にリリースされた鬼一家『赤落』および、14年リリースの鬼のベストアルバム『あとがき』収録の楽曲。

NORIKIYO
79年生まれ。SD JUNKSTAのリーダー。『CONCRETE GREEN』やSEEDAの『花と雨』（K-NERO名義）、『街風』などに客演参加し、07年に1stアルバム『EXIT』をリリース。多作で知られる。

C ハハハ。でも英語でもリル・ウェインの"6 Foot 7 Foot"の「ラザニア（lasagna）」のくだりとかヤバいじゃん！

R 「lasagna」の「G」は発音しない（黙字）ところから、（real G's move in silence like lasagna）「本物のG（ギャングスタ）はラザニアみたいに静かに動く」って。あれはヤバいよなぁ……。

C そういうリリシズムってさ、中学生のときにはわからないじゃん？ だからもう1回リンキンとかオアシスの原曲の歌詞と和訳を読んでみようかなって思った。気づかないところで絶対踏んでるからさ。グリーンデイとかも。

R あっちの人らは歌詞書く上でライムするのが大前提やもんな。

——作品で言えば、チコくんの"Here I Am"にRくんが参加しましたね。

R 2人で作るのは楽しいな。"Shooting Star"も楽しかったし。

C でもあれは俺が先にテーマ出して、そこにRが乗っかっただけじゃん。ズルしてんじゃん！（笑）

R いや、ズルちゃう。アンサー的な感じ（笑）。後攻の妙というか、後攻の美ですから。

"2 FACE (feat. BES)"

THA BLUE HERB

C 『ダンジョン』からずっと後攻。次は俺に後攻させてよ（笑）。

R ハハハハ！ 確かに（笑）。チコの場合、一時期シーンから離れてた時期があったけど、"Ryukyu Style"と"**Red Bull 64Bars**"で余裕でカムバックしてきたのが、俺的に「チコやな」と思った。作品を通して、結局「ラップ力」で戻ってきたんですよね。それも、ヘッズとか同業からしても、シーン的なブランクが気にならんぐらいのアップデート具合で戻ってくるから。

C 全然自由に作った曲だったんだよね。そういうキャリアとか「間」の時間について超考えて作ったわけでもないし。

R その恐ろしさがある……。

C でも、沖縄に帰ってた2年ぐらいで、50曲ぐらいボツにしたから、**hokuto**はホントに怒ってるよ（笑）。

R そうなんや（笑）。

C 「これはマジで出して……」って言われた曲も「ごめんなさい……」って、何個ボツにしたんだろう。待っててくれた人たちには申し訳ないですね。

――その蓄積の上にあるというか。

"路上"

02年にリリースされたTHA BLUE HERBの2ndアルバム『Sell Our Soul』収録の楽曲。13分以上におよぶ大作。

"Fate"

08年にリリースされたANARCHYの2ndアルバム『Dream and Drama』収録の楽曲。

"Lose Yourself"

02年にエミネム主演の映画『8マイル』の主題歌として同映画のサウンドトラックに収録された。ラップの主題歌としては初めてのアカデミー賞歌曲賞を受賞。

C　すべて蓄積です。

——これからもコラボのイメージはありますか？

C　ぜんぜんありますよ！

R　やりたいやりたい！　一緒に作ったら勉強になりますからね。

C　Rとはサビも一緒に作ってみたいっすね。『アンサンブル・プレイ』で、Rはけっこう裏声いってるじゃない？　あれがどういう意図だったのかとかも超聞きたい。

——それは普通に聞くというよりは、曲を一緒に作っていく中で解析していきたいっていう感じ？

C　そうですね。作りながら知りたいかも。本当に、Rとはいつでも作りたい。最近またいっぱい書いてるので。

R　最近めっちゃ作ってるよな？

C　めっちゃ作ってる。ハタチぐらいから一回もラップ以外の仕事したことないし、ラップしかしてなかったから、いま改めてちゃんとラップに向き合おうと。

R　俺もまったく一緒。ラップなくなったらヤバい（笑）。

オフスプリング
84年に結成されたバンド。94年の『Smash』、98年の『Americana』が大ヒット。

ゼブラヘッド
96年に結成されたバンド。00年の『Playmate of the Year』が大ヒット。

スヌープ・ドッグ
71年生まれ。ドクター・ドレーに見い出され、93年に1stアルバム『Doggystyle』をリリース。

リル・ウェイン
82年生まれ。11歳の時にキャッシュマネーレコードのオーナーであるバードマンと出会い、最年少メンバーとして契約。99年に1stアルバム『Tha Block Is Hot』をリリース。04年には長年続くシリーズとなるアルバムの一作目である『Tha Carter』をリリースした。

CamScannerでスキャン

C 6曲ぐらい一緒に作りたいね。

——最近、コラボアルバムがなかなか無いから、やってもいいんじゃないですか？

R たしかに。結局、ラッパー同士でやるのってピリピリしますからね。

——今回の単行本のおまけに付けるっていうのは？

R え、単行本はいつ出す予定ですか？

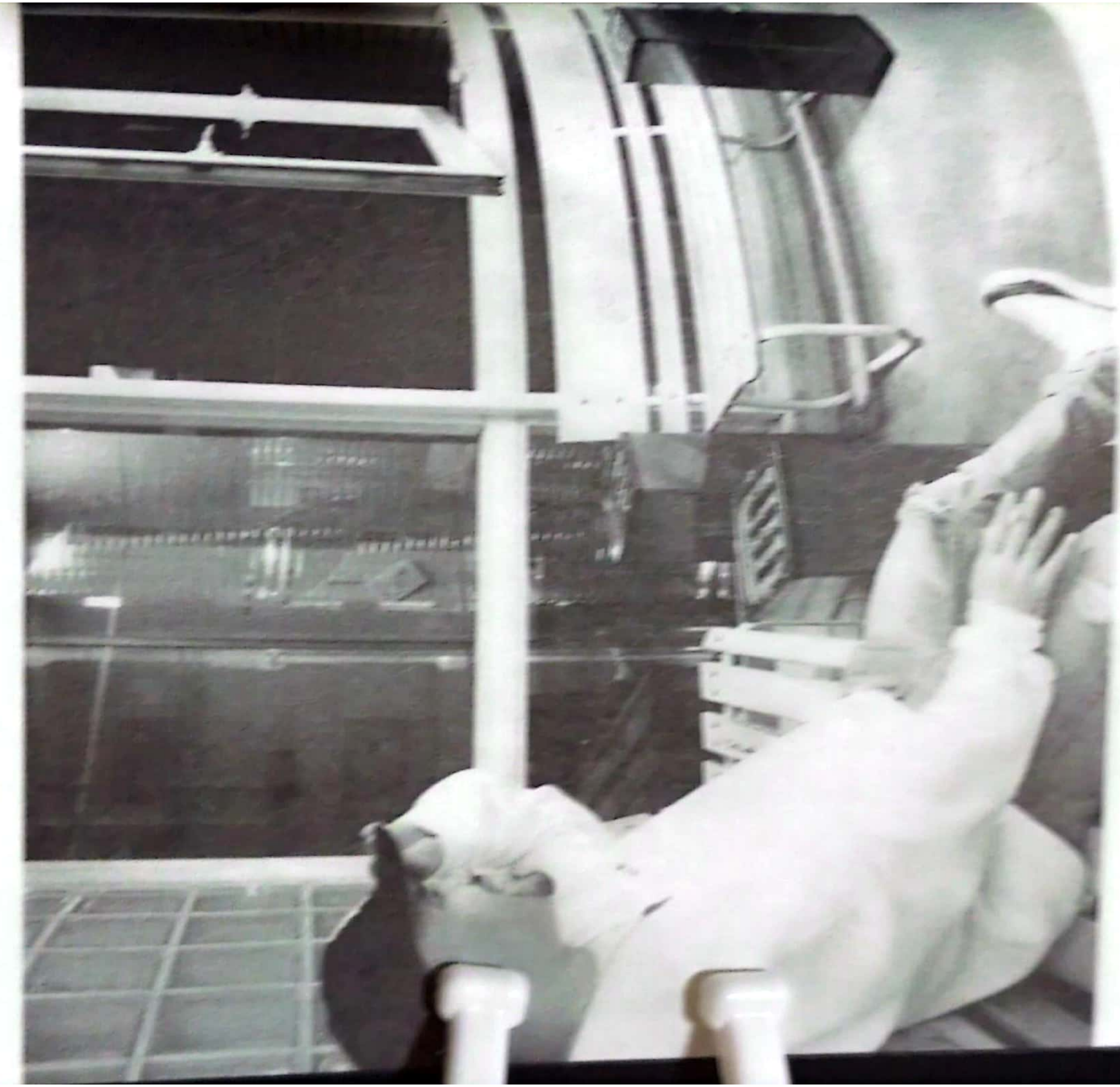
——再来月だね。

R 無理無理絶対無理！（笑）

C 無理やー（笑）お後がよろしいようで（笑）。

"6 Foot 7 Foot"
11年にリリースされたリル・ウェインのアルバム『Tha Carter Ⅳ』収録の楽曲。

グリーンデイ
87年に結成されたアメリカのバンド。94年のメジャーデビューアルバム『Dookie』から大成功を収め、コンスタントにヒット作を連発。04年の『American Idiot』も世界的ヒットとなった。

"Shooting Star"

21年にリリースされたhokutoの2ndアルバム『plums』収録の楽曲。